

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第312集

豊中市

# 庄 内 遺 跡

(仮称) 庄内さくら学園整備事業に伴う庄内遺跡第5次発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター



# 序 文

豊中市は大阪府の北西部に位置する、人口約 40万人が暮らす北摂有数の住宅都市です。近代に入り、箕面線箕面有馬電気軌道(現在の阪急宝塚線)が開通すると、急速に宅地化が進みました。そして、大阪の近代化とともに名神高速道路や阪神高速道路が開通し、さらに大阪国際空港が建設され、現在における陸空の交通の要衝としての顔も持ち合わせております。

豊中市がこのような発展を遂げた背景には、古来より能勢街道と西国街道が交差する陸上交通の要衝であったのみならず、瀬戸内水運と神崎川・淀川水運が交接する、交通の便に恵まれた土地であったこと無縁ではないでしょう。

さて、今回発掘調査を行った庄内遺跡ですが、昭和2(1927)年に庄内尋常高等小学校(現在の庄内小学校)の校舎新設に伴う造成の際にみつかった遺跡です。その時、出土した土器の中に弥生時代から古墳時代へと移行する時期の土器が含まれていることがわかり、これらの土器は出土した地名から「庄内式土器」と命名され、標式土器としてその名を広く知られるようになりました。そして、現在においても弥生時代から古墳時代へ移行する社会を解明するための重要な土器として位置づけられており、研究者の間でも注目を集めています。

今回の調査では、庄内式土器を含む時期の遺構をはじめ、古墳時代中期、さらには平安時代や中世の遺構や遺物が多数みつかりました。調査成果が、豊中市域の歴史を解明する一助となり得れば幸いです。

最後になりましたが、日頃より大阪府文化財センターの業務に多大なるご理解とご協力を賜っております、地元の方々や豊中市財務部施設課、豊中市教育委員会事務局学校施設管理課、ご指導いただいた豊中市教育委員会事務局社会教育課をはじめ関係機関には感謝の意を表すとともに、今後ともセンターの業務にご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和3年11月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 坂井秀弥



# 例　　言

1. 本書は大阪府豊中市庄内幸町4丁目5他29筆に所在する庄内遺跡第5次発掘調査報告書である。
2. 調査は、豊中市教育委員会の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、豊中市教育委員会の指導・監理のもと、豊中市教育委員会と合同で実施した。現地調査および出土遺物整理、ならびに報告書作成にかかる受託契約と契約期間は以下のとおりである。

委託事業契約名　庄内遺跡第5次発掘調査

委託契約期間　令和2年9月1日から令和3年11月30日

現地調査を令和2年9月1日に開始し、令和3年3月31日に終了した。遺物整理作業は令和3年4月1日より開始し、同年8月31日まで行い、令和3年11月30日に本書の刊行をもって事業を完了した。

3. 本調査の実施体制は以下のとおりである。

令和2年度

豊中市教育委員会事務局

事務局長 小野雄慈、社会教育課長 大澤亮太、主幹 清水 篤、課長補佐 佐藤宏隆、文化財保護係長 荒井啓子、主査 橘田正徳

公益財団法人 大阪府文化財センター

事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 佐伯博光、主査 後藤信義、技師 尾崎裕妃

令和3年度

豊中市教育委員会事務局

事務局長 小野雄慈、社会教育課長 大澤亮太、主幹 清水 篤、課長補佐 荒井啓子、文化財保護係長 橘田正徳

公益財団法人 大阪府文化財センター

事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聰、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 佐伯博光、主査 後藤信義

4. 遺物写真撮影は、中部調査事務所写真室が行った。

5. 調査の実施にあたっては、以下の諸機関にご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表す。  
大阪府教育庁文化財保護課、豊中市財務部施設課、豊中市教育委員会事務局学校施設管理課、株式会社森長組

6. 外来系土器の鑑定には、中居和志、桐井理揮（京都府教育庁）にご教示を得た。

7. 本書の執筆は後藤と尾崎が、編集は後藤が担当した。

8. 出土遺物ならびに測量データ、実測図、写真などの各種資料は、豊中市教育委員会で保管している。広く活用されることを希望する。

# 凡例

1. 遺構平面図および断面に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はmである。
3. 全体図および遺構図の方位は、いずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。真北は西に $0^{\circ}19'$ 、磁北は西に $7^{\circ}32'$ 振っている。
4. 現地調査および遺物整理に関しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構名は、検出順に通し番号（連番）の後ろに遺構の種類（例：3土坑・25溝）をつけて表示している。但し、複数の柱穴や遺構で構成される掘立柱建物や竪穴建物に関しては新たに1からの通し番号を掘立柱建物1・竪穴建物1のように遺構種別の後に付与している。遺構名は基本的に現地調査時に付与したものを使用しているが、一部のものについては整理し、統一した。
7. 遺構図の縮尺に関しては、基本的に全体図は200分の1・250分の1、個別遺構の平・断面図および竪穴建物は40分の1、掘立柱建物は60分の1で、調査区壁断面図は40分の1・60分の1で記載した。また、遺物実測図については4分の1で掲載した。なお、写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
8. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りで表現した。
9. 本書に掲載した遺物には通し番号を付しており、これは本文・挿図・写真図版とも一致する。

## 【参考・引用文献】

- 橋田正徳 2003 「庄本遺跡第1次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成15年度(2003年度)』 豊中市教育委員会
- 橋田正徳 2012 『上津島南遺跡』 府営上津島住宅遺跡調査団・府営上津島住宅(第2期) 遺跡調査団
- 橋田正徳 2014 『庄内遺跡第4次発掘調査報告書』 豊中市教育委員会
- 服部聰志他 2018 『新免遺跡 第68・69・70次』 豊中市教育委員会
- 新海正博 2013 『螢池北遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター
- 福佐美智子 2016 『服部遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター
- 豊中市史編さん委員会 2005 『新修 豊中市史』 第4巻 考古
- 豊中市史編さん委員会 2009 『新修 豊中市史』 第1巻 通史1
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編I』 木耳社
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編II』 木耳社
- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』 真陽社
- 古代の土器研究会編 1993 『古代の土器2 都城の土器集成II』 真陽社
- 古代の土器研究会編 1994 『古代の土器3 都城の土器集成III』 真陽社
- 古代の土器研究会編 1996 『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』 真陽社
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究』 真陽社
- 難波洋三 1992 「第6節 徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址研究 第九』 財団法人大阪市文化財協会
- 橋田正徳 2004 「庄本遺跡からみた神崎川下流域の流通」『中世土器の基礎研究XVIII』 日本中世土器研究会
- 橋田正徳 2013 「難波津から河尻へ—中世的流通構造の成立過程—」『古文化談叢』第70集 九州古文化研究会

# 目 次

序文  
例言  
凡例  
目次

第1章 調査に至る経緯と経過・調査の方法.....(後藤).....	1
第1節 調査に至る経緯と経過.....	1
第2節 調査の方法.....	3
第2章 位置と環境.....(尾崎).....	5
第1節 地理的環境.....	5
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 調査成果.....(後藤).....	9
第1節 基本層序.....	9
第2節 A区の調査.....	14
1. 古墳時代中期の遺構と遺物.....	14
2. 中・近世の遺構と遺物.....	36
3. 包含層の遺物.....	37
第3節 B区の調査.....	38
1. 弥生時代の遺構と遺物.....	38
2. 古墳時代中期の遺構と遺物.....	41
3. 平安時代の遺構と遺物.....	41
第4節 C区の調査.....	41
1. 庄内期から古墳時代前期の遺構と遺物.....	41
2. 古墳時代中期の遺構と遺物.....	55
3. 平安時代の遺構と遺物.....	64
4. 中世の遺構と遺物.....	70
5. 包含層の遺物.....	72
第4章 まとめ.....(後藤).....	74

写真図版  
報告書抄録  
奥付

## 挿図目次

図 1 今回の調査区と既往の調査区	2	図 36 C区土坑平面・断面	43
図 2 地区割りの方法	3	図 37 C区土坑出土遺物	44
図 3 調査区地区割り	4	図 38 C区土坑平面・断面 出土遺物(1)	45
図 4 遺跡分布図	6	図 39 C区土坑平面・断面 出土遺物(2)	46
図 5 A区東壁・南壁断面	10	図 40 C区 94井戸平面・断面 出土遺物	47
図 6 B区東壁断面	11	図 41 C区 20ピット平面・断面 出土遺物	48
図 7 B区北壁断面	12	図 42 C区ピット平面・断面	49
図 8 C区北壁・東壁断面	13	図 43 C区溝平面	50
図 9 A区第2層下面	15・16	図 44 C区溝断面	51
図 10 A区竪穴建物2平面・断面	17	図 45 C区溝出土遺物	52
図 11 A区竪穴建物2出土遺物	18	図 46 C区 86溝断面 出土遺物	53
図 12 A区土坑平面・断面	20	図 47 C区竪穴建物1・61溝平面・断面	56
図 13 A区 304土坑平面・断面	21	図 48 C区竪穴建物1・61溝出土遺物	57
図 14 A区土坑出土遺物	22	図 49 C区掘立柱建物1平面・断面	58
図 15 A区 264・278ピット平面・断面 出土遺物	23	図 50 C区掘立柱建物1柱穴断面	59
図 16 A区溝平面	24	図 51 C区掘立柱建物2平面・断面	60
図 17 A区溝断面(1)	25	図 52 C区掘立柱建物2柱穴断面	61
図 18 A区溝出土遺物(1)	26	図 53 C区掘立柱建物3平面・断面	62
図 19 A区 267溝出土遺物(1)	27	図 54 C区掘立柱建物3柱穴断面 200ピット 出土遺物	63
図 20 A区 267溝出土遺物(2)	28	図 55 C区 111土坑・205ピット平面・断面 出土遺物	64
図 21 A区溝出土遺物(2)	29	図 56 C区溝断面 出土遺物(3)	65
図 22 A区溝断面(2)	30	図 57 C区掘立柱建物4平面・断面	66
図 23 A区溝出土遺物(3)	31	図 58 C区掘立柱建物4柱穴断面 154・157ピッ ト出土遺物	67
図 24 A区溝出土遺物(4)	32	図 59 C区井戸平面・断面	67
図 25 A区 250落込み平面・断面 出土遺物	33	図 60 C区 180井戸平面・断面 出土遺物	68
図 26 A区 246土坑平面・断面、288溝断面	34	図 61 C区 56ピット平面・断面 出土遺物	69
図 27 A区 286溝杭列検出状況	35	図 62 C区溝断面 出土遺物(4)	69
図 28 A区 286・287溝断面	35	図 63 C区4落込み平面・断面 出土遺物	71
図 29 A区 286溝出土遺物	36	図 64 C区1・2溝断面	72
図 30 A区包含層出土遺物	37	図 65 C区包含層出土遺物	73
図 31 B区 240流路平面・断面 出土遺物	38	図 66 遺構変遷図(1)	75
図 32 B区第2層下面	39	図 67 遺構変遷図(2)	76
図 33 B区土坑平面・断面 出土遺物	39		
図 34 B区 238井戸平面・断面 出土遺物	40		
図 35 C区第2層下面	42		

# 写真図版目次

## 写真図版1 遺構

1. A区東壁断面(西から)
2. A区南壁断面(北から)
3. A区西半部全景(東から)

## 写真図版2 遺構

1. A区西半部全景(西から)
2. A区東半部全景(南西から)

## 写真図版3 遺構

1. A区竪穴建物2遺物出土状況(北東から)
2. A区竪穴建物2遺物出土状況アップ(東から)
3. A区竪穴建物2完掘状況(北東から)

## 写真図版4 遺構

1. A区280土坑(南から)
2. A区280土坑遺物出土状況アップ(西から)
3. A区304土坑(南西から)
4. A区304土坑遺物出土状況アップ1  
(南西から)

## 写真図版5 遺構

1. A区304土坑遺物出土状況アップ2  
(北から)
2. A区254溝(北西から)
3. A区254溝断面(西から)

## 写真図版6 遺構

1. A区267溝(北西から)
2. A区267溝遺物出土状況(北西から)
3. A区268溝遺物出土状況(南東から)

## 写真図版7 遺構

1. A区281溝(北西から)
2. A区281溝断面(南東から)
3. A区281溝遺物(121)出土状況(東から)
4. A区281溝遺物(135)出土状況(東から)

## 写真図版8 遺構

1. A区283溝遺物出土状況(北西から)
2. A区283溝遺物出土状況アップ(南から)
3. A区299・300溝(北から)

## 写真図版9 遺構

1. A区300溝断面(南西から)
2. A区300溝土製品(159)出土状況  
(南西から)
3. A区302・303溝(東から)
4. A区286・287溝(南東から)

## 写真図版10 遺構

1. B区北壁断面(南から)
2. B区北壁断面(南東から)
3. B区全景(東から)

## 写真図版11 遺構

1. B区240流路断面(南東から)
2. B区239土坑断面(南から)
3. B区238井戸(北から)

## 写真図版12 遺構

1. C区南半部北壁断面(南東から)
2. C区南半部北壁断面アップ(南から)
3. C区東壁断面(西から)

## 写真図版13 遺構

1. C区北半部全景(北東から)
2. C区南半部全景(北西から)

## 写真図版14 遺構

1. C区24土坑(東から)
2. C区38土坑(南東から)
3. C区73土坑炭層検出状況(南西から)

## 写真図版15 遺構

1. C区181土坑(南東から)
2. C区94井戸遺物出土状況(北西から)
3. C区94井戸(北西から)

## 写真図版16 遺構

1. C区188土坑(北東から)
2. C区86溝遺物出土状況(西から)
3. C区189溝(南西から)
4. C区189溝遺物(241・242)出土状況  
(北から)

写真図版 17 遺構

1. C区竪穴建物1・61溝(南から)
2. C区竪穴建物1(南から)

写真図版 18 遺構

1. C区竪穴建物1断面(南から)
2. C区61溝断面(南から)

写真図版 19 遺構

1. C区掘立柱建物1～3(南から)
2. C区掘立柱建物1(南西から)

写真図版 20 遺構

1. C区掘立柱建物2(南西から)
2. C区掘立柱建物3(南西から)

写真図版 21 遺構

1. C区掘立柱建物4(南から)
2. C区153井戸(南西から)
3. C区153井戸断ち割り状況(南から)
4. C区180井戸(西から)
5. C区56ピット遺物(316)出土状況(南から)

写真図版 22 遺構

1. C区5溝断面(南から)
2. C区7溝断面(南西から)
3. C区104溝断面(南から)
4. C区2溝断面(西から)
5. C区4落込み(北東から)

写真図版 23 遺物

写真図版 24 遺物

写真図版 25 遺物

写真図版 26 遺物

写真図版 27 遺物

写真図版 28 遺物

写真図版 29 遺物

写真図版 30 遺物

# 第1章 調査に至る経緯と経過・調査の方法

## 第1節 調査に至る経緯と経過

庄内遺跡は、昭和2（1927）年に庄内尋常高等小学校の校舎新築に伴う造成盛土の掘削を行った際に、弥生土器や土師器などが多数出土したことにより、発見された遺跡である。

昭和40（1965）年、田中琢氏によって、出土した土器の中に弥生時代後期（畿内V様式）と古墳時代前期（布留式土器）の隙間を埋める土器様相が存在することが指摘され、これらの土器群を遺跡名から「庄内式土器」と呼称することが提唱された。この庄内式土器は単なる標式土器としてではなく、古墳時代の始まりを決定づける重要な土器様式であると認識されてきた。ちなみに、これらの庄内式土器と呼称された甕形土器は在地産の土器ではなく、河内地域からの搬入品であり、庄内式土器の本貫地は河内地域にある。

しかし、遺跡が発見されてから長らく本格的な発掘調査が行われることがなかったため、庄内遺跡については弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であるという認識があったものの、その実態については知られることがなかった。

昭和60（1985）年に庄内幸町4丁目において、病院建て替えに伴って試掘調査（庄内遺跡第1次発掘調査）と、同病院にかかる第2期工事に伴う試掘調査が実施された（第2次発掘調査）。その結果、当遺跡が弥生時代後期から古墳時代にかけて継続する集落遺跡であることが追認された。その後、平成元（1989）年に共同住宅建築に伴う試掘調査が行われ（第3次発掘調査）、遺跡の範囲が東へ広がることが確認された。この調査の結果、当遺跡が中世前期にも集落遺跡として存在したことが判明した。そして、平成25（2013）年に病院の増築に伴う発掘調査が行われ（第4次発掘調査）、遺跡の立地や土錐などの出土遺物から、海浜部近くの漁撈を生業とする集落遺跡である可能性が指摘された。

今回の調査は、豊中市が平成29（2017）年に策定した「庄内地域における『魅力ある学校』づくり計画」事業の一環である「(仮称) 庄内さくら学園整備事業」に先立って、令和元（2019）年に豊中市教育委員会が工事箇所である市立庄内小学校および市立第六中学校の敷地について確認調査を実施し、遺構・遺物が確認できた5箇所について、記録保存のための発掘調査が必要と判断されたものである（図1）。

そこで、発掘調査の実施に関して、令和2（2020）年5月28日に豊中市教育委員会と公益財団法人大阪府文化財センター（以下、センター）で庄内遺跡第5次発掘調査にかかる協定書を締結し、豊中市とセンターが共同調査を行うこととなった。

この協定書に基づき、令和2（2020）年8月12日に庄内遺跡第5次発掘調査の委託契約を豊中市教育委員会とセンターで締結した。

共同調査における豊中市教育委員会とセンターの役割分担については、表土機械掘削および残土処分について豊中市教育委員会が直接実施し、それ以外の発掘調査作業ならびに遺物整理作業を、豊中市教育委員会の監理のもとセンターが実施することとなった。

現地調査は、令和2（2020）年9月1日より令和3（2021）年3月31日まで実施した。調査はまず、C区南調査区から着手した。それぞれの調査期間は以下のとおりである。

C区南 令和2（2020）年9月1日～10月9日

C区北 10月12日～11月27日

B区 11月25日～12月11日

A区西 12月14日～令和3（2021）年2月12日

A区東 2月15日～3月31日

なお、令和3（2021）年3月28日に地元住民にむけての現地公開を、A区東で開催した。当日は雨天だったにも関わらず、110名の参加者があり、熱心に遺構や出土遺物を見学され、また、担当者への質問も多く、たいへん有意義な現地公開であった。

現地作業終了後、令和3（2021）年4月1日より遺物整理作業を開始した。遺物整理作業は、出土した遺物について接合・復元作業を行い、遺跡を理解するうえで必要不可欠な遺物を抽出し、遺物実測を行うとともに必要に応じて遺物写真撮影を行って、写真図版に掲載した。

遺構・遺物挿図・写真図版を作成し、原稿執筆作業を行い、これらを本報告書に掲載した。また、遺物整理作業の終了に伴い、出土遺物・遺構図データ・写真・台帳などの資料を豊中市教育委員会に移管した。これらの作業は令和3（2021）年8月31日に終了し、同年11月30日に本書の刊行をもって本事業を完了した。

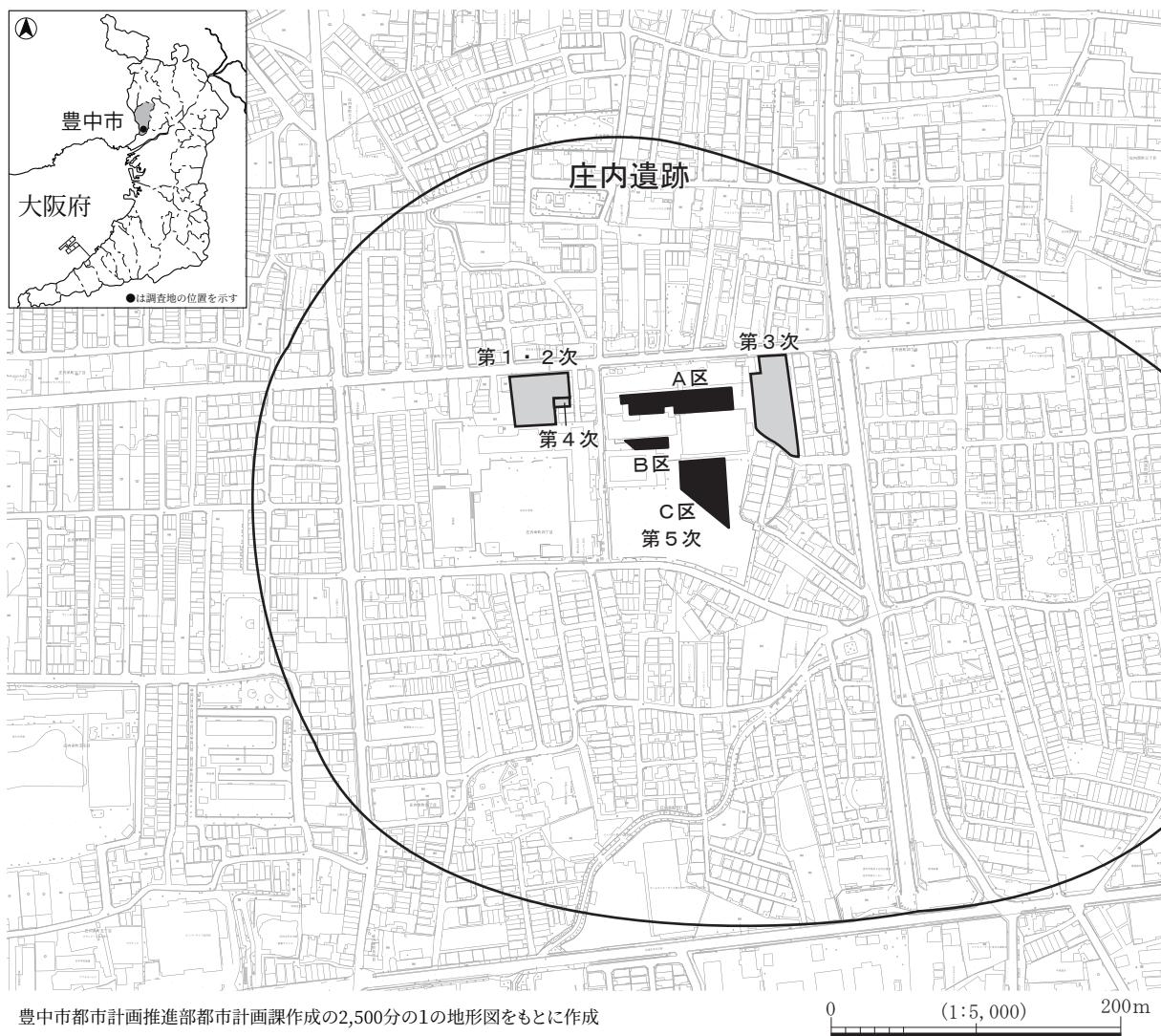


図1 今回の調査区と既往の調査区

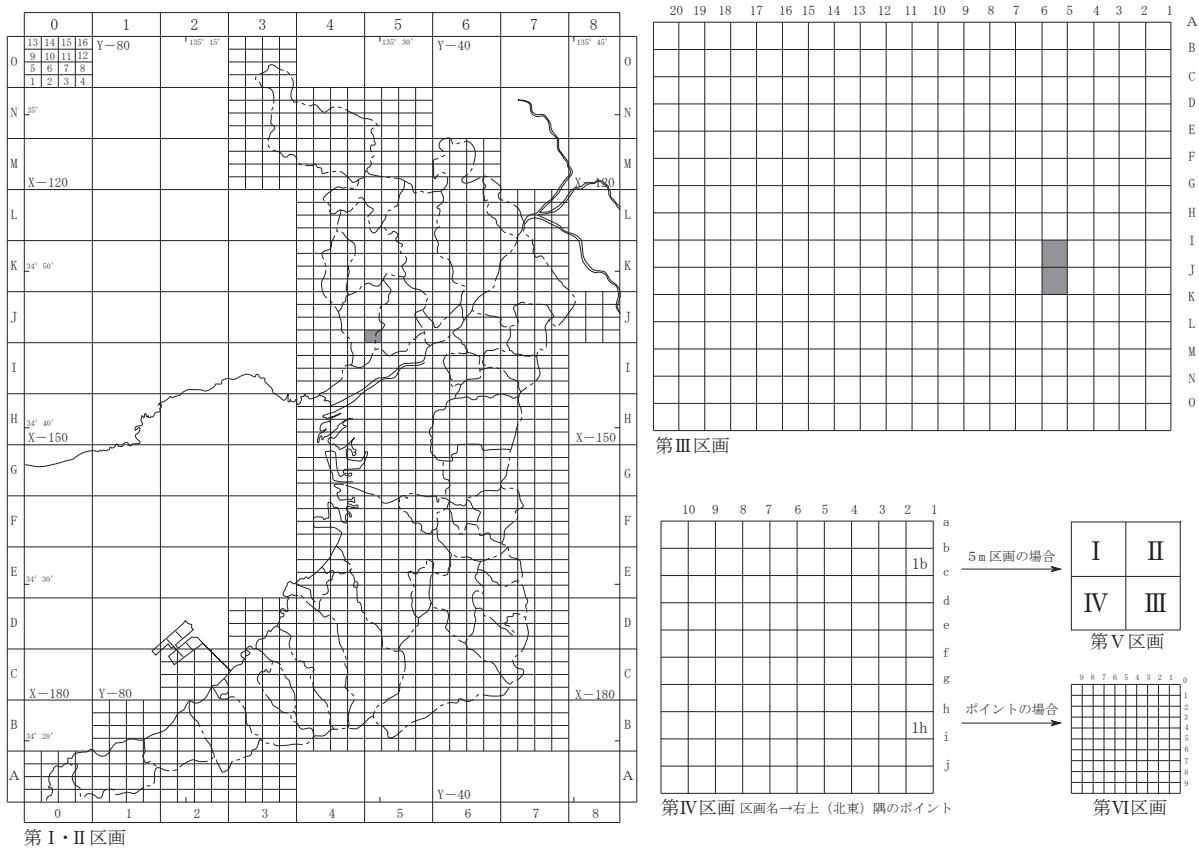


図2 地区割りの方法

## 第2節 調査の方法

発掘調査は、豊中市教育委員会(以下、豊中市)と協議の上、概ねセンターの『遺跡調査基本マニュアル』(公益財団法人 大阪府文化財センター 2010)に基づいて実施した。

また、今回の調査では、遺構の平・断面図や出土状況図などの測量、および出土遺物の基本整理作業の作業支援を株式会社島田組に業務委託し、これを実施した。

**地区割り** 世界測地系(測地成果 2000)の平面直角座標系第VI系に則り、地区割りを行った。地区割りの設定は図2に示すように、第I～第VI区画に区画し、主に第III・第IV区画を使用して遺物の取り上げを行ったが、一部、第V区画を使用して詳細な取り上げを行った(図3)。

**遺構番号** 遺構番号は調査区や遺構面に関わらず、通し番号を付しており、例えは「1溝」や「24土坑」のように番号の後に遺構種類名称を付した。また、これとは別に、竪穴建物など複数の遺構が集合した遺構に対しては、「竪穴建物1」のように遺構種類名称の後に遺構番号を付した。

**掘削** まず、豊中市により、現代盛土、近・現代耕作土層および近世耕作土層を、重機によって除去した。その後、センターにより、中世から古墳時代の遺物包含層を人力で掘削を開始し、遺構面および遺構の検出を行った。

**図面作成** 検出した遺構に対して、トータルステーションやデジタルカメラを使用した測量を行い、遺構平面図・断面図・遺物出土状況図を必要に応じて、10分の1、20分の1、40分の1の縮尺で適宜作成した。また、遺構全体図についてもデジタル測量を行って20分の1縮尺の平面図を作成した。

これらの図面はDVDに焼き付けてデータで保管するとともに、紙に打ち出してファイリングした。

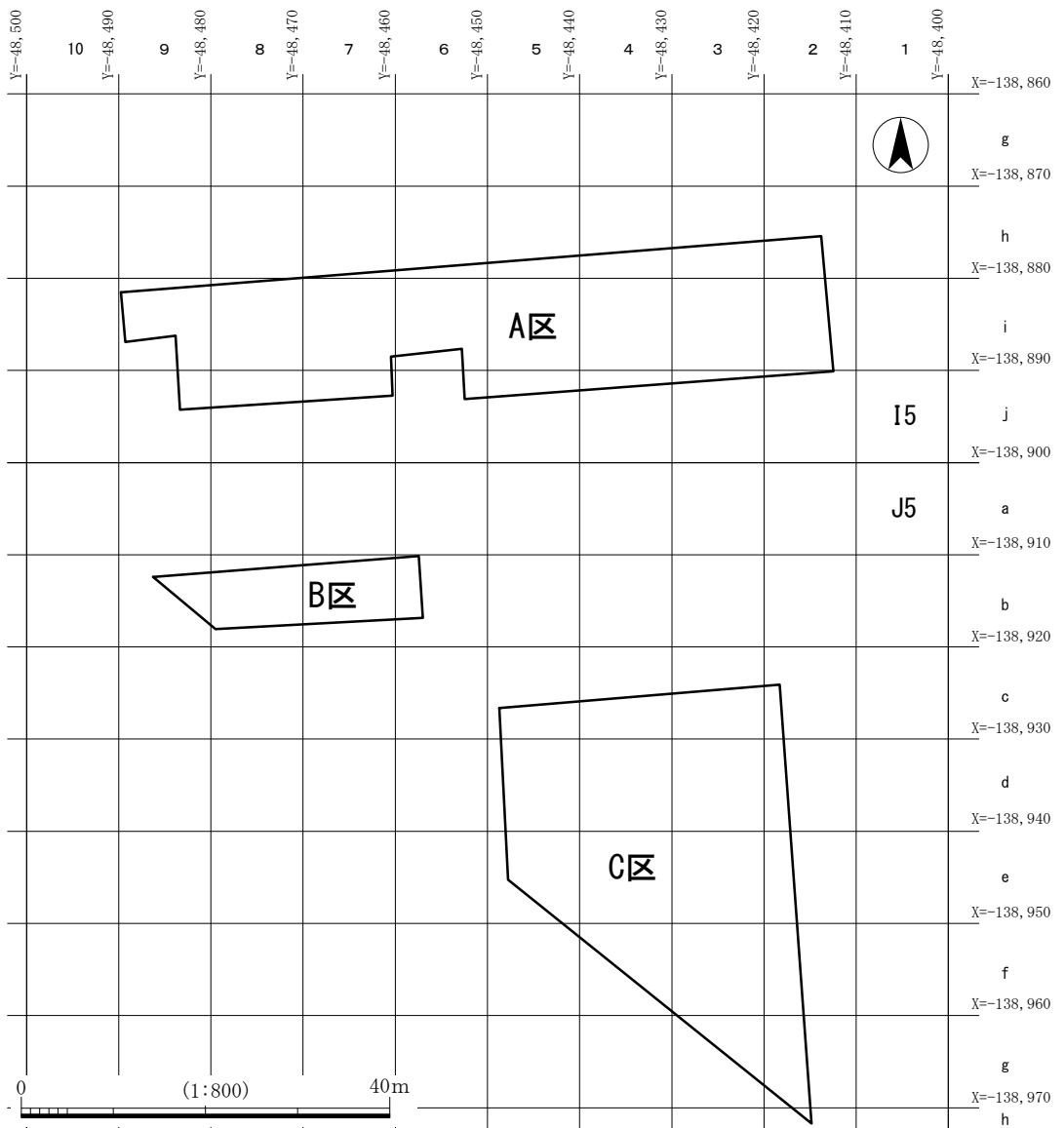


図3 調査区地区割り

**写真撮影** デジタル一眼レフカメラ(ニコン D5300)で撮影を行い、必要に応じて6×7カメラ(白黒・カラーリバーサル)を用いて撮影した。デジタルカメラで撮影したデータはHDDに保存するとともに、打ち出してアルバムを作成した。また、6×7カメラで撮影したものについては、ネガフィルム・ベタ焼・ポジフィルムをそれぞれアルバムに収納した。

**整理作業** 遺構は現地で測量を行ったデジタルデータを編集し、レイアウトおよび浄書をAdobe社製のIllustratorを用いて行った。

遺物は現地で洗浄・注記の基礎整理作業を行った。現地調査終了後に接合作業を行い、実測可能な遺物の抽出を行い、図化のための実測を行った。出来上がった遺物実測図はデジタルトレースを行った後、レイアウトをして遺物挿図を作成した。

さらに、実測した遺物の中から写真図版に掲載する遺物を選別し、中部調査事務所写真室において撮影を行った後、遺物写真図版をレイアウトした。

これらのデータを、Adobe社製のInDesignを用いて編集作業を行った。

なお、遺物は実測を行って報告書に掲載した遺物と、それ以外の未掲載遺物とに分別して収納した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

庄内遺跡は豊中市南部、豊中市庄内栄町3～5丁目、庄内栄町4・5丁目、庄内西町3～5丁目に所在し、南北約500m、東西約700mの範囲に広がる。

庄内遺跡が所在する豊中市は大阪府の北西部に位置する。東は吹田市、西は尼崎市・伊丹市、南は大阪市、北は池田市・箕面市に接する。旧国名は摂津国に属し、市内を南北に縦断する能勢街道は池田市との市境で西国街道と交差するほか、市内には複数の旧街道が存在する。また、水運も発達しており、古来より交通の要衝となっている。

豊中市は北東部の丘陵地から南部へと標高が低くなる特徴を示し、地形で三つに大別される。北東部は大阪層群で形成された、千里丘陵とその周辺に連続する待兼山・刀根山丘陵からなる。中央部は、千里丘陵から派生し、豊中台地と呼ばれる傾斜の緩い洪積層の中～低位段丘である。南部と西部は淀川水系の神崎川（旧三国川）と猪名川が大阪湾に向かって合流し、複数の河川により形成された沖積地が広がる。

庄内遺跡は、神崎川と猪名川の下流域にあたる沖積地に展開した、弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。

### 第2節 歴史的環境

#### （1）旧石器時代・縄文時代

豊中市内では主に待兼山丘陵の西側に広がる低位段丘上において旧石器時代の資料を確認しており、蛍池西遺跡などで国府型ナイフ形石器が出土している。しかし、生活痕跡は確認しておらず実態は不明である。

新免遺跡・蛍池北遺跡で縄文時代早期の押型文土器が出土しているが、集落が出現し始めるのは縄文時代中期以降で、特に市域北部の千里川流域の段丘上に多く分布する。市内南部では沖積地に立地する服部遺跡・穂積遺跡・小曾根遺跡において縄文時代中期～晩期の遺物が出土している。穂積遺跡では中期の海成層を検出しており、出土資料から漁撈活動が行われていたことが確認できる。市内南部は縄文海進以降に海岸線が後退するのに伴い、陸地化が進むことで集落が形成されると考えられ、本格的に集落が展開するのは弥生時代以降となる。

#### （2）弥生時代

弥生時代前期になると沖積地では勝部遺跡、小曾根遺跡、豊中台地では山ノ上遺跡、千里川上流域の中位段丘上に野畠春日町遺跡などの集落が形成される。

中期には台地で新免遺跡を中心とする新しい集落が形成され、丘陵部では高地性集落である待兼山遺跡が出現するように、市内北部を中心に集落が増加する。一方、沖積地では前期から中期にかけて継続する集落は存在するものの、新しい集落が出現する例はこれまでに確認できていない。

中期後半以降、沖積地では上津島南遺跡・服部遺跡・豊島北遺跡に集落が出現する。その後、後期になると利倉遺跡・利倉西遺跡・利倉南遺跡・上津島遺跡・上津島川床遺跡・上津島南遺跡から構成され

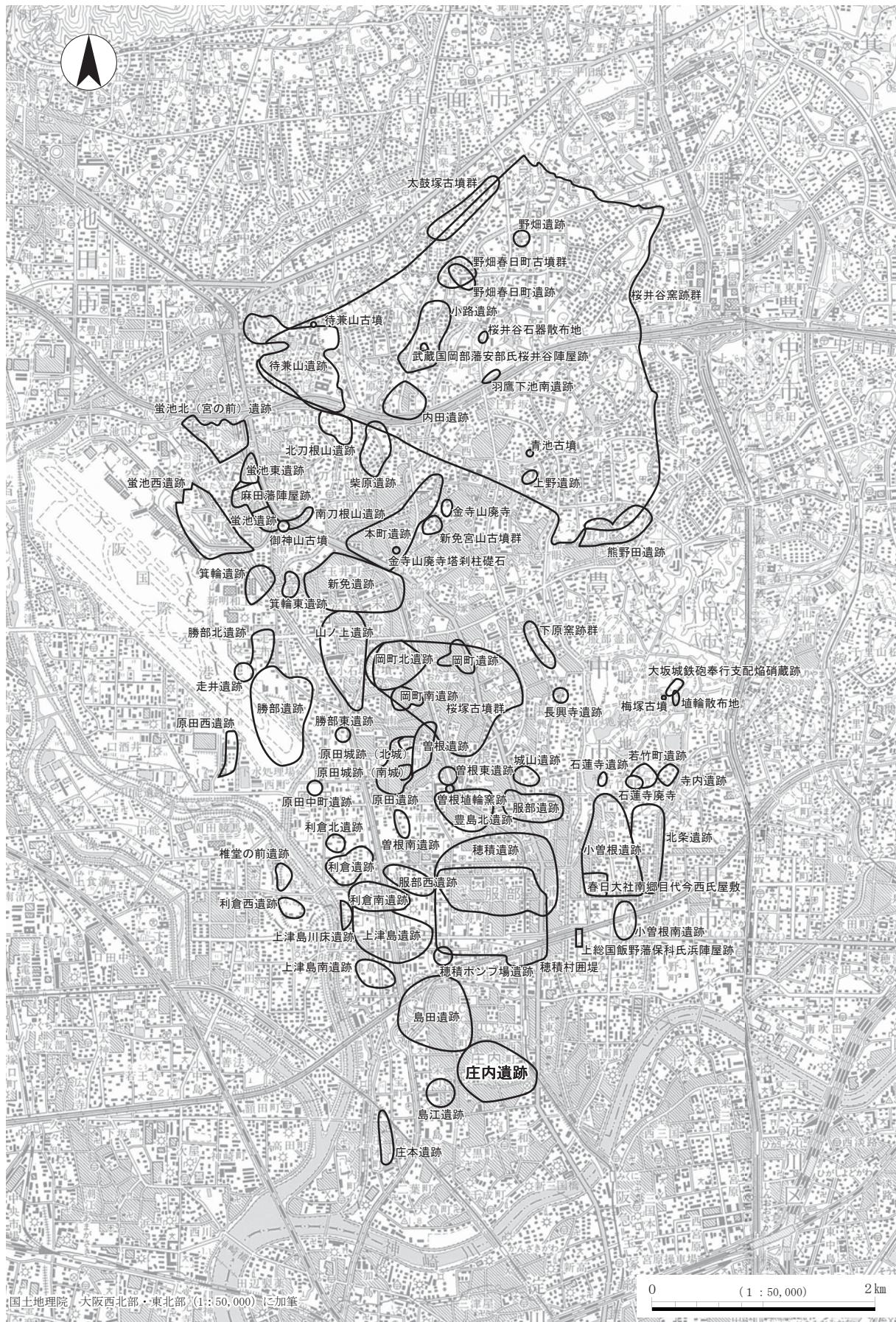


図4 遺跡分布図

る中核的な集落が形成され、これらは「上津島遺跡群」と呼ばれている。

### (3) 古墳時代

庄内式期から古墳時代前期には神崎川と猪名川が合流する海浜部にあたる島田遺跡・庄内遺跡においても集落が広がる。これらの各遺跡では他地域からの搬入土器を確認しており、九州北部、瀬戸内沿岸部や日本海側、近畿北部などの地域との交流があったことが推測される。

また、沖積地の内陸部に立地する穂積遺跡では大規模な集落が展開し、そのほかに北条遺跡・豊島北遺跡・服部遺跡・小曾根遺跡などで集落が形成される。穂積遺跡からは他地域と関連する土器が出土したほか、連鑄式銅鏡の未成品や輪羽口が出土していることから青銅器生産が行われていたことが指摘される。服部遺跡では前方後円形の周溝墓、豊島北遺跡では円形周溝墓群、北条遺跡では方形周溝墓群が築造され、弥生時代から古墳時代への過渡期としての特徴を示す。

中期になると、穂積遺跡などの内陸部に分布する集落の規模が縮小する一方、海浜部では庄内遺跡を含めた各遺跡で集落が拡大していき、中期以降も集落が継続する。上津島遺跡では流路から多量の木製品や未成品が出土していることから木工が行われていたことが推測されるほか、各遺跡で韓式系土器・瓦質土器などが出土していることから、大陸との交流が窺える。また、低位段丘上に位置する螢池東遺跡では、倉庫と推測される大型掘立柱建物や竈付竪穴住居群を検出している。

豊中市内では台地縁辺部や独立丘陵において前期古墳が築造される。市内中央部の台地上に分布する桜塚古墳群では前方後円墳である大石塚古墳・小石塚古墳が築造された後、中期の主要な古墳が造営される。丘陵部や台地で古墳が造営されるのに対し、市内南部は古墳の分布数は多くはない。この傾向については集落として土地利用されていたため、また、低地の沖積地という立地条件から古墳が残存しにくい状況にあるためと考えられる。

中期後半から後期にかけて、千里川上流域には桜井谷窯跡群が分布することから、市内中・北部において中心となる集落が展開し、須恵器生産に関わる内田遺跡や本町遺跡・新免遺跡なども出現する。中期後葉には桜塚古墳群で大型古墳の造営が停滞し、新免古墳群が出現する。市内南部では後期になると上津島遺跡・利倉南遺跡・服部西遺跡などに小規模古墳群が造営される。沖積地では後期においても集落が継続し、島田遺跡では大型掘立柱建物・倉庫が建築される。また、内陸部では穂積遺跡において直径30mの円墳である穂積古墳を築造するほか、北条遺跡では大型掘立柱建物が建築されるものの、古墳時代末には再び規模が縮小する。

### (4) 古代・中世

大宝律令以降、豊中市域の多くは摂津国豊嶋郡に所属する。桜井谷窯跡群に伴って展開していた集落域は操業の停止とともに8世紀以降に縮小する。一方、千里川流域の低位・中位段丘上では西国街道と能勢街道とが交わる地点に立地し、豊嶋郡衙と関連すると考えられる螢池北遺跡および池田市宮の前遺跡、物部氏の氏寺の可能性がある金寺山廃寺に隣接する本町遺跡・柴原遺跡が拠点であったと考えられる。また、猪名川流域・天竺川流域の平野部では旧豊嶋郡の条里地割が残るが、庄内遺跡を含む一部の沖積地や丘陵部では確認できない。

海に面する市内南部は飛鳥・奈良時代には港湾として機能していたと推測される。沖積地では古墳時代から継続し、沖積地では上津島遺跡などで大型掘立柱建物や倉庫が多く建築され、上津島遺跡の倉庫の柱穴より難波宮の重圓文軒丸瓦が出土している。上津島南遺跡や利倉西遺跡からも難波宮の同瓦が出土していることから、後期難波宮との関連が指摘される。さらに、島田遺跡においても大型倉庫を検

出しているほか、奈良三彩や重郭文軒平瓦が出土している。一方、内陸部では穂積遺跡で大型掘立柱建物を検出しておる、北条遺跡の旧河道からは緑釉陶器・円面硯・格子目タタキ調整を施す瓦などが出土している。これらの事例から周辺に寺院あるいは官衙的施設が存在した可能性が指摘されている。

しかし、9世紀以降になると市域の集落遺跡における遺構は減少し、9世紀後半から10世紀前半に低位段丘上は曾根遺跡、市内南部は上津島南遺跡へと中心が移る。10世紀末には神崎川と猪名川との合流地点に椋橋荘が成立し、その推定地である庄本遺跡は流通拠点の一つであったと考えられる。11世紀後半までには椋橋荘と隣接する摂関家領垂水西牧などの荘園が成立する。垂水西牧の領域に含まれる北条遺跡・小曾根遺跡・穂積遺跡などでは13世紀前半まで集落が継続する。小曾根遺跡・穂積遺跡・利倉遺跡では大溝を検出しており、建物を区画する溝（環濠）として機能していた可能性がある。また、沖積地では居館である春日社南郷目代今西氏屋敷、低位段丘上では熊野田遺跡、原田城、戦国期には刀根山城（北刀根山遺跡）が築かれる。なお、庄内遺跡においても11世紀の遺構や遺物がみつかっており、これらの荘園との関係性が窺われる。

#### （5）中世以降

中・近世には西国街道や西摂・播磨・山城などに延びる各街道が整備され、猪名川や神崎川を利用した水上交通の発達とともに、現代に続く交通の要衝として機能していた。江戸時代になると豊中市内は幕領を除いて麻田藩青木氏領に所属していた。

## 第3章 調査成果

### 第1節 基本層序(図5～8、図版1・10・12)

位置と環境でも述べたが、本遺跡は神崎川や小河川によって形成された沖積地上に立地する。今回の調査地は、市立第六中学校の敷地であったことから、ほぼ平坦に造成されていた。盛土を除去して検出した旧耕作土層上面における標高は、各調査区とも概ね T.P.+1.0～1.1mで、近世から近代においてもほぼ平坦であったことが窺える。しかし、古墳時代の遺構面における標高は、A区東端部で T.P.+0.85m、西端部で T.P.+0.8mを測る。B区は東西両端部で T.P.+0.55m、中央部で T.P.+0.35m、C区は概ね T.P.+0.75mをそれぞれ測る。調査地においては北東隅が高く、南西方向に傾斜することから、B区のさらに南西側には開析谷もしくは海浜部の存在が推察される。各調査区の地層の堆積をみると、旧耕作土層の下には近世の耕作土層や、中世から古墳時代の遺物包含層が層厚約 0.2～0.5mで堆積する。

**第1層** 中学校建築時の造成盛土および旧耕作土層の下層に堆積する近世耕作土層である。A区では 5Y7/2灰白 シルト混細粒砂層で、層厚約 0.1～0.15mを測り、調査区全域に堆積する。B区では、層厚約 0.2mと他の調査区と比べて厚く堆積する。C区は北半部では 2.5Y5/3黄褐 中粒砂混シルトが堆積するが、調査区南半部では下層に 10YR4/2灰黄褐 中粒砂・シルト混細粒砂層が堆積しており、その層厚は約 0.05～0.1mを測る。造成盛土層や旧耕作土層とともに第1層まで重機による掘削を行った。

**第2層** 中世から古墳時代の遺物包含層である。A区は 10YR6/1褐灰 細粒砂混シルト層が堆積し、層厚約 0.2mを測る。A区では調査区の西半部では造成時の攪乱によって失われるが、東半部は概ね水平に堆積するものの、東端部は少し厚くなる。B区は 2.5Y6/1黄灰 極細粒砂混シルト層が堆積し、層厚約 0.2mを測る。B区では一部が造成時の攪乱によって失われるが、概ね水平に堆積する。C区は 10YR4/1褐灰 中粒砂・細粒砂混シルト層が堆積し、層厚約 0.1mを測る。C区北辺部では、当該層が近世の耕作時に捲き上げられて遺存しない。当該層を人力で除去して、遺構面を検出した。

**第3層** 弥生時代中期以降の堆積層で、後述する第4層堆積時の最終堆積層と考えられるシルト層である。当該層の上面で古墳時代の遺構を確認した。A区では調査区全域で第3層の堆積が確認できた。2.5Y5/1黄灰 細粒砂混シルト層で、層厚は約 0.15mである。B区は東半部で 2.5Y6/1暗灰黄 極細粒砂・細粒砂混シルト層が堆積し、層厚は 0.1～0.2mを測る。C区では南半部で堆積が確認できたが、北半部は後世に削平を受けて遺存しない。遺物は出土しなかった。

**第4層** 弥生時代中期以降の堆積層である。洪水堆積層で、細粒砂から極粗粒砂が堆積し、最終的に第3層のシルト層が堆積する。第4層は生物の擾乱が激しく、ラミナは認められない。これら第3・4層の堆積によって、調査地周辺は完全に陸地化して安定した状態となり、その後、積極的な土地利用が始まるようになる。A区では 5Y6/1灰 中粒砂・粗粒砂をはじめ細粒砂から極粗粒砂が堆積し、層厚 0.15～0.3mを測る。B区では 2.5Y5/1黄灰 中粒砂・粗粒砂が堆積し、層厚約 0.4mを測る。C区では遺構の壁面などから、0.4m以上堆積することが確認できた。なお、A区で弥生時代中期の壺底部が出土した。

**第5層** A区およびB区で確認したが、第5層は海成層で、生物の擾乱が顕著なシルト混中粒砂～粗粒砂層が 3m以上堆積しており、神崎川河口付近の干潟であったことが推察される。なお、T.P.-3.0m付近の地層からハマグリ・フジツボ・ヤマトシジミなどが出土したことは、汽水域であったことを示す。

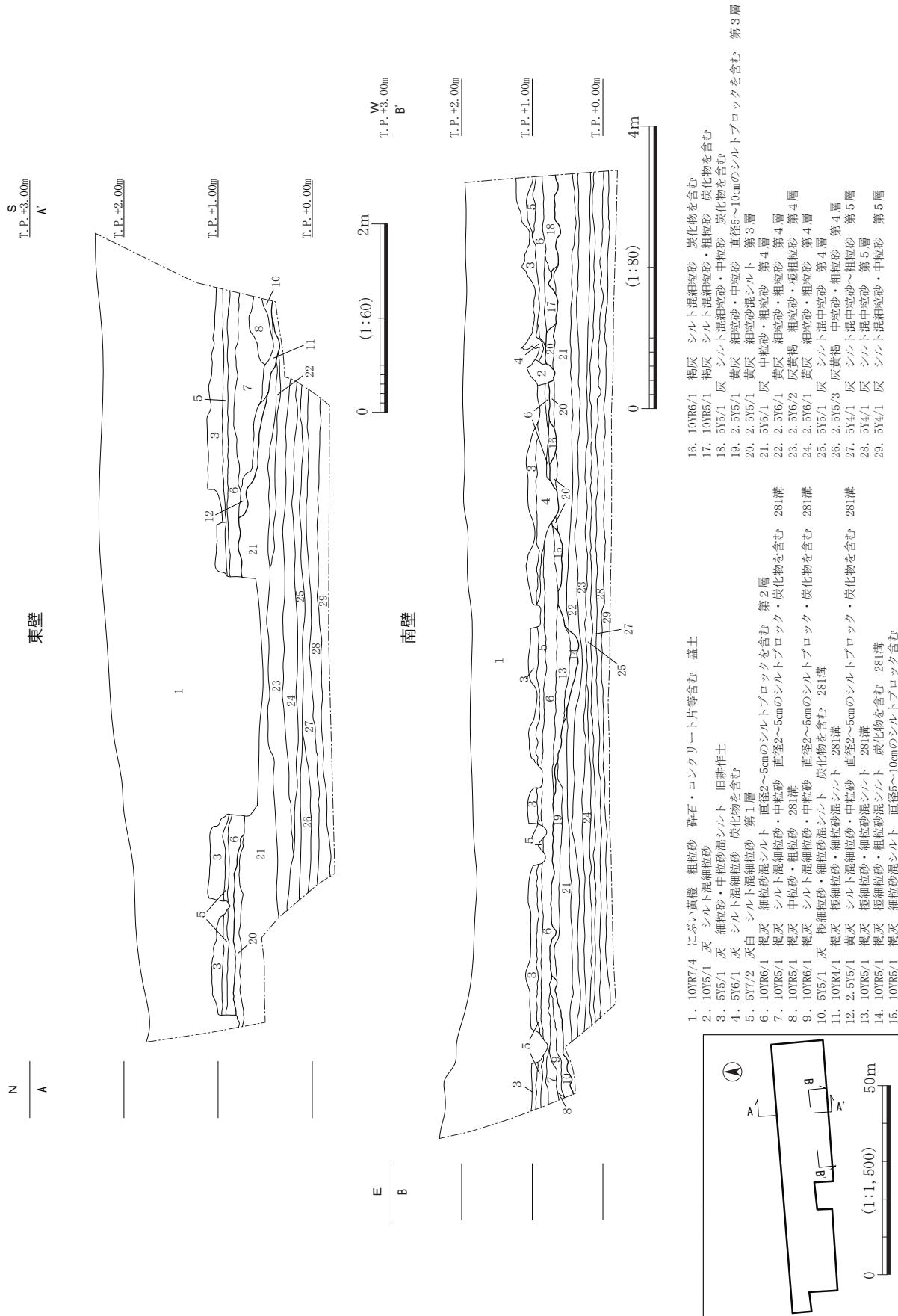


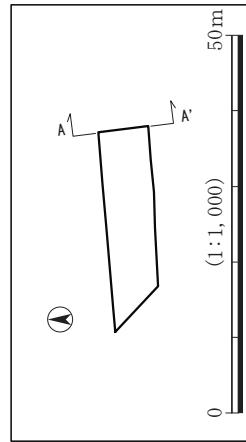
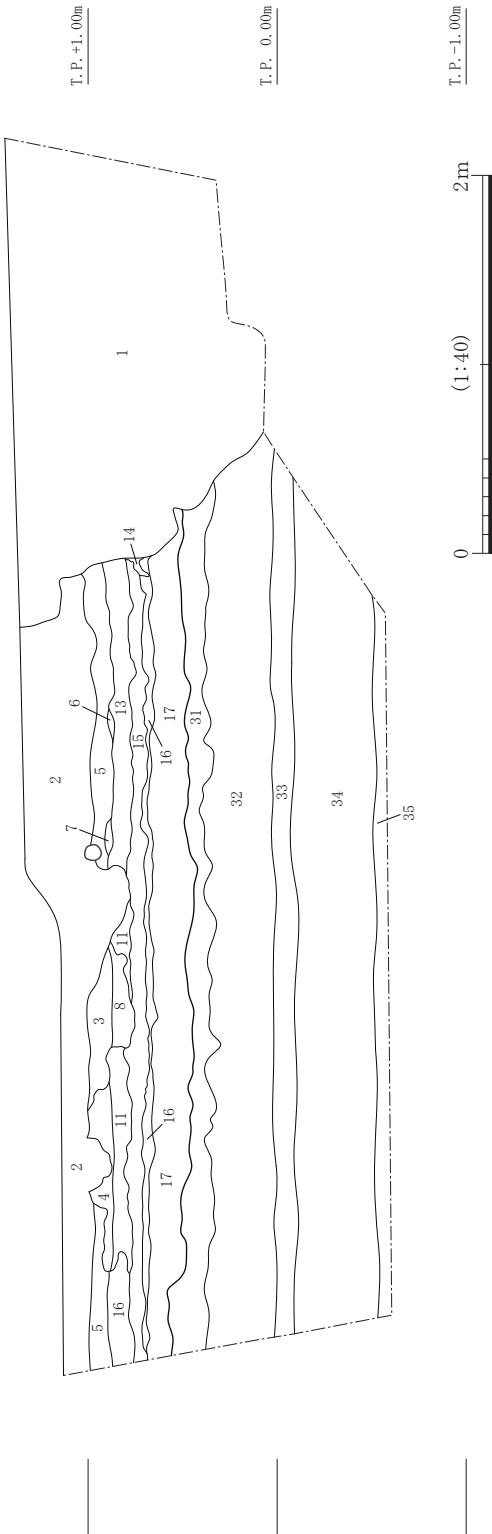
図5 A区東壁・南壁断面

N

S

T.P. +2.00m

A



1. 10YR4/2 黒褐色 粗粒砂 砕石・金属片を含む 盛土  
2. 10W4/1 黒灰 相粒砂 中粒砂 含む 盛土  
3. 2.517/3 深黄 中粒砂混粗粒砂 旧耕作土  
4. 7.515/1 黑 極細粒砂・細粒砂混シルト 旧耕作土  
5. 7.515/1 黄灰 極細粒砂混シルト 旧耕作土  
6. 2.515/1 黄灰 極細粒砂・細粒砂混シルト  
7. 10YR7/1 黄白 細粒砂混シルト 黄灰  
8. 517/1 黄白 極細粒砂混シルト 黄灰  
9. 10YR6/1 黑 極細粒砂混シルト 第1層  
10. 7.515/1 黄 細粒砂混シルト 第1層  
11. 10YR7/1 黄白 極細粒砂・細粒砂混シルト 第1層  
12. 10YR7/1 黄白 シルト混細粒砂 第1層  
13. 2.516/2 黄灰 極細粒砂混シルト 生垣  
14. 2.515/1 黄灰 細粒砂混シルト 第1層  
15. 2.516/2 黄灰 極細粒砂・細粒砂混シルト 第1層  
16. 2.516/2 黄灰 極細粒砂混シルト 第2層  
17. 2.516/1 黄灰 極細粒砂混シルト  
18. 2.516/2 黄灰 極細粒砂混シルト  
19. 10YR6/1 黒灰 極細粒砂・細粒砂混シルト 239土坑  
20. 10YR5/1 黑灰 極細粒砂・細粒砂混シルト  
21. 2.516/2 黄灰 極細粒砂・炭化物を含む 239土坑  
直径1~10cmのシルトブロック・炭化物を含む 239土坑  
22. 2.516/1 黄灰 極細粒砂混シルト  
23. 2.516/2 黄灰 極細粒砂・細粒砂混シルト 240流路  
24. 2.515/1 黄灰 シルト混細粒砂・中粒砂 240流路  
25. 2.516/1 黄灰 シルト混細粒砂・中粒砂 240流路  
26. 2.515/1 黄灰 極細粒砂混シルト 240流路  
27. 2.515/1 黄灰 シルト混細粒砂・粗粒砂 240流路  
28. 2.515/1 黄灰 中粒砂・粗粒砂 240流路  
29. 2.515/2 黄灰 黃  
30. 2.515/2 黄灰 黃  
31. 2.516/1 黄灰 極細粒砂・細粒砂混シルト 第3層  
32. 2.515/1 黄灰 中粒砂・粗粒砂 第4層  
33. 10YR6/2 黄灰 シルト混細粒砂・粗粒砂・極粗粒砂 第5層  
34. 514/1 黄 細粒砂混シルト 第5層  
35. 514/1 黄 細粒砂混シルト 第5層  
直径1~10cmのシルトブロックを含む  
直徑1~10cmのシルトブロックを含む

図6 B区東壁断面

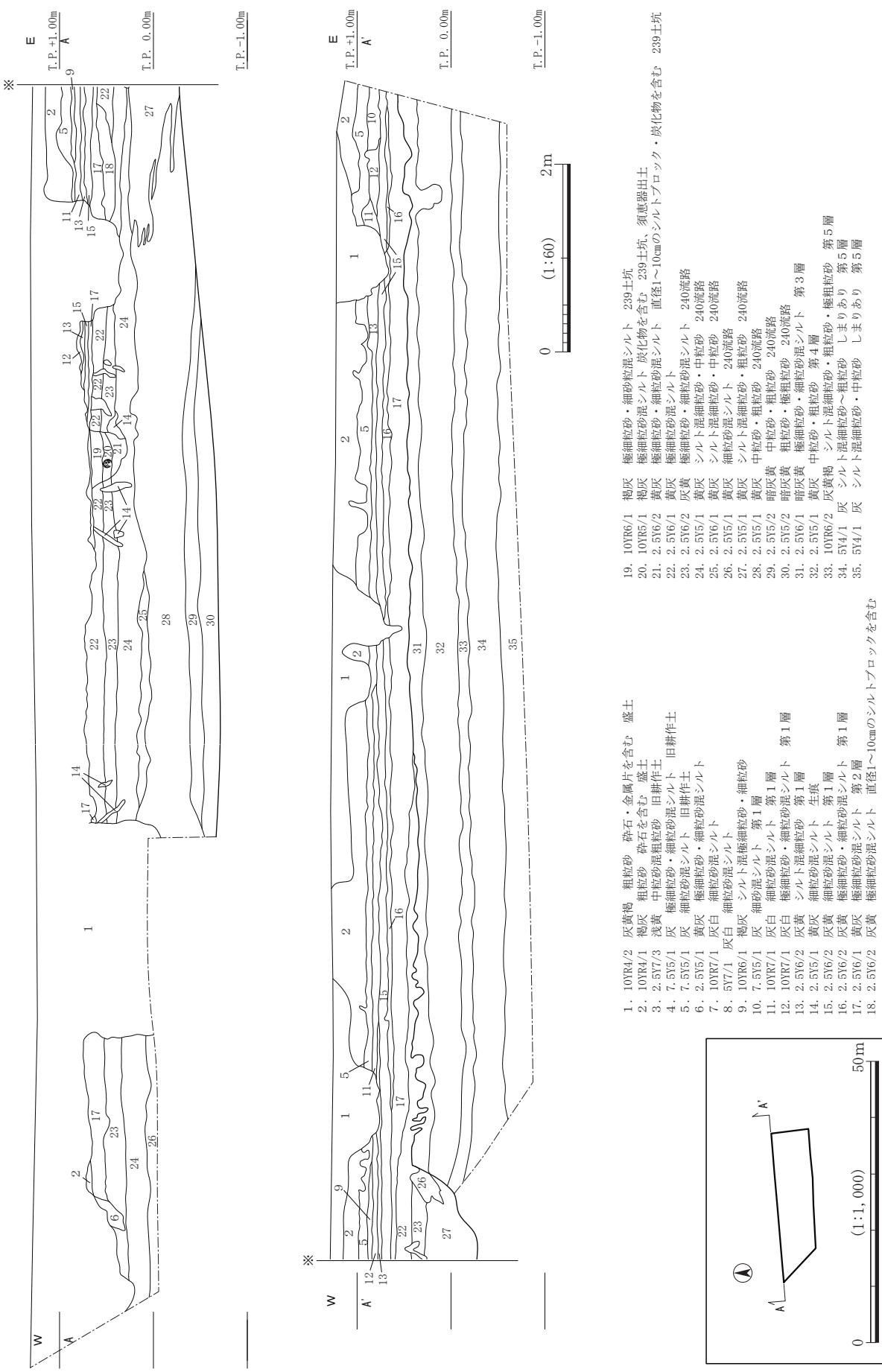
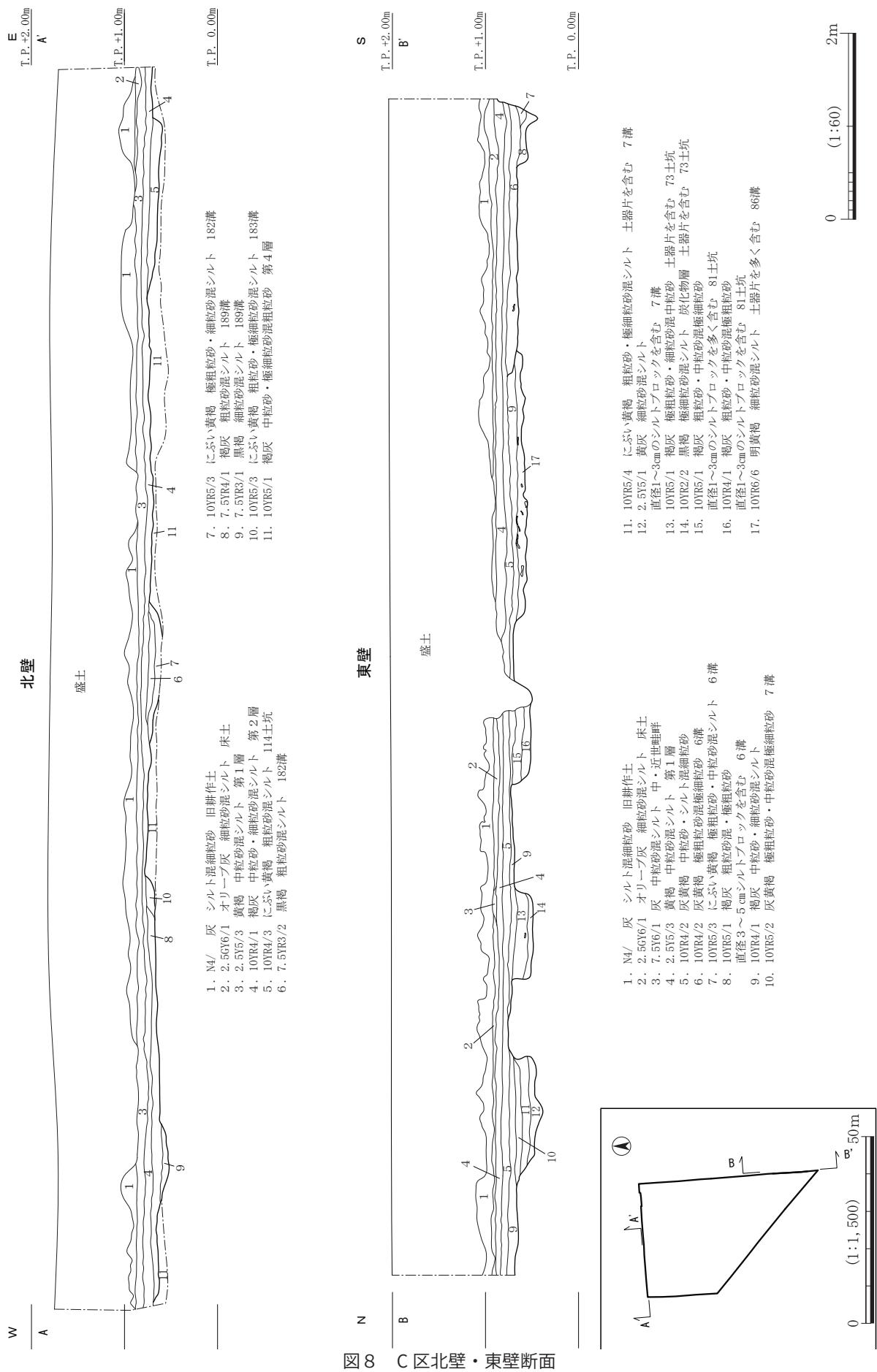


図7 B区北壁断面



## 第2節 A区の調査

A区は、調査地の一番北側に位置し、東西約76m、南北約16mの長方形を呈し、面積は991m<sup>2</sup>である。A区の調査は、本体工事の工程に合わせて二分割して行ったが、まとめて報告する。

まず、中学校建設時の盛土や攪乱土、さらに旧耕作土と近世耕作土を重機で除去して、古墳時代の遺物包含層(第2層)を検出した。そこで、246土坑や286・287溝を検出した。その後、第2層を人力で掘削して、古墳時代の遺構面(第2層下面)を検出した。遺構面は、後世の攪乱でかなり削平を受けていたが、遺構の残存状態は良く、竪穴建物が検出されたことなどから、集落域の広がりを捉えることができた。なお、第2層下面の標高は、概ねT.P.+0.65～0.8mで、北東から南西方向へ緩やかに傾斜する。

### 1. 古墳時代中期の遺構と遺物(図9、図版1～9)

検出された遺構は、竪穴建物・土坑・ピット・溝・落込みなどである。遺構はすべて古墳時代中期に属していたことから、比較的短期間に営まれた集落であったことがわかる。

竪穴建物2(図10・11、図版3・23) 調査区の中央東寄り、X=-138,883.5、Y=-48,435で検出した。平面形は方形を呈するが、遺構の北半部は攪乱によって失われる。規模は東西2.8m、南北2.4m以上、深さ0.1mを測る。建物の主軸はN-20°-Eを指向する。柱穴や壁溝は検出されなかった。埋土は単層で、10R3/1灰黄褐 細粒砂混シルト層が堆積する。遺物は広い範囲で土師器・須恵器のほかに製塩土器片や椀形溝などが出土したが、建物廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

調査中は299溝や300溝が竪穴建物に伴う排水溝になる可能性を考えたが、281溝や304土坑の切り合い関係などから排水溝ではないと判断した。

1～4は土師器甕である。1～3は口縁部が内湾しながら外上方へ延び、端部は内傾して面をつくる。4は直線的に延びる口縁をもち、端部はやや外反させる。いずれの土器も摩耗が著しく、調整は不明瞭であった。5は甕もしくは甌の把手である。1・2・4・5は生駒山西麓産の胎土をもつ。6～16は須恵器である。6～9は杯蓋である。6は丸みを帯びた天井部をもち、口縁端部は内傾して段をつくる。7の天井部には重ね焼きの痕跡が残る。8は6に比べてやや平らな天井部をもち、体部は開き気味に延びる。9は天井部と体部の境の稜が鈍い。10・11は杯身である。10は平らな底部と内傾する立ち上がり部をもつ。11は10と比して器壁が薄い。12は高杯で、脚の三方に長方形透かし孔を有する。13は壺体部である。平底気味の底部をもち、外面肩部にはカキ目を施す。14～16は甕である。14は外反しながら立ち上がる頸部をもち、口縁端部は下に肥厚させて面をつくる。15は口縁端部を内湾気味につまみ上げて稜をつくる。16は大きく張る肩部をもつ。頸部はまっすぐ外上方に立ち上げ、口縁部は外側に広げ、端部は上下に肥厚させて面をつくる。また、口縁下に断面三角形の凸帯が巡る。須恵器はいずれもTK47型式に属すると考えられる。17・18は丸底I式の製塩土器である。19は椀形溝である。3分の1を欠損するが、13.5gを量る。

竪穴建物内から製塩土器や椀形溝が出土したが、出土点数の少なさや、この建物内から炉跡などの製塩作業や鋳造作業が行われた痕跡が認められなかることなどから、建物内で作業が行われたのではなく、これらの遺物は建物廃絶時に廃棄されたものであると考えられる。

274土坑(図12) 調査区の中央部、X=-138,884.5、Y=-48,464.5で検出した。平面が不定形な土坑で、攪乱によって北東隅を欠く。規模は一辺1.7m、深さ0.15mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は2層に分かれ。図示はできなかったが、古墳時代中期の須恵器片や土師器片が出土した。

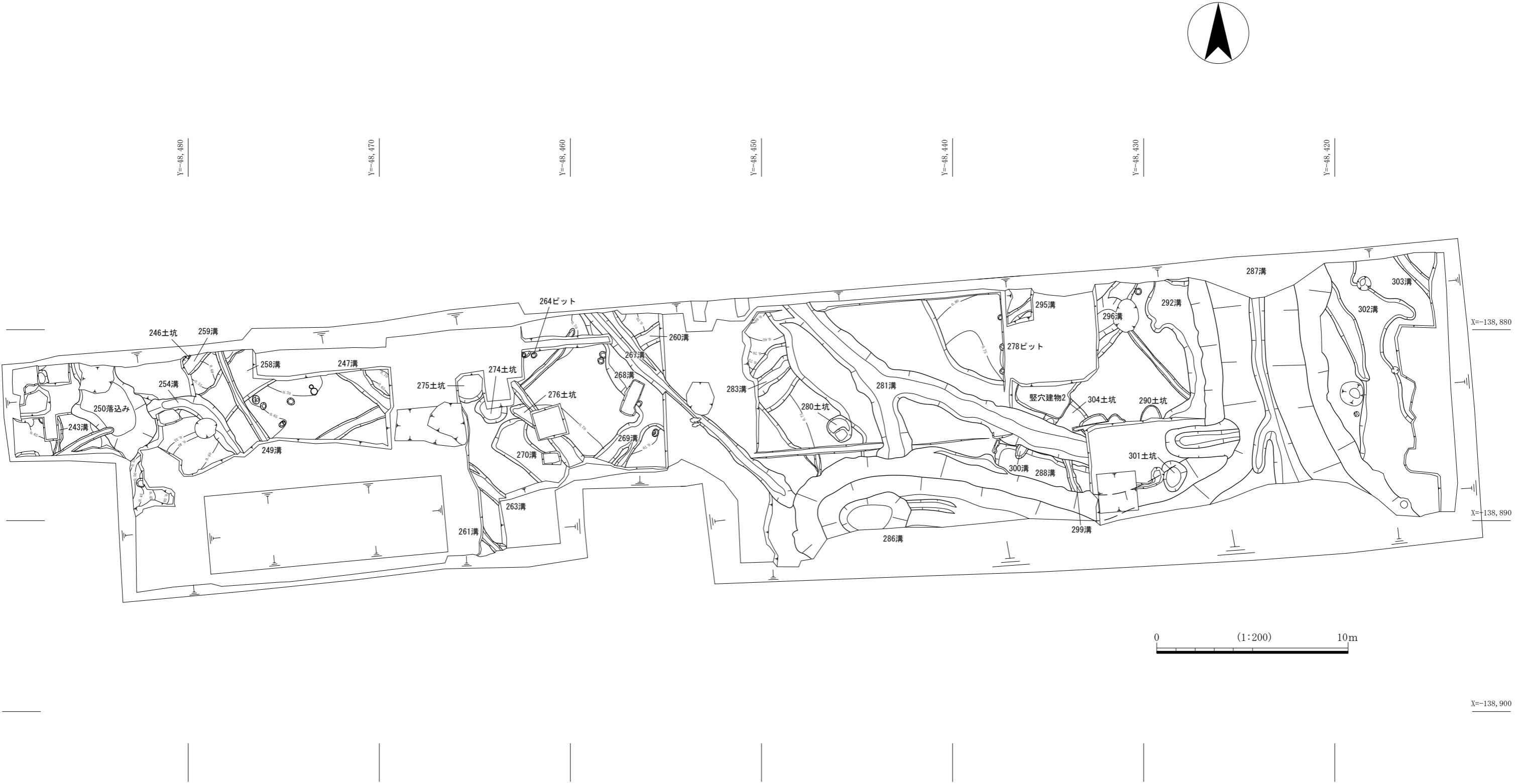


図9 A区第2層下面

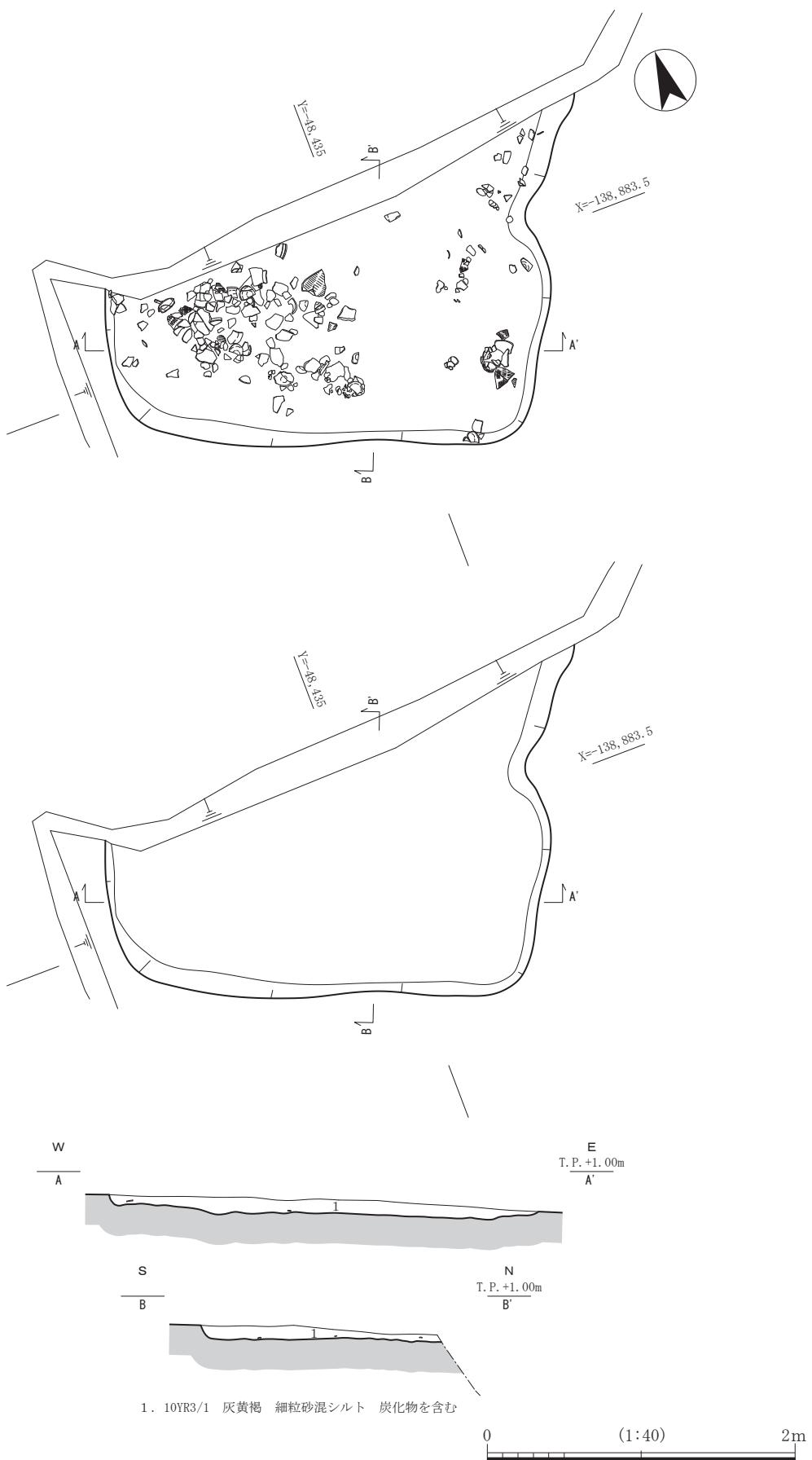


図 10 A 区豎穴建物 2 平面・断面

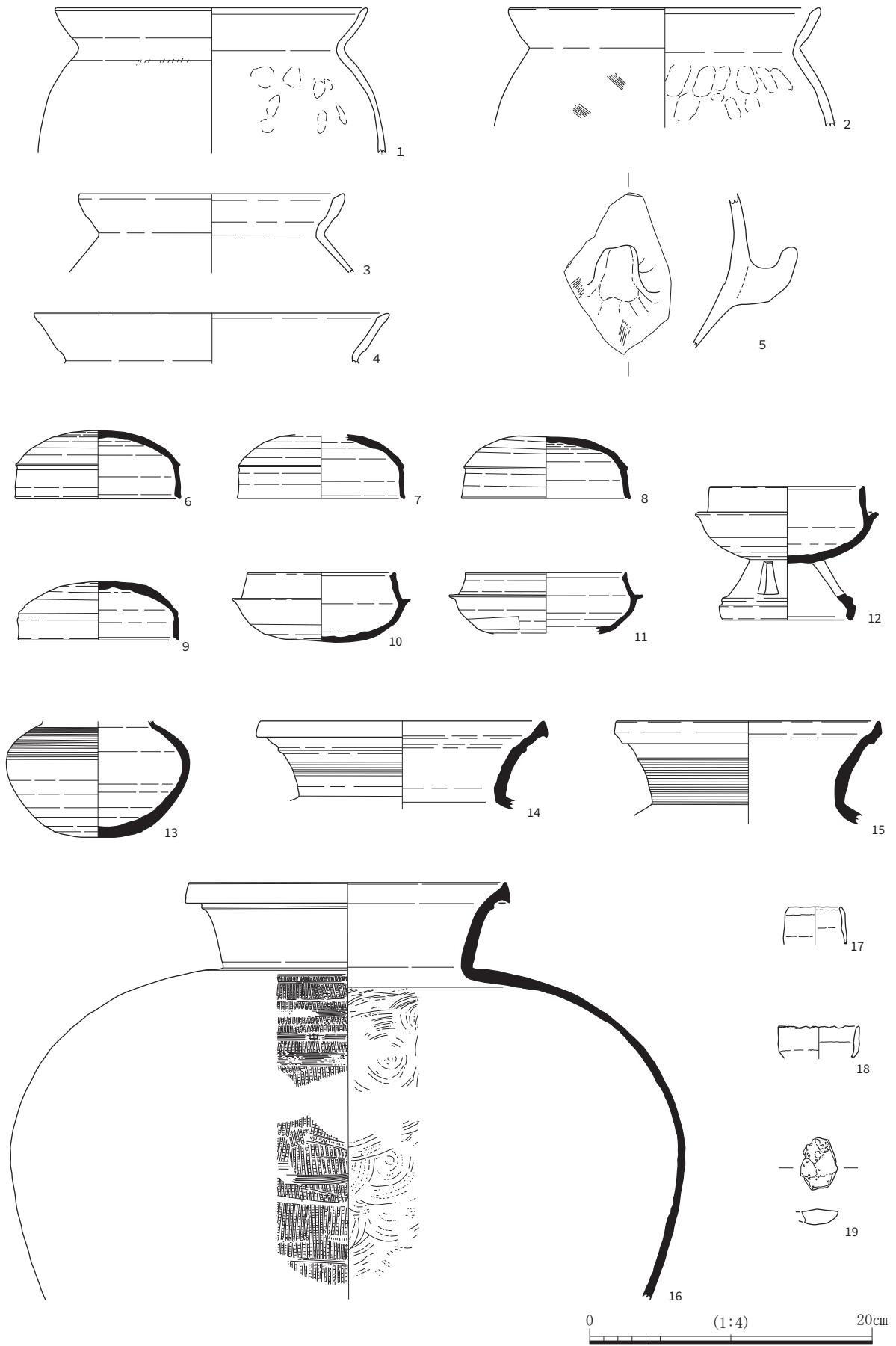


図 11 A 区竪穴建物 2 出土遺物

275土坑(図 12・14) 274土坑の北西に位置する。土坑の三方を攪乱で欠くため平面形は不明である。一辺 1.4m以上、深さ 0.1mを測る。須恵器(20～ 22) が出土した。20は杯蓋である。丸みを帯びた天井部と直線的に延びる体部をもつ。天井部と体部の境の稜は鈍い。21は杯身である。丸い底部と、外反する口縁部をもつ。22は高杯脚部である。高杯は四方向に長方形の透かし孔をもつ。土器はいずれも TK47型式に属する。

276土坑(図 12・14) 274土坑の南東に位置し、平面形は東半部を攪乱によって失われるため三角形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。規模は一辺 1.7m以上、深さ 0.15mを測る。遺物は土師器把手付き甕もしくは甌(23) が出土した。23は内外面とも摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、内面にわずかにヘラケズリの痕跡が残る。生駒山西麓産の胎土をもつ。

280土坑(図 12・14、図版 4・23) 調査区中央やや東寄り、X=-138,885、Y=-48,446で検出した。平面形は不整形な橢円形で長辺 1.4m、短辺 1.2m、深さ 0.2mを測る。土坑は南側で一段深くなる。埋土は2層である。土坑の底面から土師器や須恵器(24～ 29) が出土した。24は杯蓋である。平らな天井部と鈍い稜をもつ。25は有蓋高杯の蓋で、中凹みのつまみをもつ。26は無蓋高杯の杯部である。外反しながら開く口縁部をもつ。体部外面には波状文が巡る。27は有蓋高杯である。口縁端部は丸く収める。脚部に三方向に長方形の透かし孔をもつ。28・29は高杯脚部である。29の底径は 10.4cmと 27・28に比してやや大きい。須恵器はいずれも TK 23型式に属する。

290土坑(図 12・14) 竪穴建物の東約 4mで検出した。平面形は不整形な橢円形を呈すると考えられるが、南半部は攪乱によって失われる。一辺 1.1m、深さ 0.1mを測る。埋土は单層である。遺物は須恵器杯蓋(30) が出土した。30は平らな天井部をもち、口縁端部は内傾して面をつくる。TK 23型式に属する。

301土坑(図 12・14) 調査区南東部に位置する。攪乱および 286溝を掘削して検出したため、検出面の高さは T.P.+0.2mであった。平面形は不整な橢円形である。長辺 1.6m、短辺 1.3mを測る。検出面からの深さは 0.4mを測るが、削平を受ける前の遺構面から掘り込まれたものと仮定すれば、深さは約 0.9 mとなることや、掘削が第4層(砂層) までおよんでいたことなどから、井戸の可能性がある。遺物は図示できなかったが、古墳時代中期に属する土師器甕、須恵器片や甕体部片が出土している。また、混入遺物ではあるが、手焙り形土器の覆部(31) が出土した。31は体部との接合部から覆部周縁の一部である。覆部周縁は粘土を貼り付けて肥厚させて面をつくり、2条の突帯を施すが剥離する。

304土坑(図 13・14、図版 4・5・23・24) 調査区の中央東寄り、X=-138,883.5、Y=-48,435付近で検出した。攪乱および竪穴建物 2、さらに 281溝に切られる不整形な土坑である。当初、竪穴建物 2 の下部構造や 281溝の一部である可能性を考慮しながら調査を進めたが、遺構埋土が竪穴建物の外部にまで広がることや、281溝や 299溝・300溝の堆積状況や切り合い関係を考察した結果、別遺構であると判断した。

遺構は攪乱や 281溝に切られていたため、規模は不明であるが、東西 4 m以上、南北 1.6m以上を測る。遺構の南西部は一段下がっており、深さは 0.15～ 0.3mを測る。遺物は土師器、須恵器、製塩土器などがある。32は土師器杯である。体部は外上方にまっすぐ立ち上がる。内外面とも摩滅が顕著で、調整は不明である。33～ 38は須恵器である。33・34は杯身である。どちらも丸みのある底部と内傾する立ち上がり部をもつ。35～ 38は甕である。35は頸部が外上方へ外反気味に立ち上がり、口縁部は上下に肥厚させて面をつくり、凹線を巡らす。36～ 38の頸部は短く、大きく外反させる。口縁端部は上方へつまみ上げて面をつくる。39～ 44は丸底 I 式の製塩土器である。いずれも体部下半を欠く。口径は 3.4

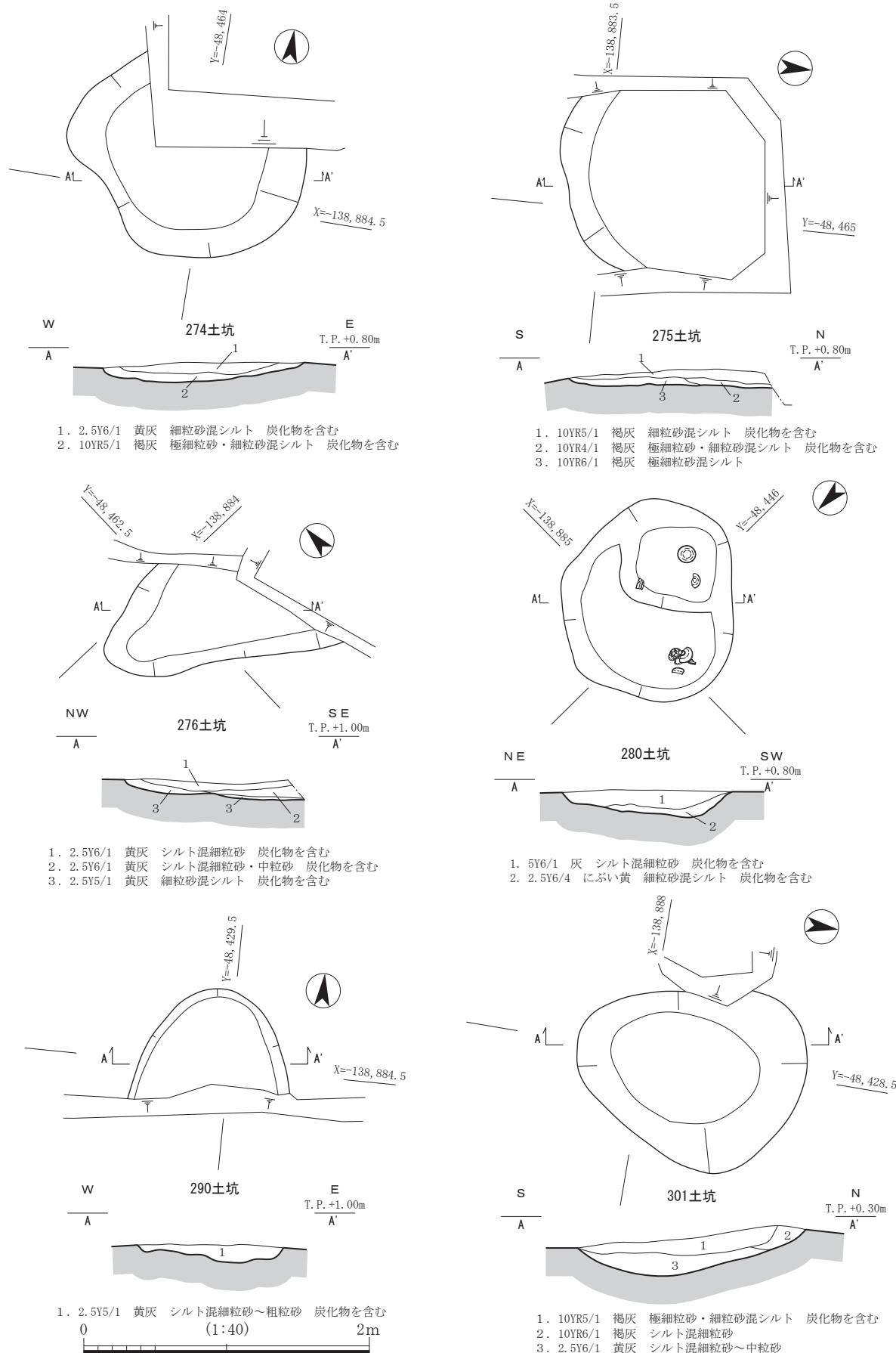


図 12 A区土坑平面・断面

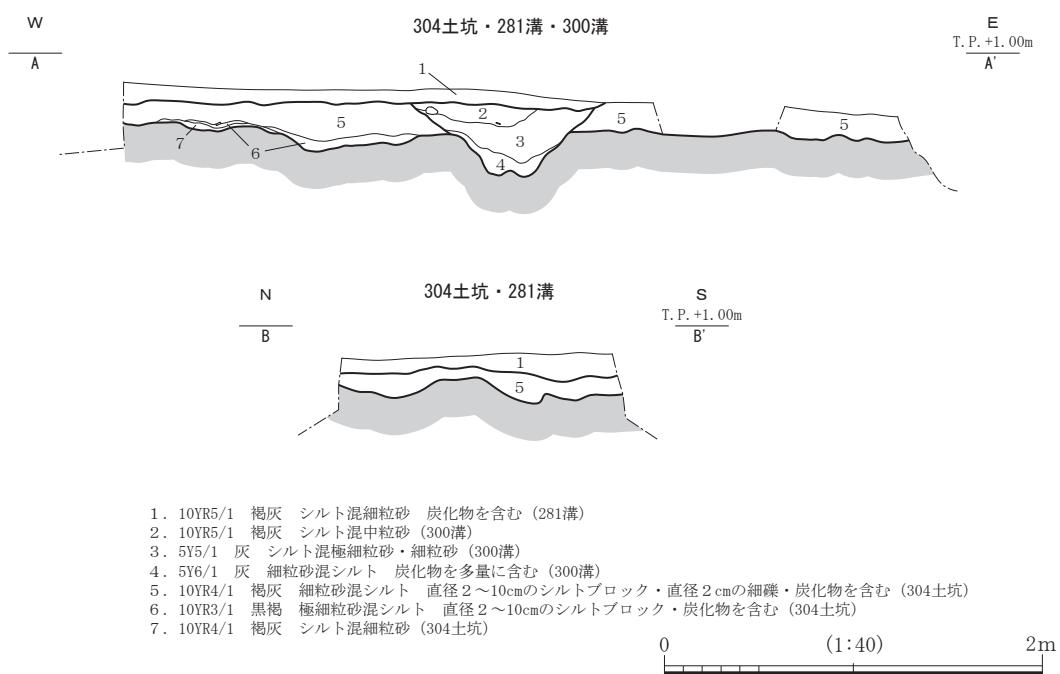
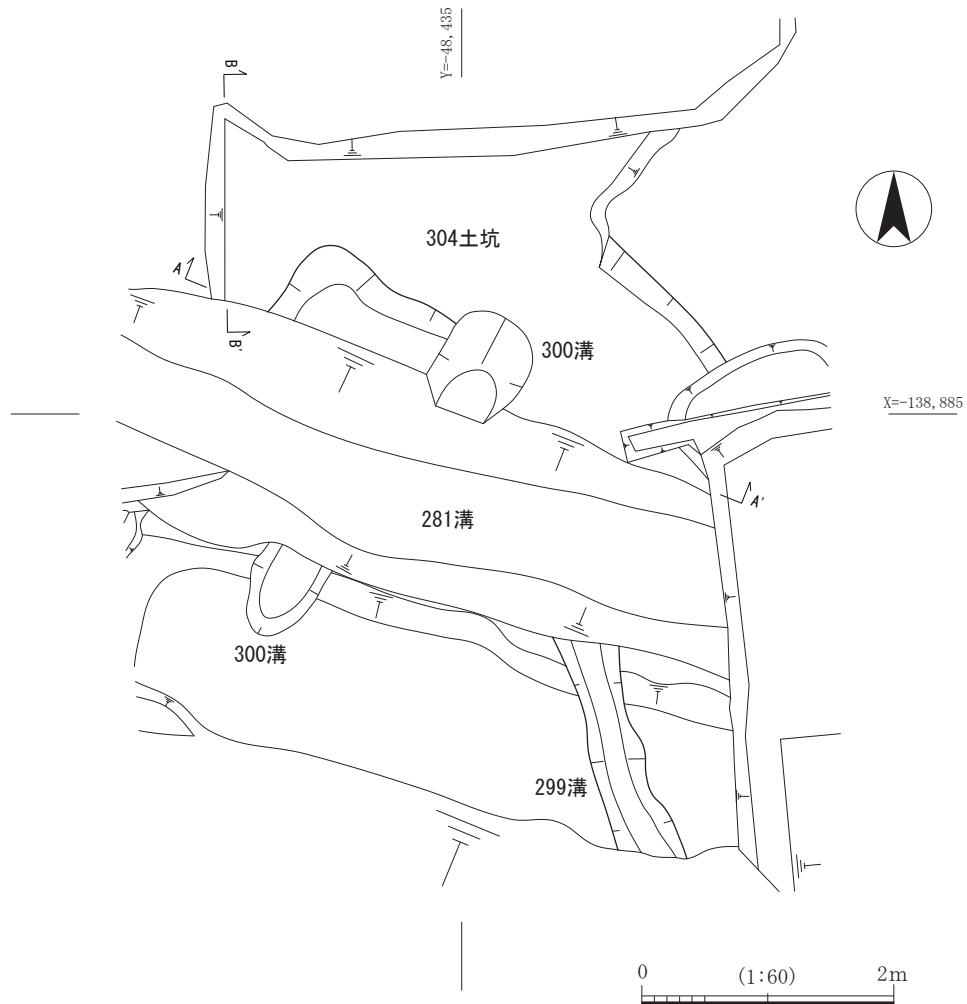


図 13 A 区 304 土坑平面・断面

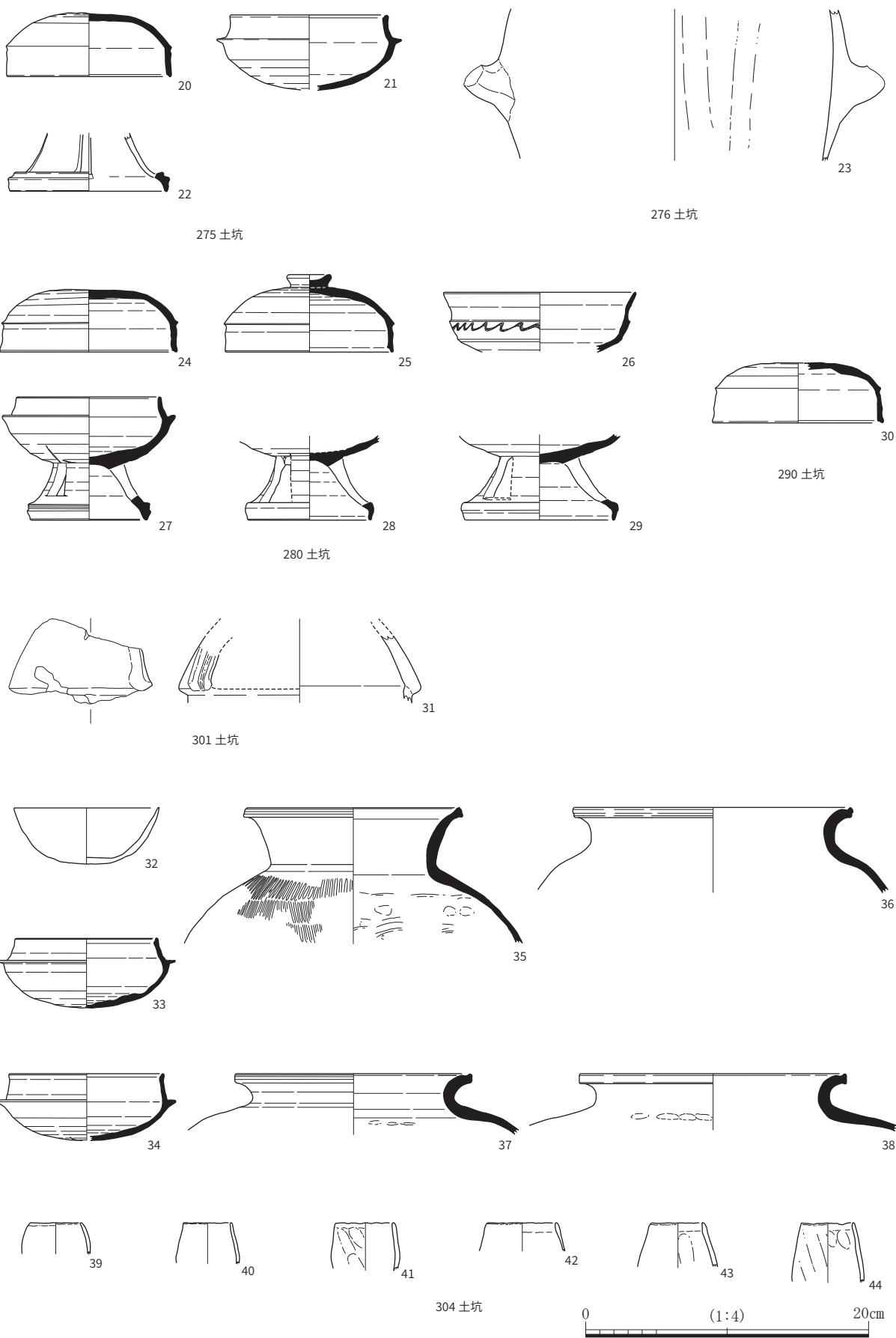


図 14 A 区土坑出土遺物

～4.8cmを測る。44は外面に板状工具によるナデが認められる。

264ピット(図15) 調査区中央部、X=-138,881.5、Y=-48,462で検出した。直径0.3m、深さ0.1mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は単層で、須恵器台付壺の底脚部(45)が出土した。45は底径8.0cmを測る。脚部は内湾気味に外下方へ広がり、端部は面をもつ。

278ピット(図15) 調査区中央やや東寄り、X=-138,881、Y=-48,437.5で検出した。遺構の東半部を欠く。直径0.35m、深さ0.2mを測る。断面形は「U」字状を呈する。埋土は2層で、上層から須恵器杯蓋(46)が出土した。46は丸みをもつ天井部に、やや開き気味に延びる体部をもつ。口縁端部は内傾する面をつくる。TK 23型式に属する。264・278ピットはともに单体で検出され、建物などを構成するものではない。

243溝(図16・17) 調査区西端部で検出した。南北方向を指向する溝で、規模は幅0.3m、深さ0.05mを測る。溝の西辺および北側は攪乱によって失われる。また、溝の南側は後世の遺構に切られていたが、調査区外へ延びる。遺物は図示できなかったが、古墳時代中期の土師器甕や壺、須恵器杯蓋の細片が出土した。

247(263) 溝(図16～18) 調査区中央やや東寄りで検出した。北西一南東方向を指向する。途中攪乱によって切られており、北側を247溝、南側を263溝と遺構番号を付して遺物の取り上げを行ったが、溝の方向や溝の規模、底面標高等を考慮した結果、同一の溝として扱う。規模は幅0.6m、深さ0.1～0.2mを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は北側では単層だったが、南では4層に分層できた。なお、溝の底面の標高は北側ではT.P.+0.5m、南側ではT.P.+0.48mを測る。遺物は須恵器杯蓋(47)や器台(48)のほかに、図示できなかったが土師器片や須恵器甕体部片が出土した。47は有蓋高杯の蓋である。天井部に中凹みのつまみをもつ。48は器台の杯部である。体部は内湾しながら大きく開き、口縁端部は上下につまみ出し、肥厚させて面をつくる。体部外面上半に波状文を施す。外面中央には断面三角形の凸帯を2条削り出す。下半部は外面に格子目タタキが、内面には同心円文が残る。TK 23型式からTK 47型式に属する。

249溝(図16～18) 調査区西半部に位置し、北西一南東方向を指向する。規模は幅0.35m、深さ0.1mを測り、埋土は単層である。258溝と先後関係にある。遺物は須恵器杯身(49)が出土したほか、須恵器の壺頸部片や土師器の細片が出土した。49は平らな底部をもつ。TK 23型式に属する。

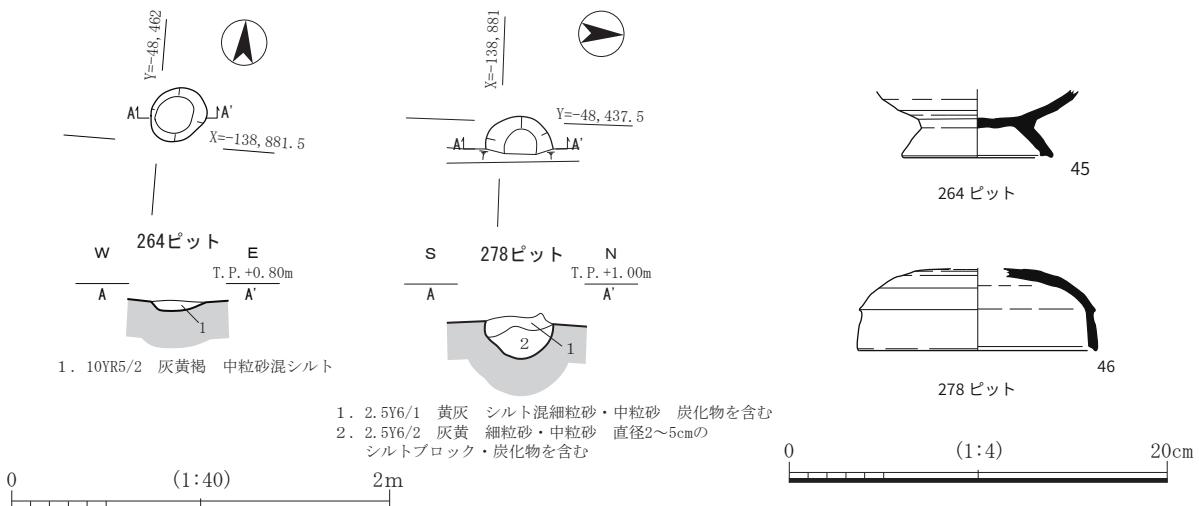


図15 A区 264・278ピット平面・断面 出土遺物

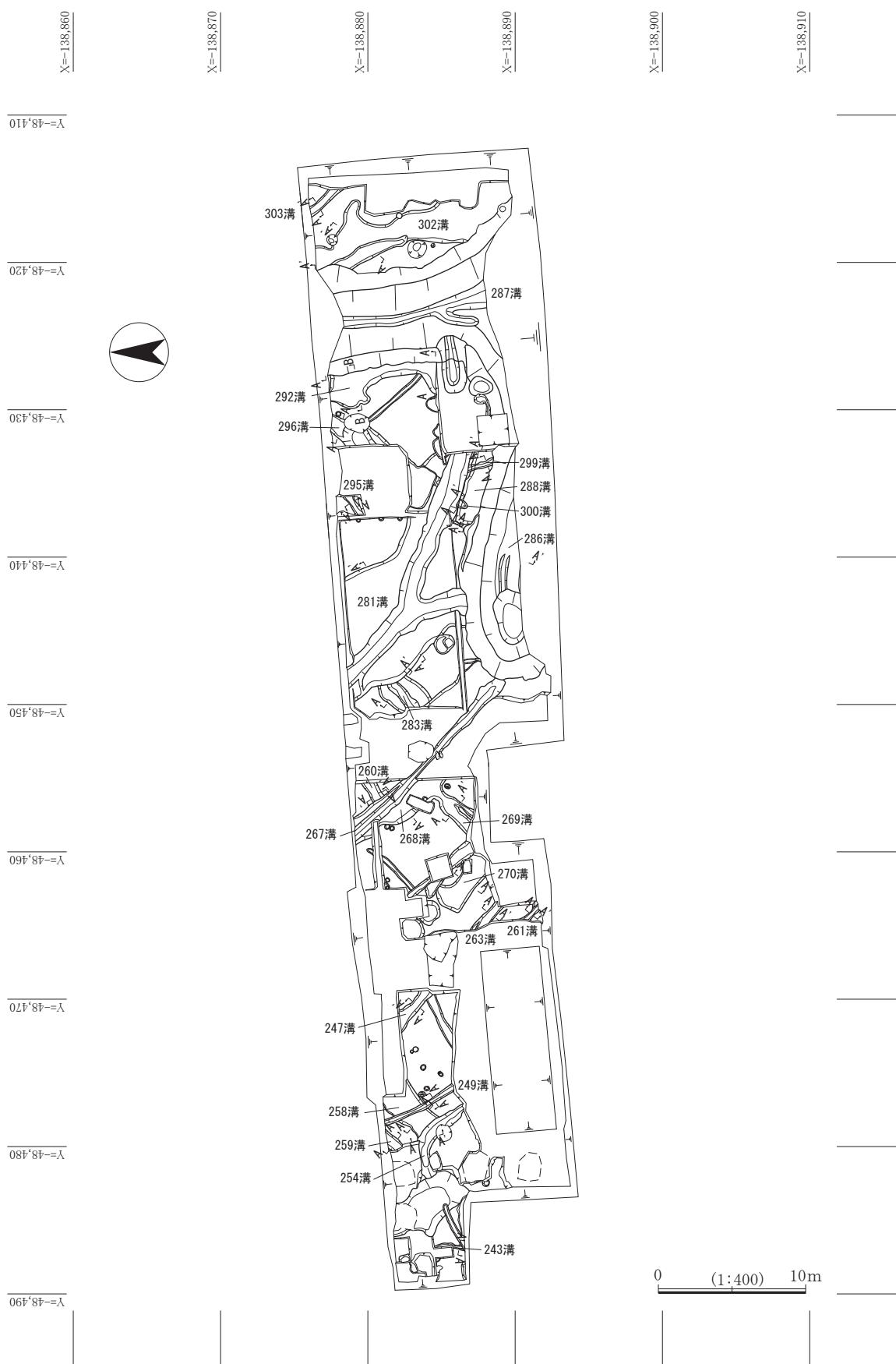


図 16 A 区溝平面

254溝(図 16～18、図版5・24) 249溝の西に位置する。溝は東に延びたあと、大きく南東方向へ屈曲する。溝の西端は250落込みに接する。規模は幅1.0m、深さ0.7mを測る。断面形は逆台形状を呈し、埋土は5層に分けられるが、いずれも滯水堆積層で、最下層には炭化物や木片が含まれる。遺物は須恵器杯・高杯・壺・器台(50～61)のほか、図示できなかったが土師器や須恵器の甕体部片などが出土した。50～55は蓋である。50は平らな、51～53は丸みを帯びた天井部をもつ。52・53は焼け歪みが顕著である。また、50～53の体部は外下方に開くのに対し、54・55はやや内湾する。短頸壺の蓋か。56～58は杯身

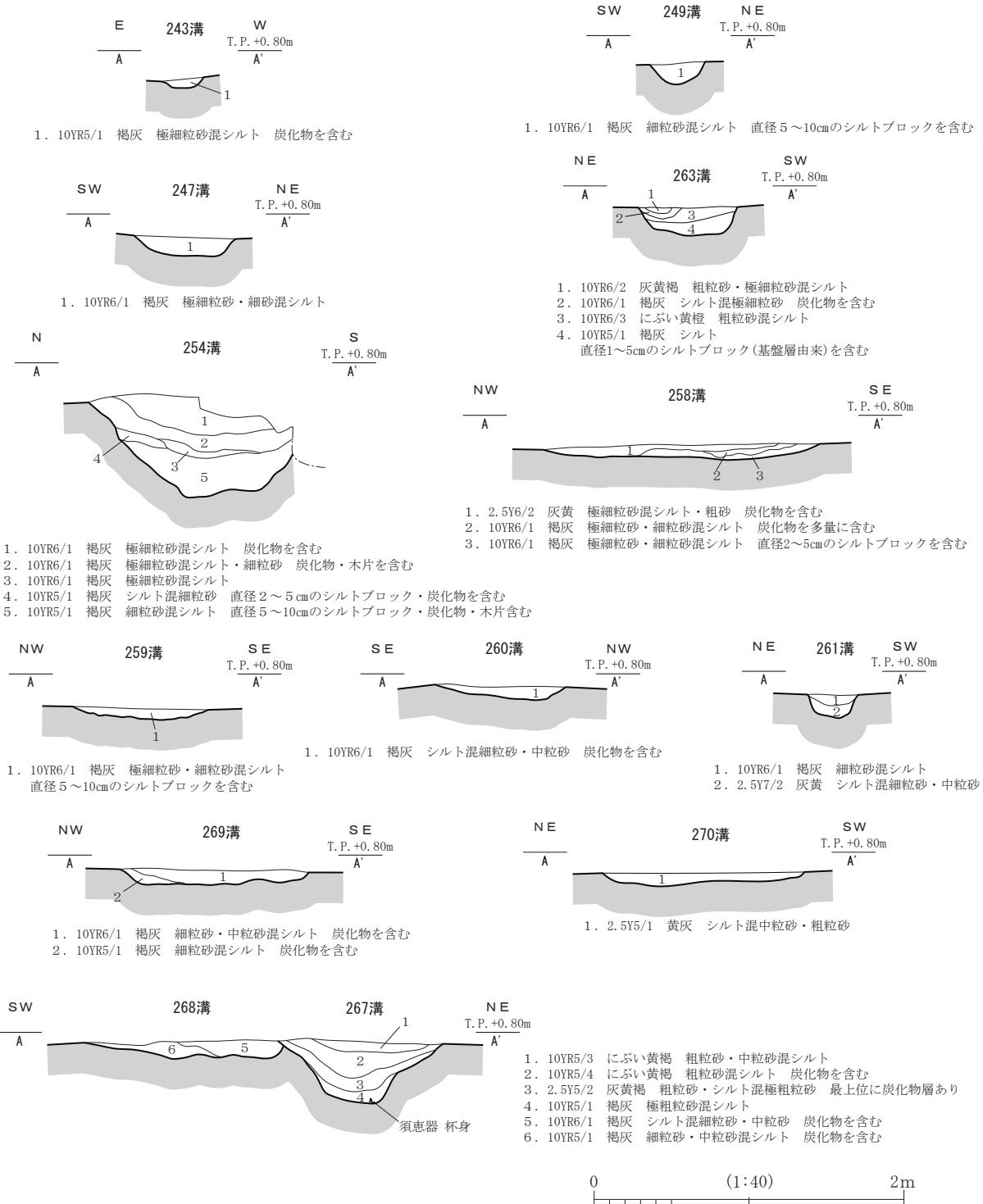


図17 A区溝断面 (1)

である。57と58には底部外面にヘラ記号が認められる。59は高杯の蓋で、中凹みのつまみをもつ。また、天井部には重ね焼きの痕跡が残る。60は有蓋高杯である。脚部には三方に長方形の透かし孔をもつ。61は器台杯部である。浅く内湾しながら立ち上がり、口縁部は外に開いて端部は上下につまみ出して稜をつくる。体部外面にはカキ目と波状文が、体部下半には内外面にそれぞれ平行タタキ目と同心円文が残る。これらの遺物はTK 23型式からTK 47型式に比定される。

258溝(図16～18、図版24) 254溝の北東に位置し、249溝と254溝に切られる。やや湾曲しながら北東一南西方向を指向する、幅1.7m、深さ0.1mの幅広の深い溝である。溝の北東部は調査区外に延びる。遺物は須恵器(62～65)のほかに、図示できなかったが土師器・須恵器の甕体部片が出土した。62は杯蓋である。丸い天井部をもつ。63～65は杯身である。64は丸みのある底部をもつ。65は口縁部を打ち欠く。TK 23型式からTK 47型式に属する。

259溝(図16・17) 258溝の北西約2mに位置し、258溝とほぼ並行に延びる。幅0.85m、深さ0.1mを測る、幅広の深い溝である。遺物は土師器の細片のみが出土していることから、古墳時代前期に属する可能性もある。

260溝(図16・17) 調査区中央部で検出した、北東一南西方向に延びる溝である。北東側は攪乱に、南

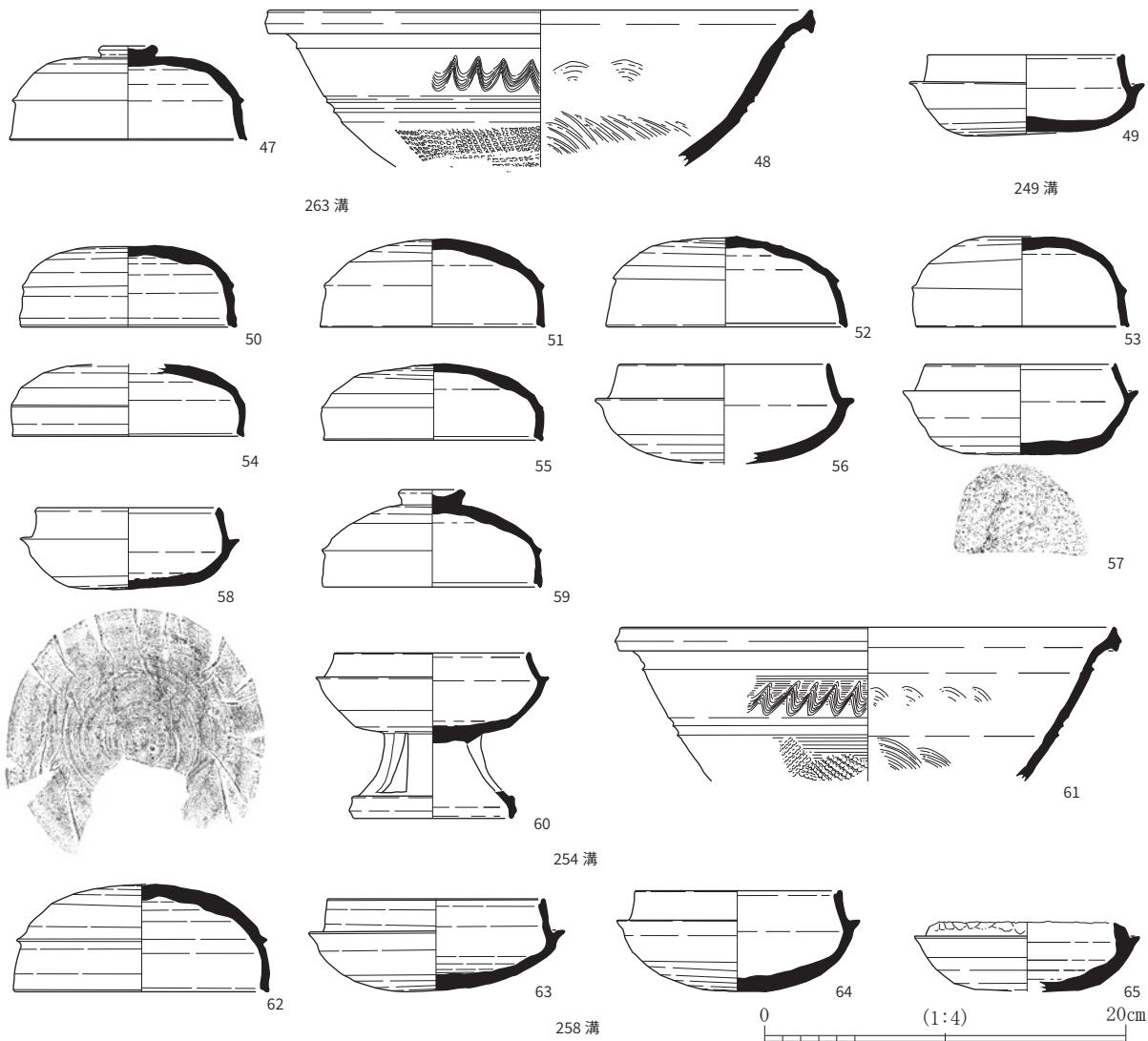


図18 A区溝出土遺物(1)

西側は 267溝に切られる。幅 0.8m、深さ 0.1mを測る。土師器甕体部片、須恵器杯蓋や甕体部の細片が出土した。古墳時代中期に属する。

261溝(図 16・17) 263溝の南約 2 mに位置する。北西—南東方向を指向する。幅 0.3m、深さ 0.2mを測る。規模や方向から 249溝と同一遺構の可能性がある。須恵器杯片や高杯脚部片が出土した。古墳時代中期に属する。

267溝(図 16・17・19・20、図版 6・25) 調査区中央部を北西—南東方向に延びるが、溝の南東端部は X=-138,889、Y=-48,448付近で収束する。幅 1.05m、深さ 0.4mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。遺物は土師器(66～ 69) や須恵器(70～ 95) が出土した。66は高杯である。杯部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く收める。脚部は大きく「ハ」字状に開き、端部は面をもつ。内外面の一部にハケ目が残るが、大半は摩耗により調整が不明瞭である。67は小形の甕である。68は長胴甕である。復元口径は 24.0cmを測り、体部は倒卵形を呈する。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリを施すが不明瞭である。69は甕もしくは甌の把手である。把手の上面に貫通するスリットが入る。70～ 73は杯蓋である。いずれも丸い天井部をもつ。74～ 78は杯身である。74は底部外面にヘラ記号が残る。75は焼成時の杯蓋の溶着が認められる。79・80は高杯の蓋である。79は丸く立ち上がる天井部をもつて対して 80はやや扁平に仕上げる。いずれも中凹みのつまみをもつ。81～ 85は有蓋高杯である。82・83は脚部にカキ目を施す。85は外反しながら短く開く脚部をもち、三方に円形の透かし孔を入れる。86は無蓋高杯である。体部外面に 2 条の鈍い凸線が巡る。また、体部下半と脚部にはカキ目を施す。87・88は脚部である。87は内面に同心円文が残る。88は図示できなかったが、三方に長方形の透かし孔が入る。89～ 91は有蓋短頸壺である。いずれも扁平な体部をもつ。90は底部外面を静止ヘラケズリで仕上げ、ヘラ記号を施す。91は脚が付き、脚部にヘラ記号をもつ。92・93は腹である。92は太い頸部が外上方へやや長く延びる。底部は平底状を呈する。93は尖り気味の底部をもつ。体部中央にカキ目と列点文を、頸部に波状文をそれぞれ施す。94は甕である。体部外面に平行タタキ目とカキ目が残る。95は鉢で、下半部外面に平行タタキ目が、内面に同心円文が残る。これらの須恵器は T K 47型式から M T 15型式に属する。

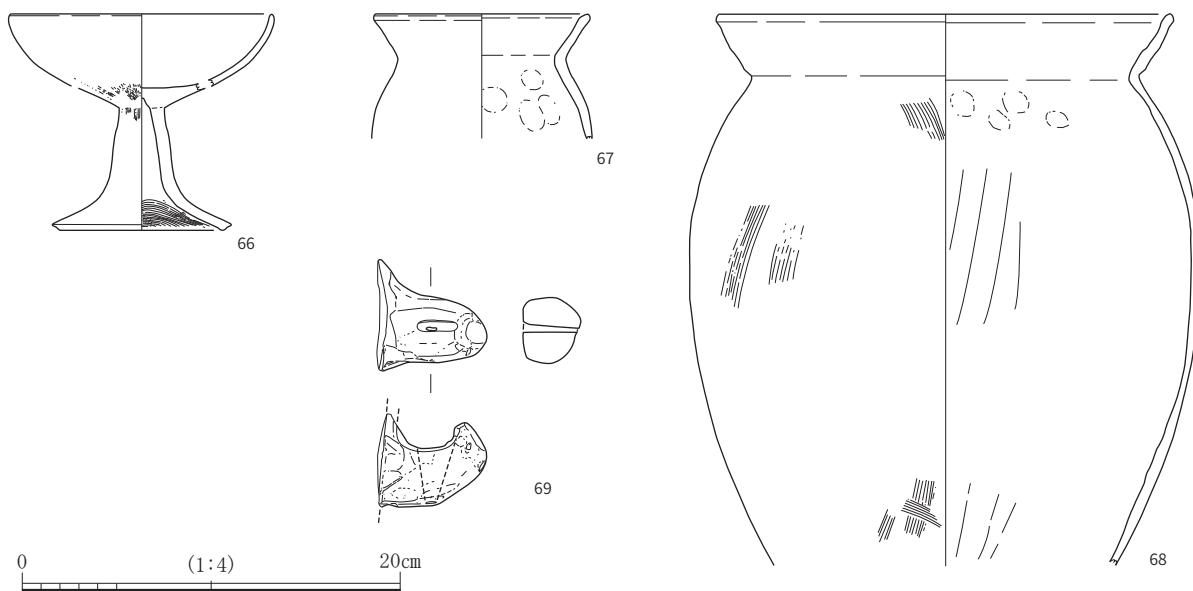


図 19 A 区 267 溝出土遺物 (1)

268溝(図16・17・21、図版6・25) 267溝の南肩部を沿うように延び、269溝が取り付く。規模は幅1.3m、深さ0.1mで、267溝と先後関係にある。遺物は土師器・須恵器・砥石が出土した。96～98は土師器甕である。いずれも表面の摩滅が顕著で、調整は不明瞭である。99～104は須恵器で、99は杯蓋、100～102は杯身である。99は口縁端部をやや肥厚させながら内傾する面をつくる。100は丸みを帯びた底部をもつ。103は壺体部で、尖り気味の底部をもつ。体部下半は格子目タタキと同心円文が残る。104は甕である。口径20.6cm、体部最大径36.0cmを測る。頸部は外反しながら開き、口縁端部は上方につまみ上げて面をつくる。口縁部下に凸帯が1条巡る。また、頸部内面にヘラ記号を施す。さらに、体部外

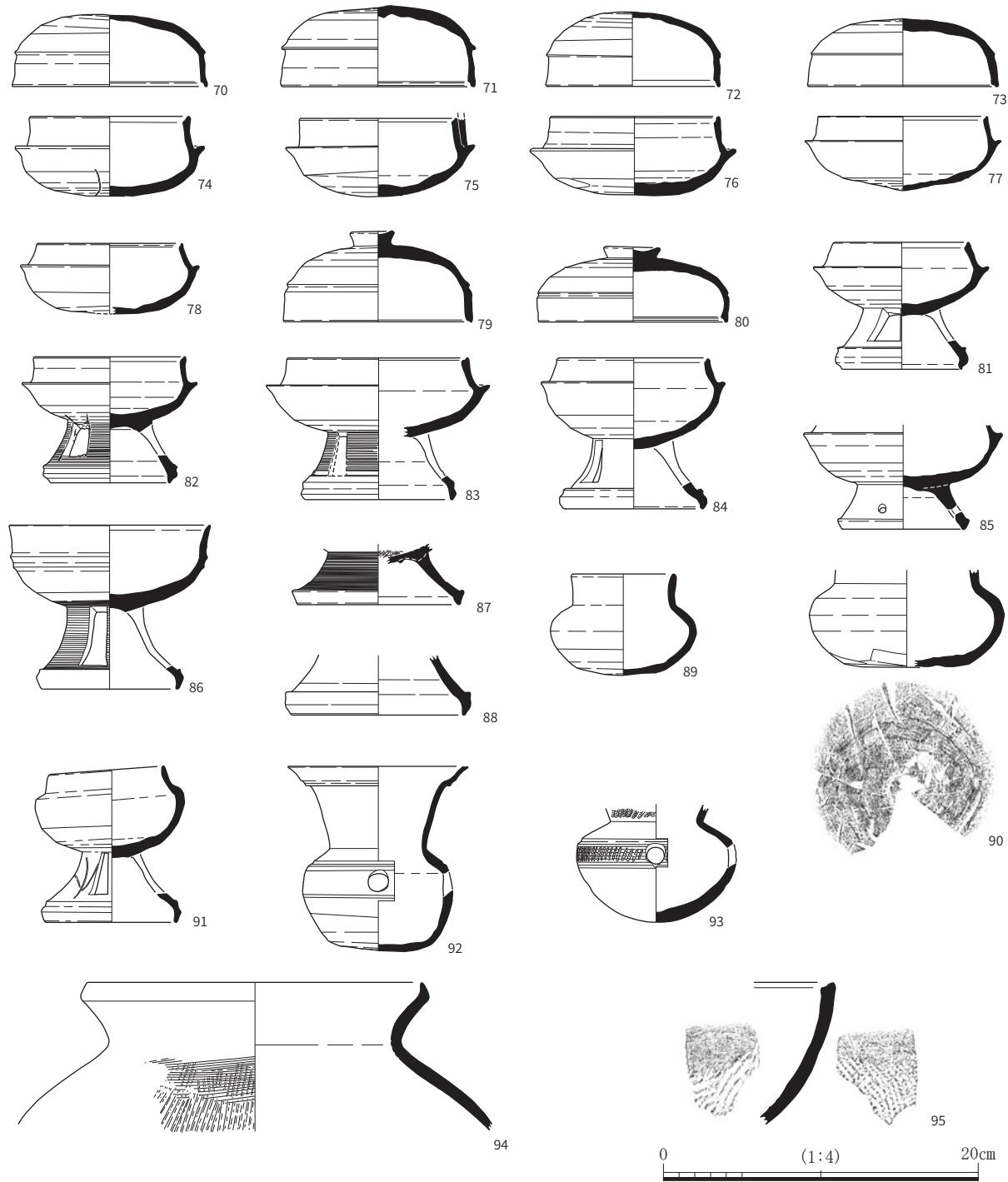


図20 A区267溝出土遺物(2)

面には漆の付着が認められる。これらの須恵器はTK 23型式からTK 47型式に属すると考えられる。105は砂岩製の砥石である。被熱していたため、使用痕は不明瞭である。その他にも丸底I式の製塩土器の細片が出土した。

269溝(図 16・17・21) X=-138,885、Y=-48,456付近で 268溝から派生し、南西方向に延びる。幅 1.2 m、深さ 0.1mを測る。106～111の須恵器が出土したほか、土師器甕や須恵器壺の細片が出土している。106は杯蓋である。口縁部を欠くが、内面に同心円文が残る。107は杯身である。108は無蓋高杯の杯部で、外面に波状文を施す。109・110は高杯脚部である。111は直口壺である。頸部はまっすぐ立ち上がり、口縁部付近で少し内湾させる。体部はなで肩を呈する。口縁部下には凹線が、下半部には2条の波状文が巡る。TK 47型式に属する。

270溝(図 16・17・21) 267溝の南西約 7 mを北西—南東方向に延びる。274土坑・276土坑の南に位置し、

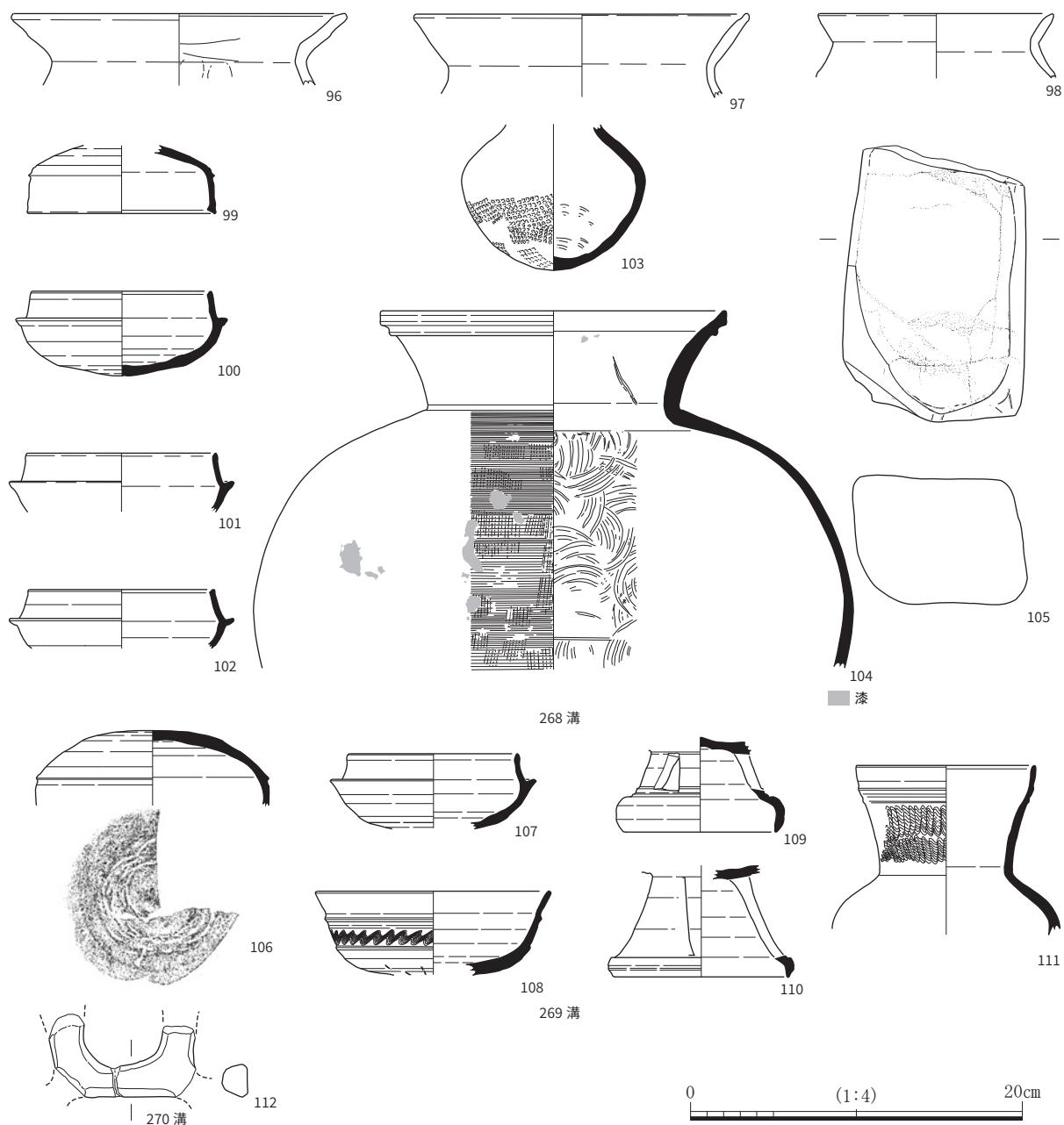


図 21 A区溝出土遺物 (2)

276土坑に切られる。幅 1.3m、深さ 0.1mを測る、幅広の浅い溝である。埋土は 2.5Y5/1黄灰 シルト混中粒砂・粗粒砂の単層で、302・303溝の埋土に似る。遺物は土師器甌底部(112) のほか、土師器甌体部片や須恵器杯片が出土した。112は円形や橢円形の蒸気孔をもつ。

281溝(図 16・22・23、図版7・26) 調査区中央東寄りを北西—南東方向に延び、途中で分岐する。検出時幅 7.0mと幅広の溝として掘削し始めたが、二段落ちになっており、流心部分は幅 1.2~ 2.0m、深さ 0.4mを測る。埋土は4層に分かれ、上から第3層目は 10YR6/1褐灰 シルト混極細粒砂～粗粒砂

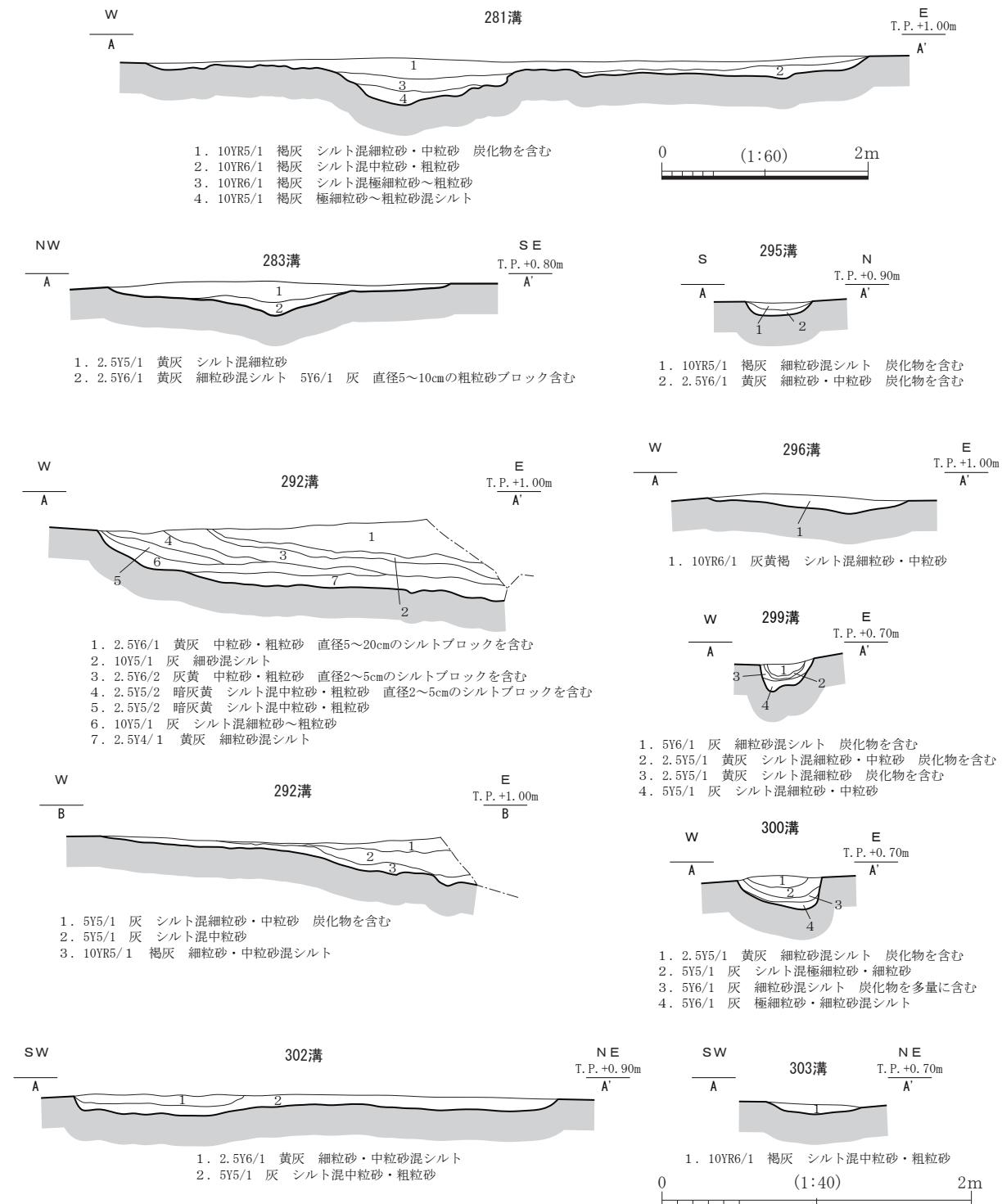


図 22 A 区溝断面 (2)

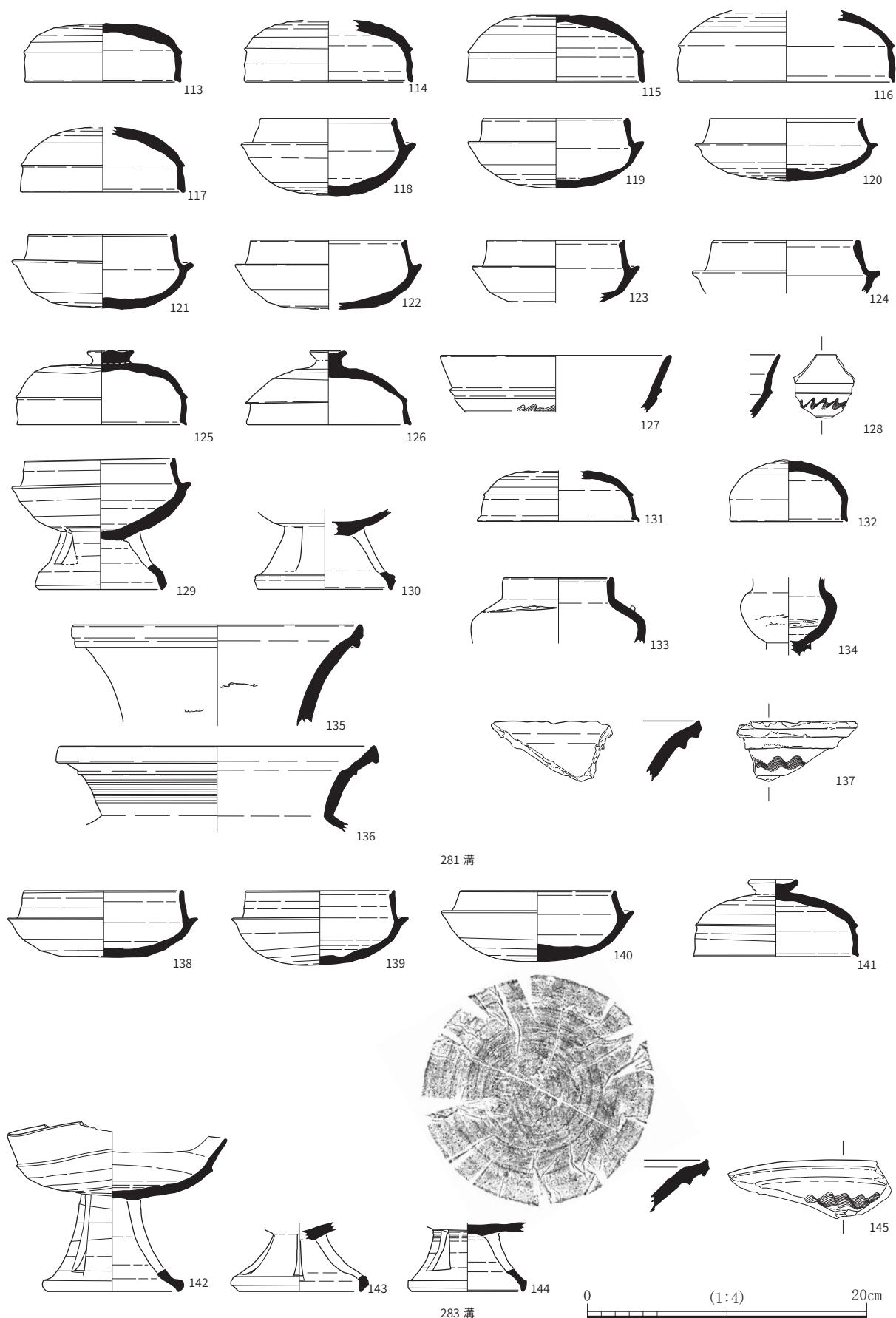


図 23 A 区溝出土遺物 (3)

の流水堆積である。溝内から 113～137の須恵器のほか、土師器や須恵器の甕・壺の細片が出土した。113～117は杯蓋である。116は口径 15.3cmと大振りである。118～124は杯身である。125・126は高杯蓋である。125はまっすぐ、126は外に広がる口縁部をもつ。また、126の天井部には重ね焼きの痕跡が残る。127・128は無蓋高杯の杯部である。129は有蓋高杯、130は脚部である。129の脚部には三方の長方形透かし孔を設けるが、その配置は不均等である。131・132は壺蓋である。132は口径 8.3cmを測り、丸い天井部をもつ。つまみが外れた痕跡がある。133・134は有蓋短頸壺である。133の肩部には重ね焼きの際の溶着が認められる。134は小形で脚が付く。体部に粘土紐の痕跡が残る。135～137は甕口頸部である。136は頸部にカキ目を、137は波状文を施す。TK 47型式に属する。

283溝(図 16・22・23、図版8・26) X=-138,883, Y=-48,450付近を北東—南西方向に延び、北東部は281溝に切られる。幅 2.2m、深さ 0.05～0.2mを測る、二段落ちの溝である。溝の底から須恵器(138～145) や土師器片が出土した。138～140は杯身である。138は平らな底部を、139・140は丸みを帯びた底部をもつ。140は底部外面にヘラ記号を付す。141は高杯の蓋である。142は無蓋高杯である。三方に長方形透かし孔を穿つ。杯部の焼け歪みが顕著である。143・144は高杯脚部である。143は四方に長方形透かし孔を配する。145は甕口頸部である。頸部外面に波状文を施す。これらの須恵器はTK 208

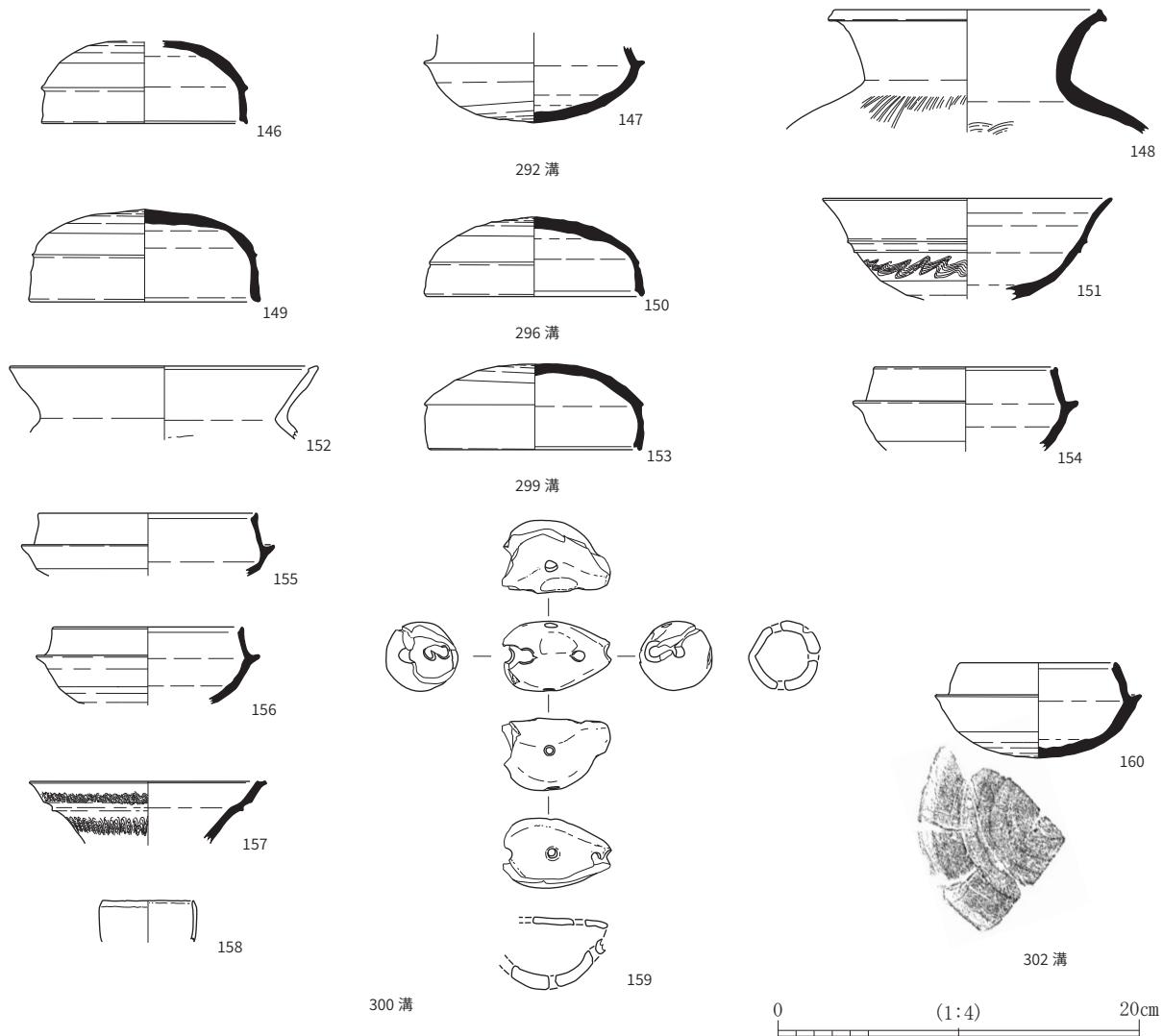


図 24 A 区溝出土遺物 (4)

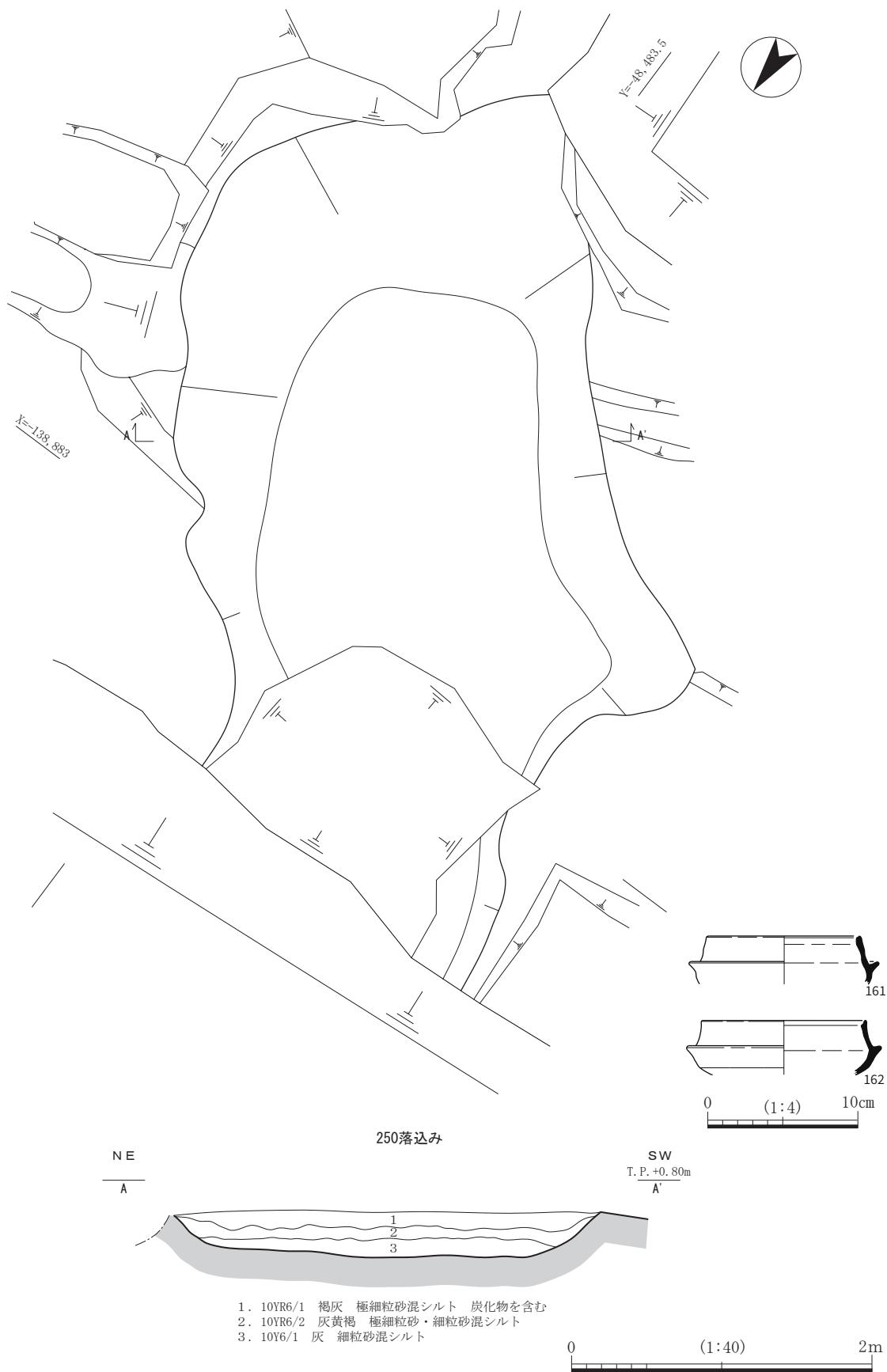


図 25 A 区 250 落込み平面・断面 出土遺物

型式からTK 47型式に属する。

292溝(図16・22・24、図版26) 調査区の東半部、Y=-48,428ライン付近を南北方向に延びる不整形な溝である。溝の東肩部は287溝に切られる。幅2.6m以上、深さ0.5mを測る。遺物は須恵器(146～148)のほかに土師器甕体部片が出土した。146は杯蓋である。丸い天井部をもつ。147は杯身で丸みのある底部をもつ。148は甕である。口縁端部は上下に拡張させて面をつくる。体部に平行タタキ目と同心円文が残る。いずれもTK 47型式に属する。

295溝(図16・22) 調査区東半部、X=-138,878、Y=-48,436付近を北東一南西方向に延びる。規模は幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は2層で、遺物は出土しなった。

296溝(図16・22・24、図版26・27) 調査区東半部、X=-138,878、Y=-48,431付近を北東一南西方向に延びる。溝の北東側は調査区外に延び、南西側は攪乱によって失われる。また、溝の南西端は二段落ちとなる。埋土は単層で土師器甕の細片や、須恵器(149～151)が出土した。149・150は杯蓋である。149は平らな天井部を、150は丸みを帯びた天井部をもつ。151は無蓋高杯の杯部である。体部に2条の凸帶とその下部に波状文を施す。TK 47型式に属する。

299溝(図16・22・24、図版8・27) 積穴建物2の南に位置する。北北西一南南東方向に延びるが、溝の両端は281・286溝に切られる。幅0.3m、深さ0.2mを測る。遺物は土師器甕(152)、須恵器杯蓋(153)、杯身(154)が出土した。152は頸部が外上方に開き、口縁端部は面をつくる。153は丸い天井部と内湾する体部をもつ。須恵器はTK 47型式に属する。

300溝(図13・16・22・24、図版8・9・27) 299溝の西で検出した。281溝と積穴建物2に切られるが304土坑より新しい。幅0.6m、深さ0.2～0.6m、長さ3.2mを測る。遺物は須恵器(155～157)、製塩土器(158)、土製品(159)のほかに土師器や須恵器の甕体部片が出土した。155・156は杯身である。157は壺もしくは鶴の口頸部である。口縁部と頸部の境は凸帶によって明瞭な段をなし、大きく開いて

端部は面をつくる。口縁下と頸部に波状文を施す。

158は丸底I式の製塩土器である。159は不明土製品である。中空で両端部を欠く。全体の形状は滴状を呈する。残存する長さは6.0cm、高さ3.8cm、最大幅4.0cmを測る。計8か所の穿孔が認められるが、いずれの穿孔も対称の位置に穿たれている。穿孔の位置や数は異なるが、新免遺跡で出土した古墳時代前期の鳥形土製品に似る。

302溝(図16・22・24、図版9) 調査区東端部で検出し、南北方向に延びる不整形な溝である。最

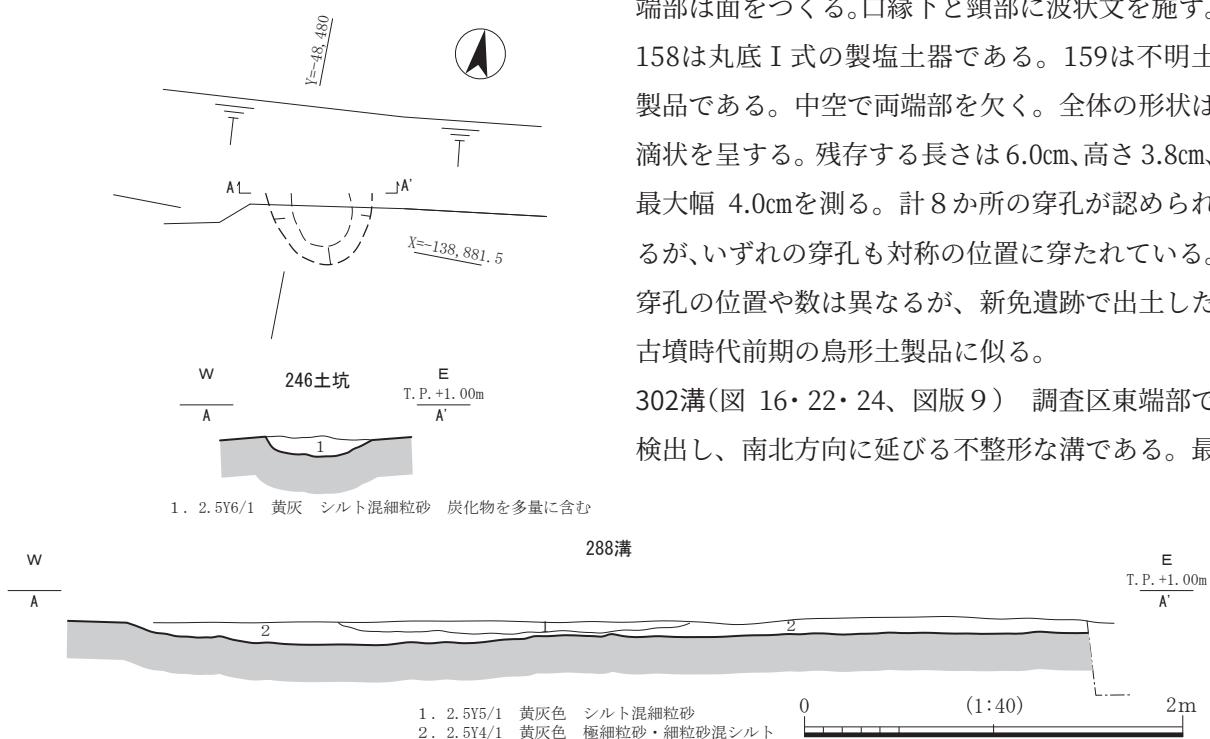


図26 A区246土坑平面・断面、288溝断面

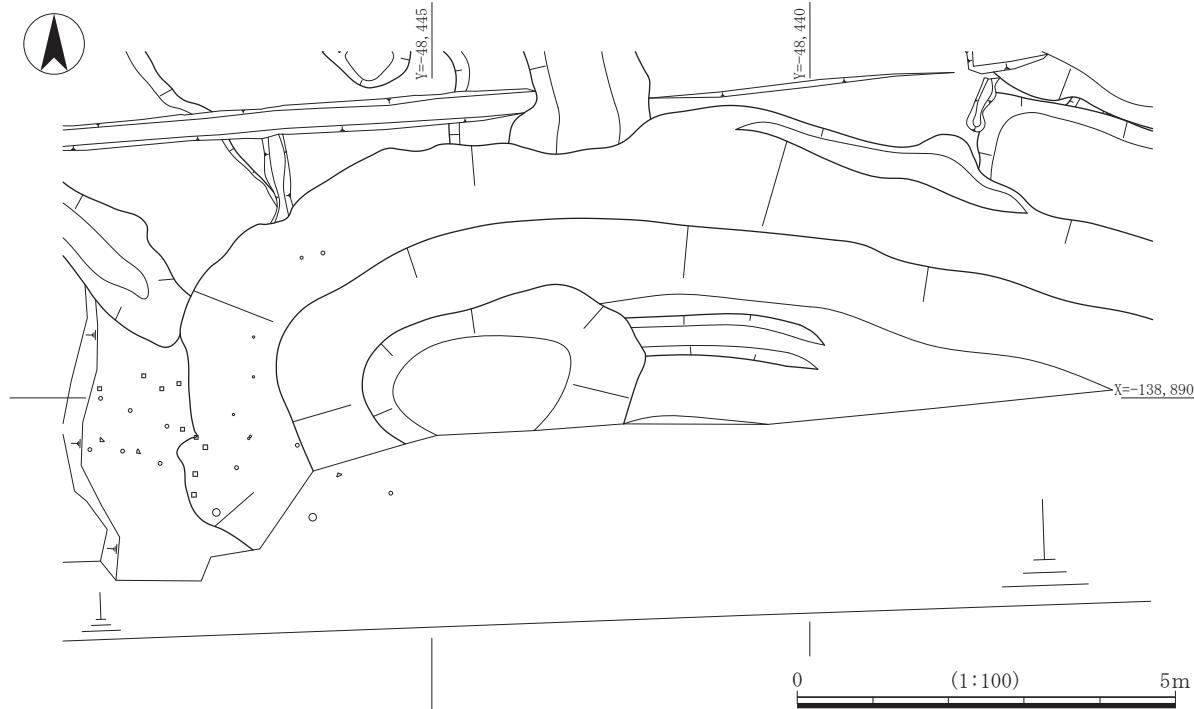


図27 A区 286溝杭列検出状況

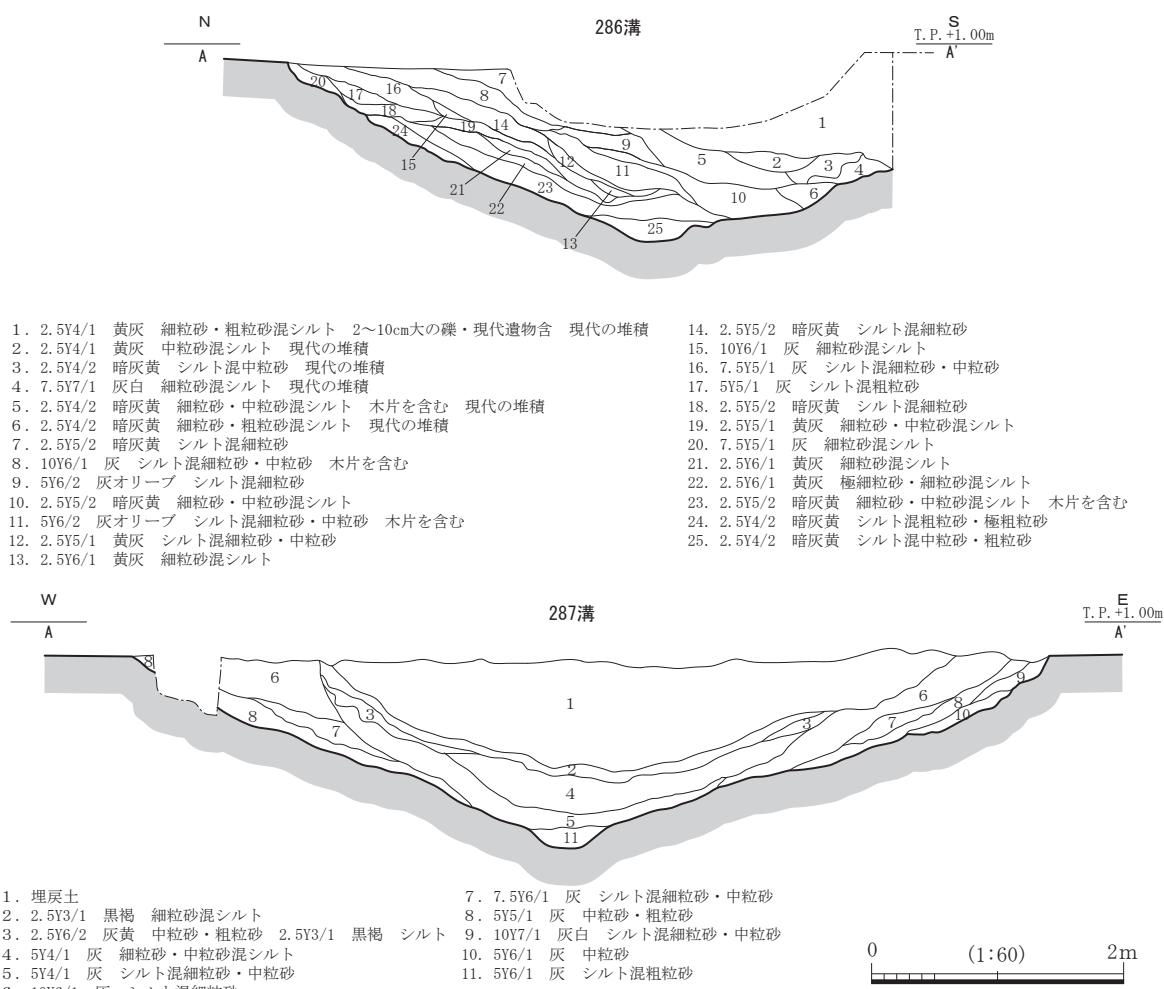


図28 A区 286・287溝断面

大幅 3.1m、深さ 0.1mを測る。遺物は須恵器杯身(160) が出土した。160は丸みを帯びた底部をもち、外面にヘラ記号が残る。TK 47型式に属する。

303溝(図 16・22、図版9) 302溝の東に位置する。北西一南東方向に延びる。幅 0.6m、深さ 0.05mを測る。埋土は单層で、遺物の出土はなかった。

250落込み(図 25) 調査区の西端部で検出した、不整形な落込みである。長さ 6m以上、幅 2.8~3.1m、深さ 0.3mを測る。埋土は滯水堆積層である細粒砂や極細粒砂の混じるシルト層が堆積する。遺物は須恵器杯身(161・162) が出土したほか、図示できなかったが、土師器や須恵器の甕や壺の細片が出土した。杯身はいずれも TK47型式に属すると考えられる。

## 2. 中・近世の遺構と遺物

246土坑(図 26) 第2層上面で検出した。X=-138,881.5、Y=-48,480に位置する。埋土は单層で炭化物を多く含む 2.5Y6/1黄灰 シルト混細粒砂であった。遺物は出土しなかった。

288溝(図 16・26) 調査区中央東寄り、X=-138,887ライン付近で検出した。遺構は第2層上面で検出した。溝の南辺部は 286溝に、東端部は攪乱に切られる。規模は長さ 5m以上、幅 1.5m以上、深さ 0.1mを測る。遺物は図示できなかったが、古墳時代の土師器や須恵器片が出土したが、検出面から考えてこれらの遺物は混入と考えられる。

286溝・287溝(図 16・27~29、図版9) 第2層上面で検出した。286・287溝は調査区の東半部に位置する。287溝は南北方向に延び、調査区南辺部で南東方向に屈曲する。286溝は、287溝の屈曲部から派生して西方向に延び、約 20mで収束する。溝の南半部は調査区外に広がる。溝の断面形はいずれも「V」字状を呈し、底部には筋掘りが入る。なお、286溝の西端肩部には円柱・角柱・ミカン割材を使用した杭列が並ぶ。溝の規模は 286溝が幅 4.8m以上(推定復元幅 5.8m)、深さ 1.5m、287溝は幅 7.3m、深さ 1.5mを測る。断面観察の結果、287溝は少なくとも一度の浚渫が認められ、管理されながら使用されていたことが推測できるが、最終的に人為的に埋め立てられる。286溝から近世の陶磁器や土製品(163~168) が出土した。163・164は瀬戸美濃窯の灯明皿である。163は口径 6.4cm、器高 1.5cmで、内面に灯心支えをもつ。164は口径 6.0cm、器高 1.1cmで、内面にハリ支えの痕跡が残る。口縁下外面に煤が付着する。165は染付碗である。166は堺焼播鉢である。167は瓦質の火鉢底部である。168は土師質の炮烙である。難波分類のD類である。18世紀の所産である。

286溝・287溝とともに、埋積状況や出土遺物から遅くとも近世には掘削されており、昭和 25(1950)年の第六中学校建設に伴って埋め立てられた。また、286溝の性格については、規模や形状から船止めとしての機能を有していたと推察される。なお、286溝の西端肩部で検出した杭列であるが、これは桟橋などの施設の痕跡と考えられ、船の避難場所や物資の積み下ろし場所として機能していたのであろう。

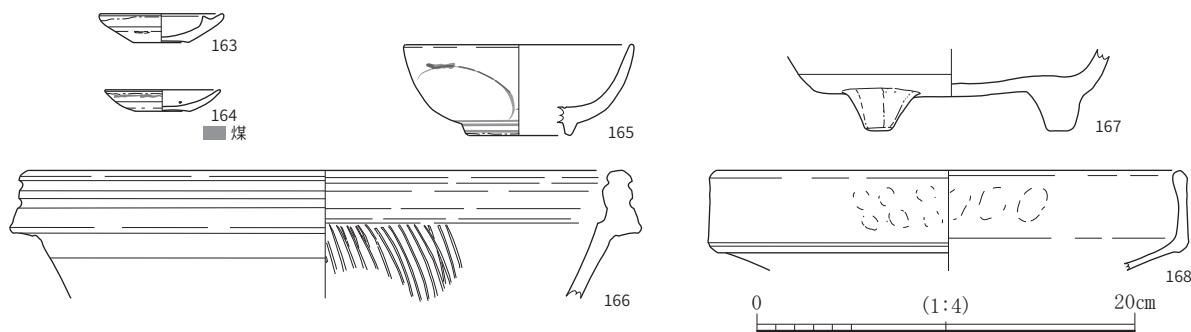


図 29 A 区 286 溝出土遺物

当遺跡の南西約1kmにある庄本遺跡においても、戦国末期から江戸時代前期の船止めと考えられる水路2が検出されており、神崎川と猪名川の河口付近では水運が発達していたことを裏付ける資料となる。

### 3. 包含層の遺物

第4層出土遺物(図30、図版27) 第4層の砂から弥生土器壺底部(169)が出土した。器壁は摩滅が激しいため、調整は不明であるが、底部内面に指圧痕が残る。弥生時代中期に属すると考えられる。

第2層出土遺物(図30、図版27) 第2層から以下の遺物が出土した。弥生土器・須恵器・瓦器・製塩土器などが出土した。170は弥生土器甕底部である。外面にタタキが残る。弥生時代後期の所産である。171は土師器甕口縁部である。古墳時代中期の産である。172～185は須恵器である。172～175は杯蓋である。175は口径16.4cmを測る。176は壺蓋である。177～179は杯身である。179は口径15.0cmを測る。180は無蓋高杯である。181は高杯脚部、182・183は壺頸部である。182は頸部に波状文を、183は頸部に二段の櫛描き斜線文を施す。184は提瓶である。体部側面に直交して環状の耳が付く。前後面に回転を利用したカキ目調整を施す。185は大形の甕口頸部である。頸部は外反しながら大きく開くが、口縁端部は内傾させて面をつくる。頸部に鈍い凸帯を巡らせて文様帶をつくり、波状文を施す。186・187は脚台III式の製塩土器である。どちらも二次被熱が認められる。188は黒色土器A類の椀である。内外面に暗文状のヘラミガキを施す。

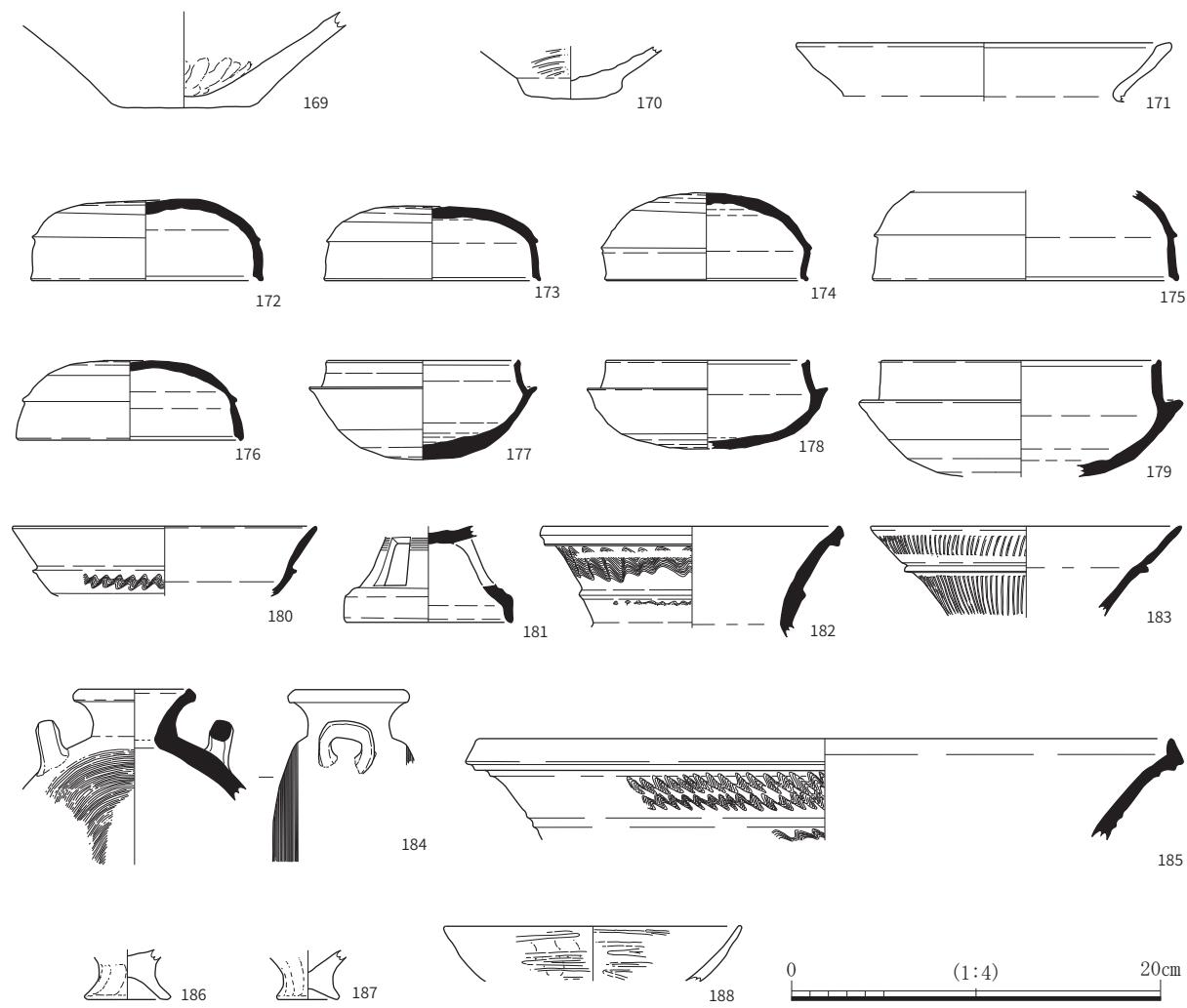


図30 A区包含層出土遺物

### 第3節 B区の調査

B区は、A区の南約20mに位置する。東西約20~25m、南北約6mの台形を呈し、面積は164m<sup>2</sup>である。

B区の調査は、まず、中学校建設時の盛土や攪乱土、さらに旧耕作土と近世耕作土を重機で除去した後、中世から古墳時代の遺物包含層(第2層)を人力で掘削して、古墳時代の遺構面を検出した。その際、下層に遺構があることが確認できたため、第2層下面および第3層下面で遺構検出を実施した。第2層下面の遺構面では、古代および古墳時代中期の遺構・遺物が検出された。なお、遺構面の標高は、概ねT.P.+0.65~0.8mで、東から西、北から南へと緩やかに傾斜する。

#### 1. 弥生時代の遺構と遺物(図31、図版10・11・27)

第3層を除去して検出した。遺構は流路を1条検出した。

240流路(図31、図版10・11・27) 調査区西半部を北西—南東方向に延びる。幅10m以上、検出した箇所での深さは1.3mを測る。埋土は、中粒砂～極粗粒砂の流水堆積層が下層に堆積し、上層には最終堆積層である極細粒砂・細粒砂混シルト層が堆積する。下から3層目の2.5Y5/1黄灰 中粒砂・粗粒砂

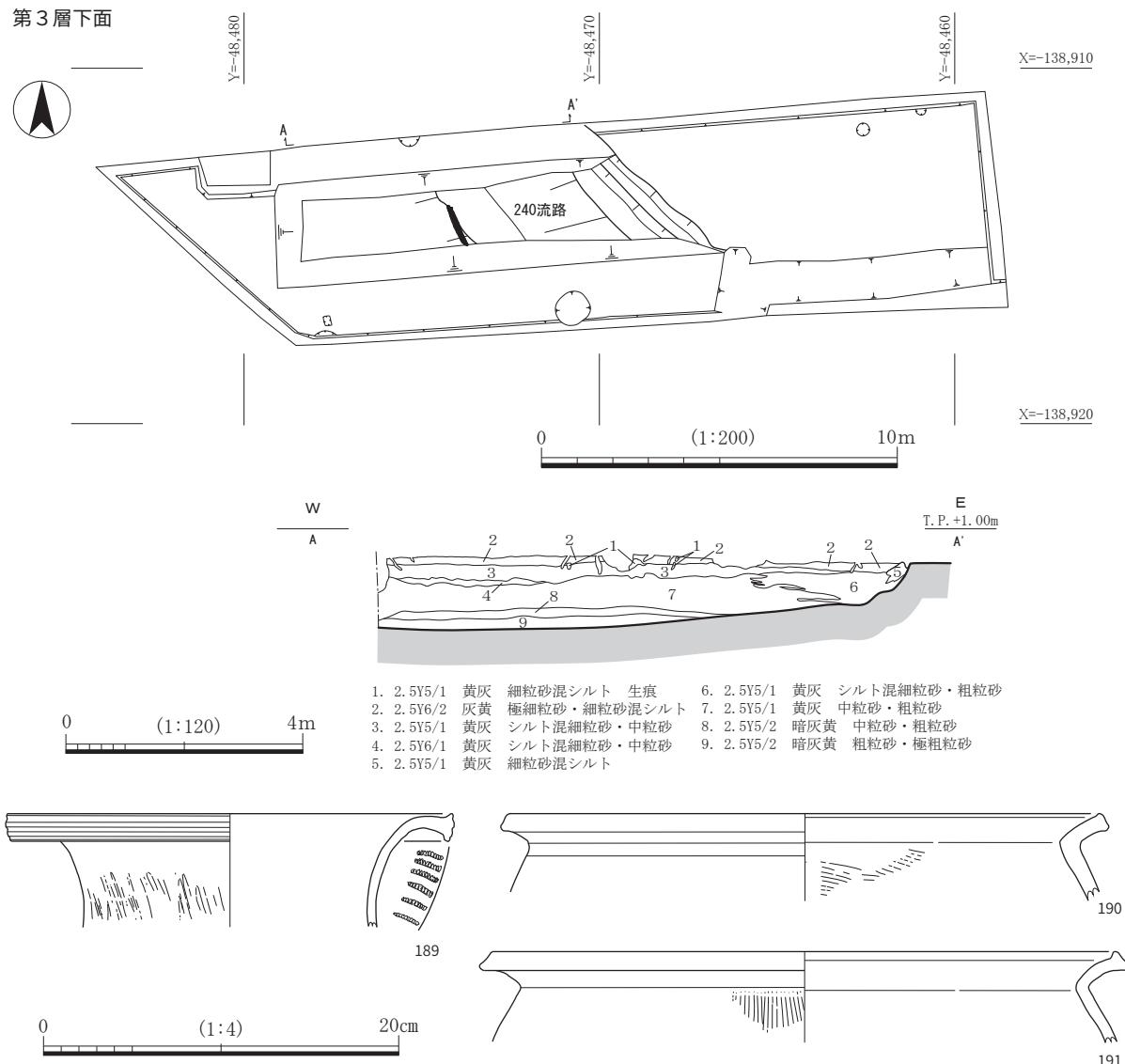


図31 B区240流路平面・断面 出土遺物

第2層下面

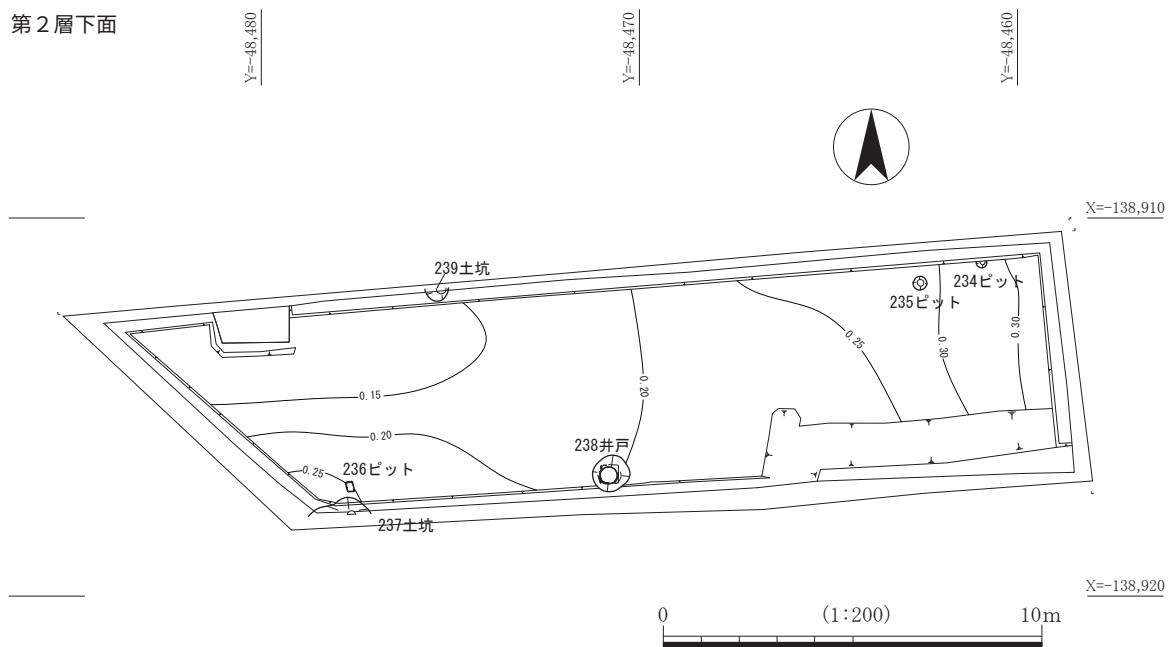


図32 B区第2層下面

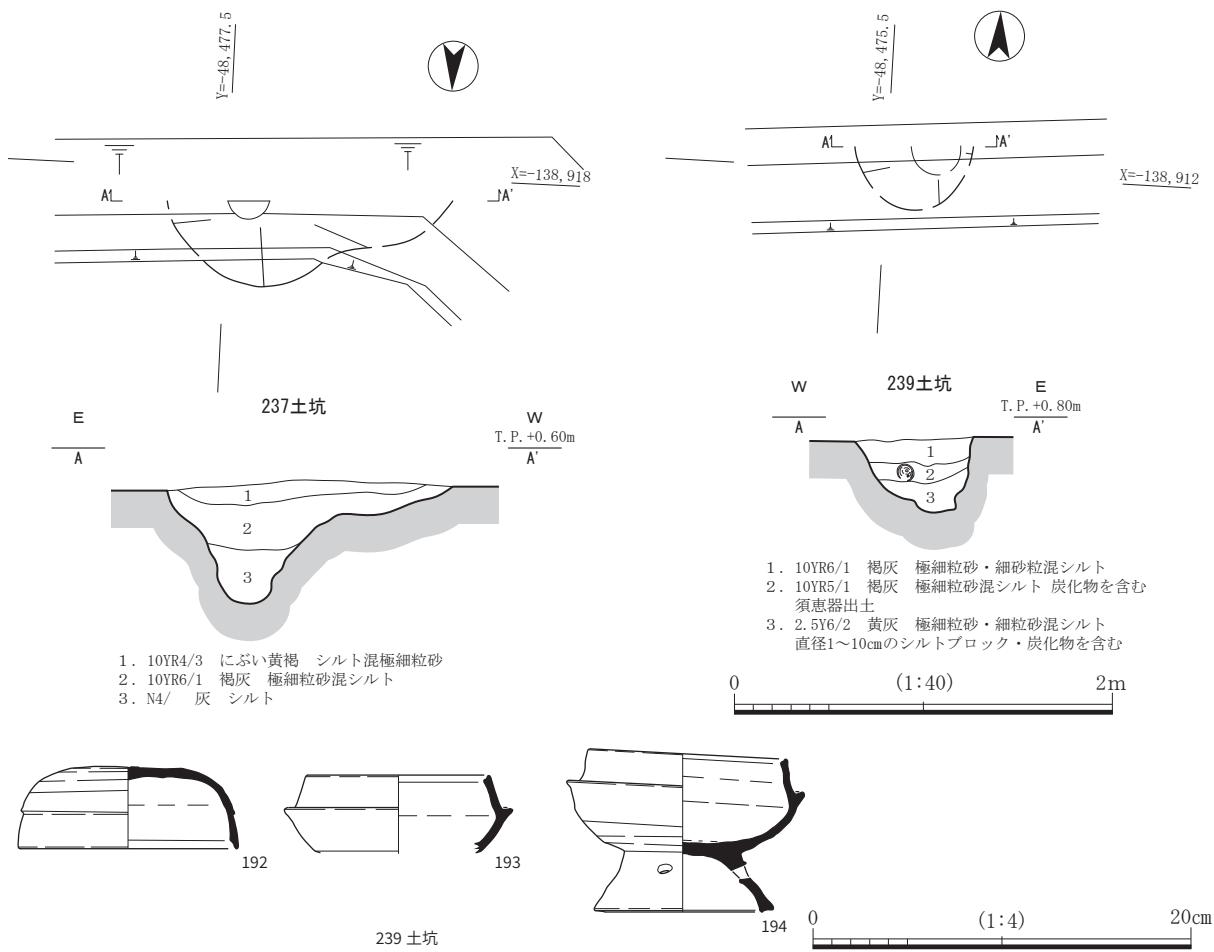


図33 B区土坑平面・断面 出土遺物

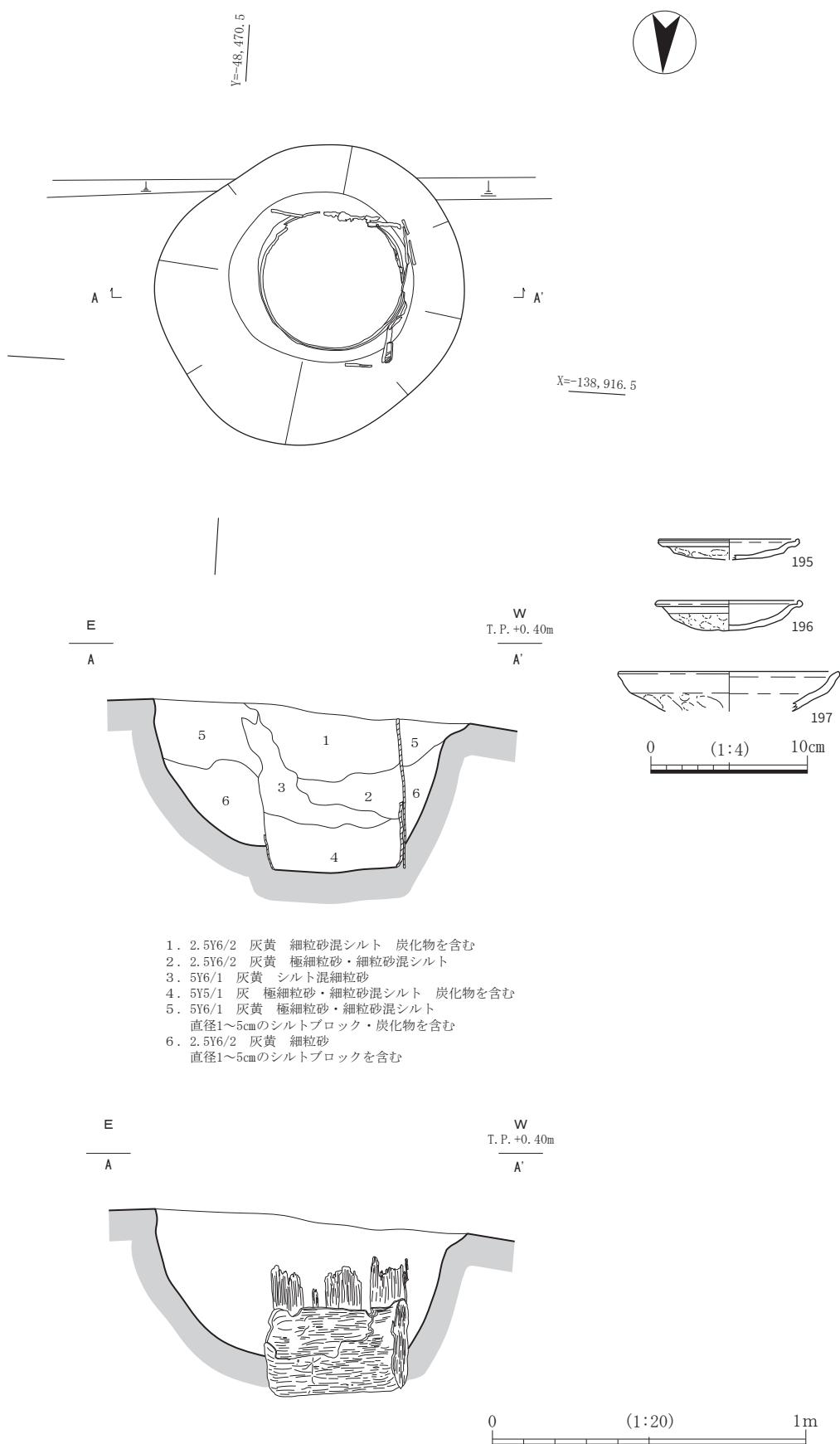


図 34 B 区 238 井戸平面・断面 出土遺物

層から弥生土器(189～191)が出土した。189は広口壺である。口縁部は大きく外反し、端部は上下に拡張させて面をつくり、凹線文を施す。内縁部には列点文が巡る。190・191は甕である。いずれも頸部は「く」字状に折れて短く外反し、口縁端部は面をもつ。191は口縁端部を上方に少し拡張させる。これらの土器は畿内第IV様式に属する。

## 2. 古墳時代中期の遺構と遺物(図32、図版11・27)

当該期の遺構は少なく、土坑を2基検出した。

237土坑(図33) 調査区の南西隅で検出した。遺構の大半は調査区外に延びる。規模は幅1.5m、深さ0.6mを測る。埋土は3層で最下層にはN4/灰シルト層が堆積しており、井戸の可能性がある。

239土坑(図33、図版11・27) 調査区の北壁で検出した。遺構の大半は調査区外に延びる。規模は幅0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は3層で第2層から須恵器(192～194)が出土した。192は杯蓋である。平らな天井部をもち、天井部と体部を分ける稜は鈍い。口縁端部は内傾する。193は杯身である。194は高杯である。脚部は短いが大きく外に開く。三方に円形の透かし孔を穿つ。TK23型式に属する。

## 3. 平安時代の遺構と遺物

238井戸(図34、図版11・27) 調査区中央南辺部で検出した。掘方の規模は直径1.0m、深さ0.45mを測る。掘方の底に板材を打ち込んで一辺0.5mの方形の井戸枠をつくり、その内側に曲げ物を据えて井筒とする。曲げ物は直径0.45m、高さ0.3mを測る。井筒内から土師器皿(195～197)が出土した。195・196はいわゆる「て」字状口縁皿である。197は口縁部と体部の境を屈曲させ、体部はユビオサエ、口縁部はナデを施す。11世紀の所産である。

## 第4節 C区の調査

C区は、調査地の最も南側に位置し、東西約76m、南北約16mの台形を呈し、面積は1,021m<sup>2</sup>である。C区の調査は、本体工事の工程に合わせて南北に二分割して行ったが、まとめて報告する。

当調査区では弥生時代終末期の土坑や溝、古墳時代前期の土坑・井戸・ピット・溝、古墳時代中期の竪穴建物・掘立柱建物・土坑・ピット・溝、古代の掘立柱建物・井戸・ピット・溝、中世の溝・落込みなどが検出された。

## 1. 庄内期から古墳時代前期の遺構と遺物(図35、図版12～16・28・29)

当遺跡は昭和2(1927)年に出土した土器が、昭和40(1965)年に田中琢氏によって弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器様相を庄内式土器と呼称されて以来、注目されてきたが、当該期の遺構はあまり検出されず、実態は不明であった。今回の調査では土坑・井戸・ピット・溝などが検出されたが、建物や墓域を示す遺構は検出されず、集落域の縁辺部の様相を示すものであった。

24土坑(図36・37、図版14) 調査区中央東寄り、X=-138,949.5、Y=-48,420付近で検出した。遺構の三方を後世に掘削された1～3溝によって欠く。不整な楕円形を呈し、規模は長径3.0m以上、短径2.5m、深さ0.2mを測る。埋土は3層あり、第2層は炭を多く含む極細粒砂層であった。遺構の底面で土師器(198～201)が出土した。198・199は甕である。198は口縁部がまっすぐ外に開き、端部に面をつくる。199は二重口縁をもつ甕である。大きく外反する頸部から、内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。端部は丸く收める。山陰系の搬入品と考えられる。200は小型器台の杯部である。内湾しながら立ち上がり、端部は短くつまみ上げる。201は脚部である。外反しながら開き、端部は面をもつ。摩滅が著しく調整は不明瞭であったが、外面にヘラミガキ調整がわずかに残る。これらの土器は庄内期から古墳時

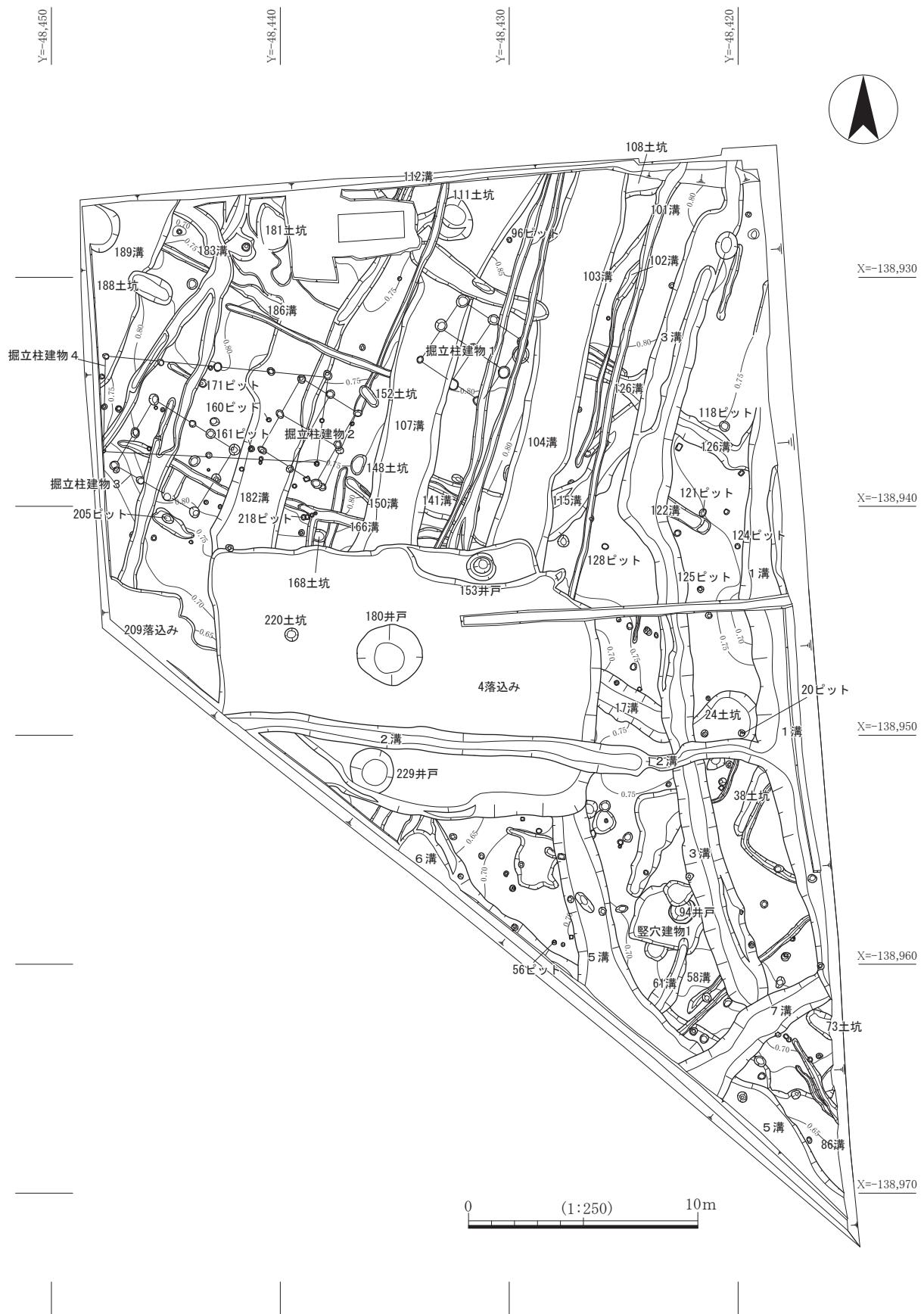


図 35 C 区第 2 層下面

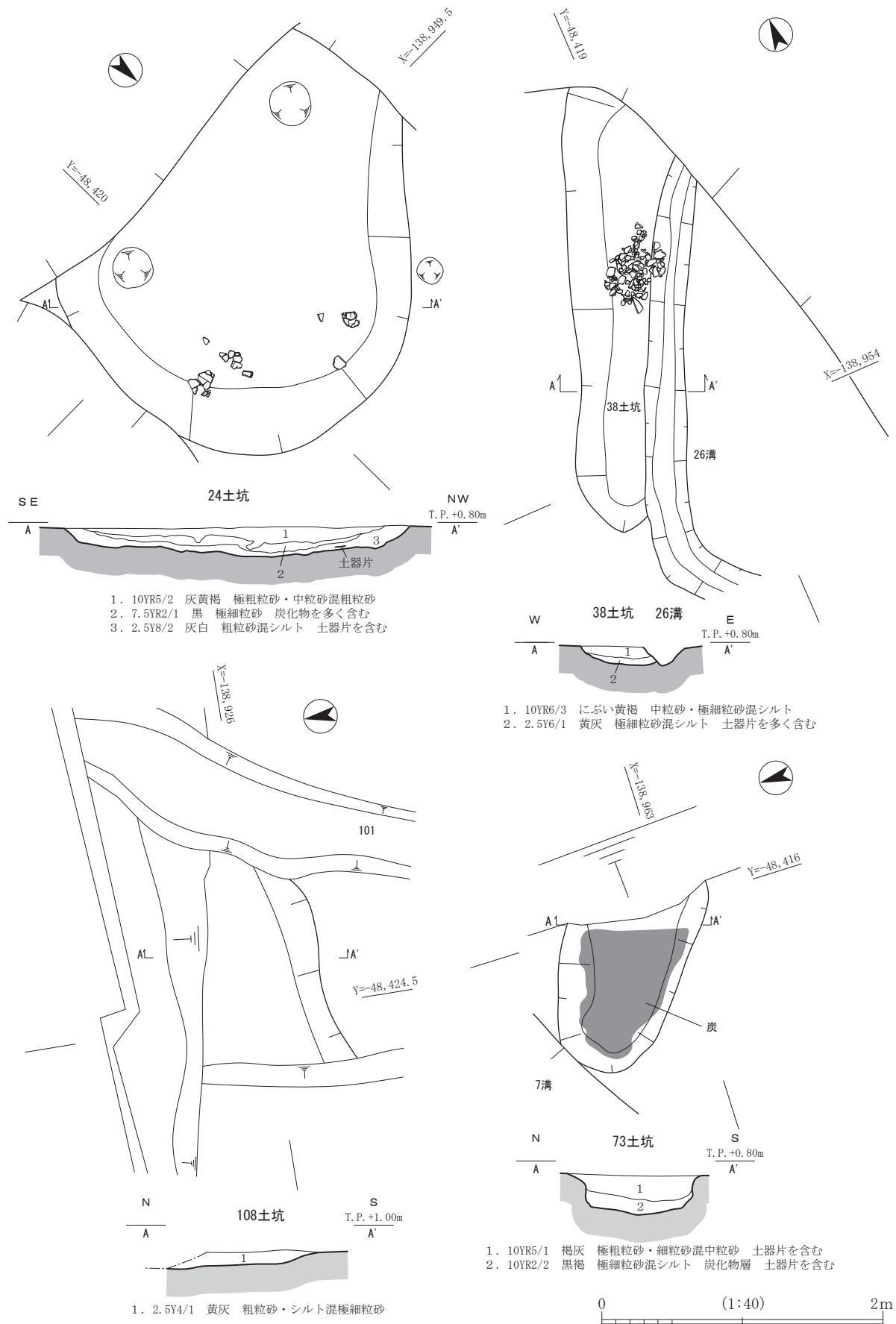


図 36 C 区土坑平面・断面

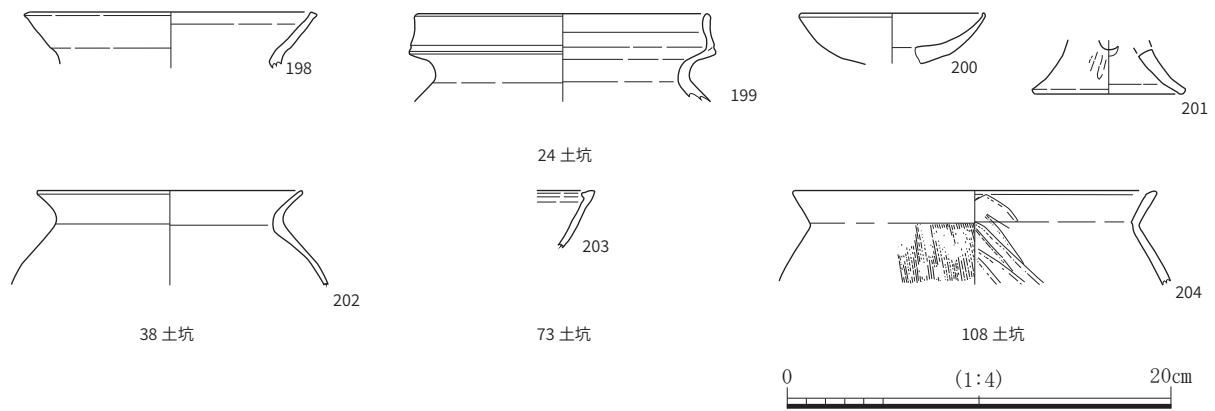


図 37 C 区土坑出土遺物

代前半に属すると考えられる。

38土坑(図 36・37、図版 14) 24土坑の南約 3 m、X=-138,949.5、Y=-48,420付近で検出した北東一南西方向に延びる溝状の土坑である。土坑の東辺は 26 溝に、北半部は 1 溝に切られる。規模は幅 0.8m、長さ 3.0m以上、深さ 0.1mを測る。埋土は 2 層で、上層から甕(202)などの土器片がまとめて出土した。202は外反気味に短く開く口縁部をもち、端部は面をもつ。摩滅が顕著で調整は不明瞭である。

73土坑(図 36・37、図版 14) 調査区の南東辺部、X=-138,963、Y=-48,416に位置する。遺構の東半部は調査区外に延びる。平面形は不整形な橢円形を呈する。規模は長さ 1.5m以上、幅 0.9m、深さ 0.3mを測る。埋土は 2 層で、下層は炭が 0.1mの厚さに堆積する。上層から図示できなかったが、二重口縁壺や甕体部の細片が、下層から土師器甕(203)や甕体部片などが出土した。203は布留式甕口縁部である。直線的に立ち上がり、端部は内側に折り曲げて面をつくる。

108土坑(図 36・37) 調査区の北東端、X=-138,926、Y=-48,424.5に位置する。遺構の北側を攪乱で、東西を 101・104 溝で切られる。長辺 1.5m、短辺 0.8m、深さ 0.1mを測る。埋土は単層で、土師器甕(204) や図示できなかったが高杯片などが出土した。204は体部から「く」字状に折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端部は内傾する面をつくる。体部外面にはハケ調整を施し、内面には板状工具による痕跡が残る。

148土坑(図 38) 調査区中央西寄り、X=-138,938.5、Y=-48,436.5に位置する。平面形は不整形な橢円形を呈し、規模は長径 0.9m、短径 0.6m、深さ 0.1mを測る。埋土は単層であった。遺物は図示できなかったが、土師器の甕や高杯の細片が出土した。

152土坑(図 38) 調査区の中央西寄り、148土坑の北約 3 mに位置する。平面形は不整形な橢円形を呈する。規模は長径 1.1m、短径 0.4m、深さ 0.1mを測る。埋土は単層であるが、第 4 層由来のブロック土が含まれており、人為的に埋められたと考えられる。遺物は土師器の細片が出土した。

168土坑(図 38) 調査区の中央西寄り、148土坑の南西約 3 mに位置する。平面形は橢円形を呈し、規模は長径 0.7m、短径 0.5m、深さ 0.1mを測る。遺構の東西端は古墳時代中期の溝に切られる。埋土は単層で、遺物は土師器の細片が出土した。

181土坑(図 38、図版 15) 調査区の北東辺、X=-138,927.5、Y=-48,440.5付近で検出した。不整形な橢円形を呈する。東辺部は攪乱によって失われる。規模は長径 2.2m、短径 1.2m以上、深さ 0.05mを測る。直口壺(205) が出土した。205はなで肩の体部からまっすぐ外上方に開く頸部をもち、端部外面に面をつくる。摩滅が顕著で調整は不明瞭であったが、体部内面にヘラケズリもしくはハケ調整の工具

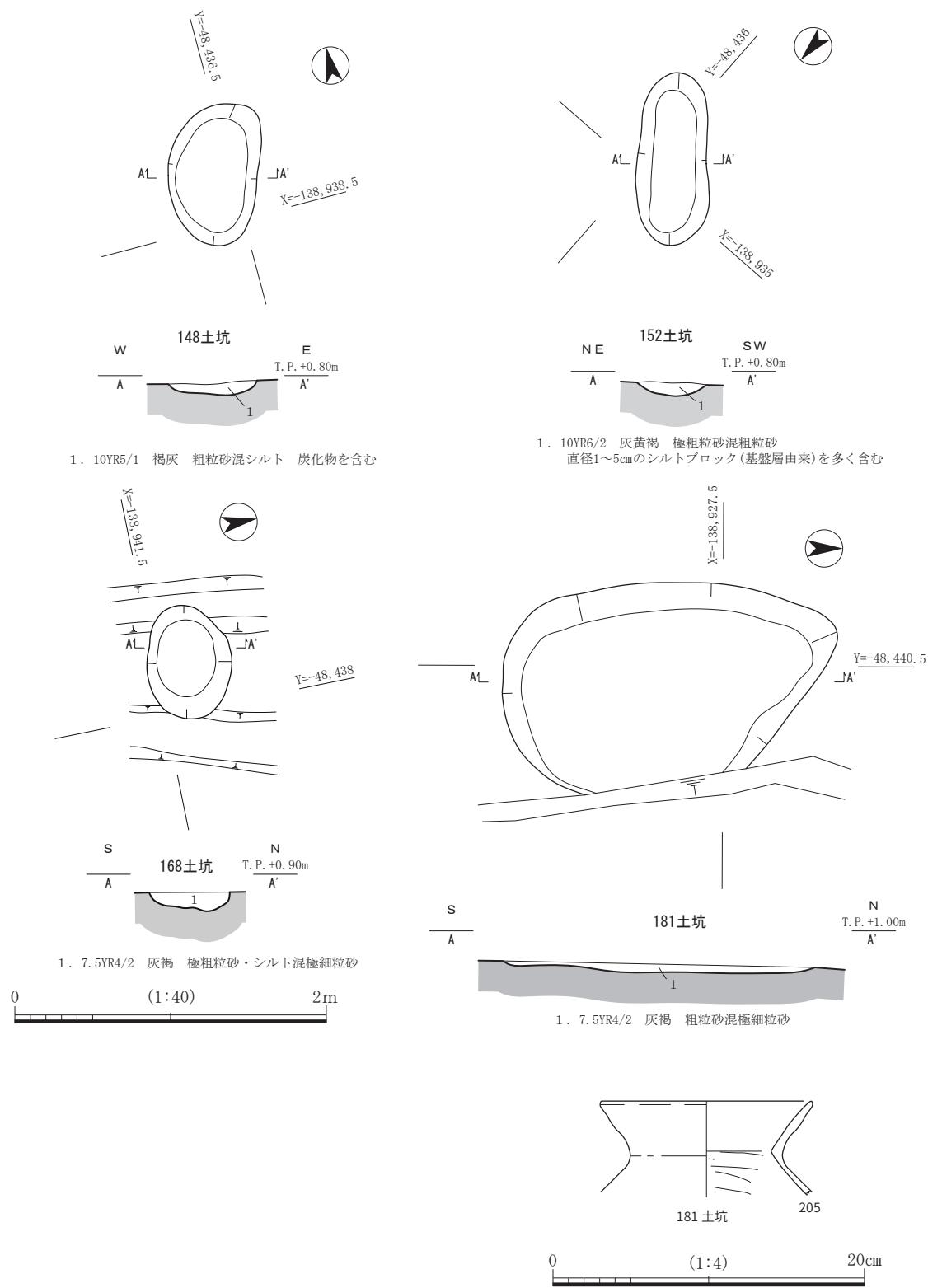


図 38 C 区土坑平面・断面 出土遺物 (1)

痕がわずかに残る。胎土は生駒山西麓産と考えられる。

188土坑(図 39、図版 16・28) 調査区の北西部、X=-138,930.5、Y=-48,445に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺 2.0m、短辺 1.1m、深さ 0.3mを測る。断面形は逆台形である。遺構の西端部で 189溝との切り合い関係があり、新旧関係が確認できた。遺構の東半部に集中して土師器(206～

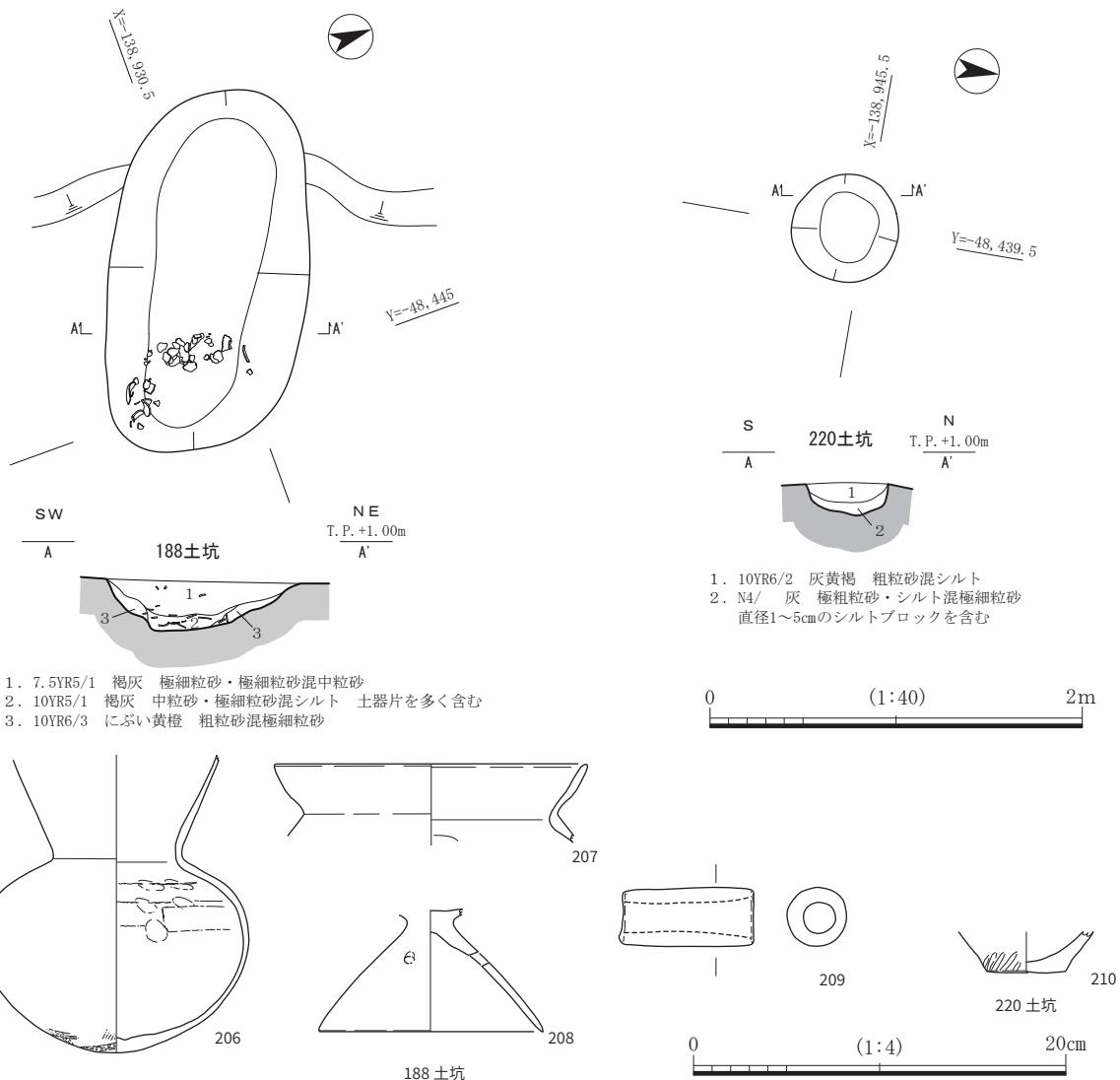


図 39 C 区土坑平面・断面 出土遺物 (2)

208)が出土した。206は直口壺である。口縁端部を欠く。体部はやや肩の張る扁平な球形で、外上方にまっすぐ延びる頸部をもつ。摩耗が顕著で調整は不明瞭であったが、底部外面にはハケ目がわずかに観察できた。また、体部内面には指頭圧痕や粘土紐の痕跡が残るが、一部、板ナデ状の工具痕が確認できた。体部最大径 14.2cmを測る。207は甕口頸部である。口縁部は頸部から「く」字状に屈曲させてから内湾気味に立ち上げ、口縁端部は内傾させて面をつくる。口縁部は横方向のナデ調整、体部内面にはヘラケズリ調整を施す。208は高杯の脚部である。内湾気味に大きく開き、端部は尖らせる。脚部の上方に3か所の円孔を穿つ。209は管状土錘である。長さ 7.2cm、直径 3.2cm、孔径 1.7cmを測る。これらの遺物や遺構の切り合い関係から、188土坑は古墳時代前期に属すると考えられる。

220土坑(図 39) 調査区中央西寄り、X=-138,945.5、Y=-48,439.5付近で検出した。平面形は円形であるが、遺構の上半部は中世の4落込みに切られており、検出時の規模は直径 0.6m、深さ 0.2mを測る。検出した埋土は2層で、上層から弥生土器(210)が出土した。210は甕底部で外面に平行タタキ目が残る。弥生時代後期から庄内期に属すると考えられる。

94井戸(図 40、図版 15・28) 調査区の南東部、X=-138,957.5、Y=-48,422.5で検出した。遺構は竪穴建物 1 の床面整地土を除去して検出した。平面形は隅丸方形を呈する。規模は一辺 1.1m、深さ 0.6mを測る。井戸枠は舟材の転用と考えられる板材を2枚組み合わせて使用する。井戸枠の規模は東材が長

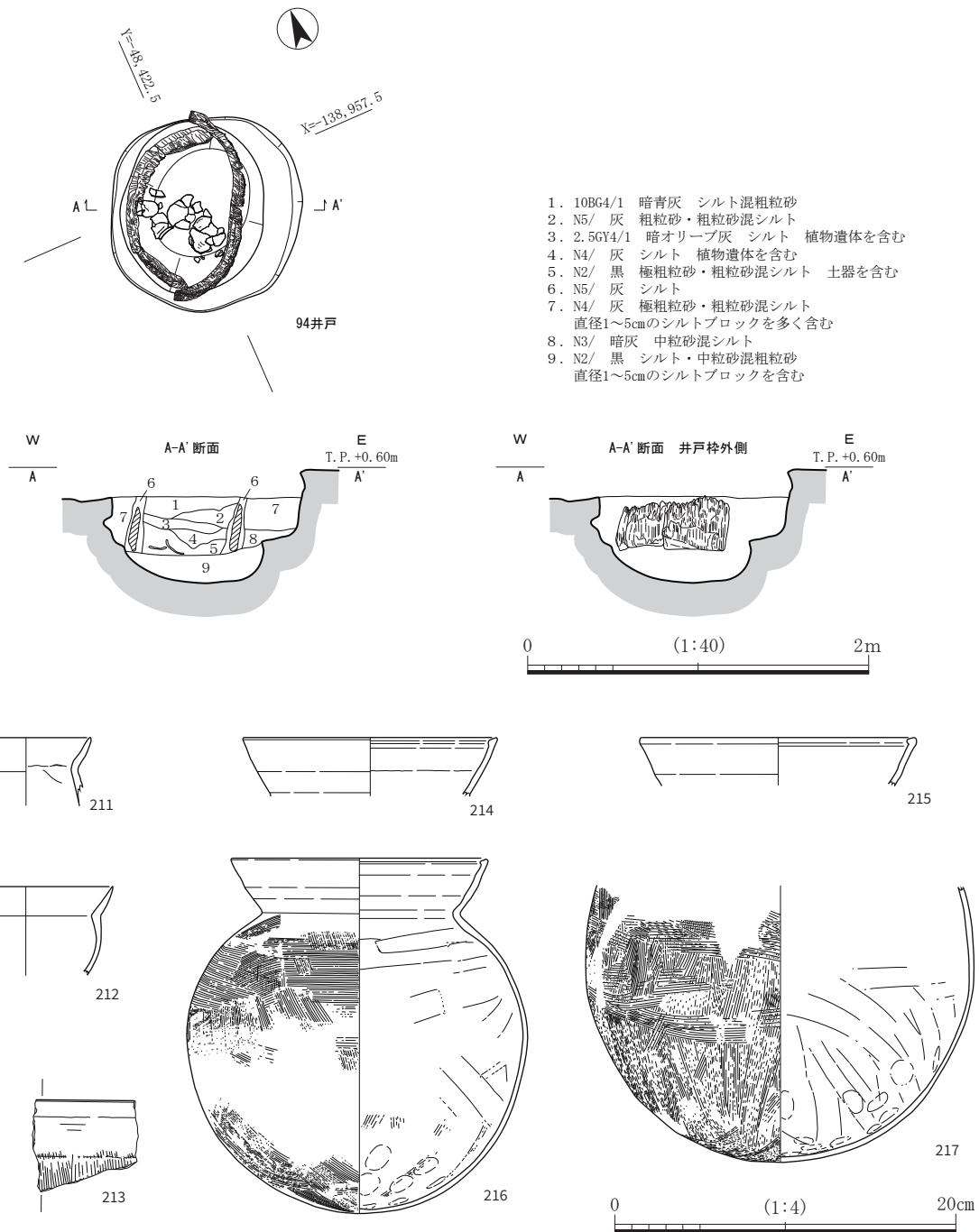


図 40 C 区 94 井戸平面・断面 出土遺物

さ 1.1m、幅 0.35m、高さ 0.3m、厚さ 0.06m、西材は長さ 0.9m、幅 0.35m、高さ 0.3m、厚さ 0.06 mを測る。井戸の掘方は、第3層のシルトから湧水層である第4層(砂層)まで掘り下げられていた。井戸の断面形状や堆積状況を観察した結果、井戸の東側が二段掘りになっていること、井戸枠が掘方の底面ではなく最下層の上に設置されていることから、井戸は掘り直されたものと考えられる。当初は素掘りの井戸であったか、井戸枠が使用されていたかは不明である。

新段階の井戸枠内から土師器(211～217)が出土した。211・212は小型丸底壺である。211は内湾氣味に立ち上がる口縁部をもつ。体部はあまり張らないタイプである。212は口縁部が大きく開き、口径が体部最大径より大きくなるタイプである。213は鉢である。口縁部は外上方に立ち上がり、端部は面

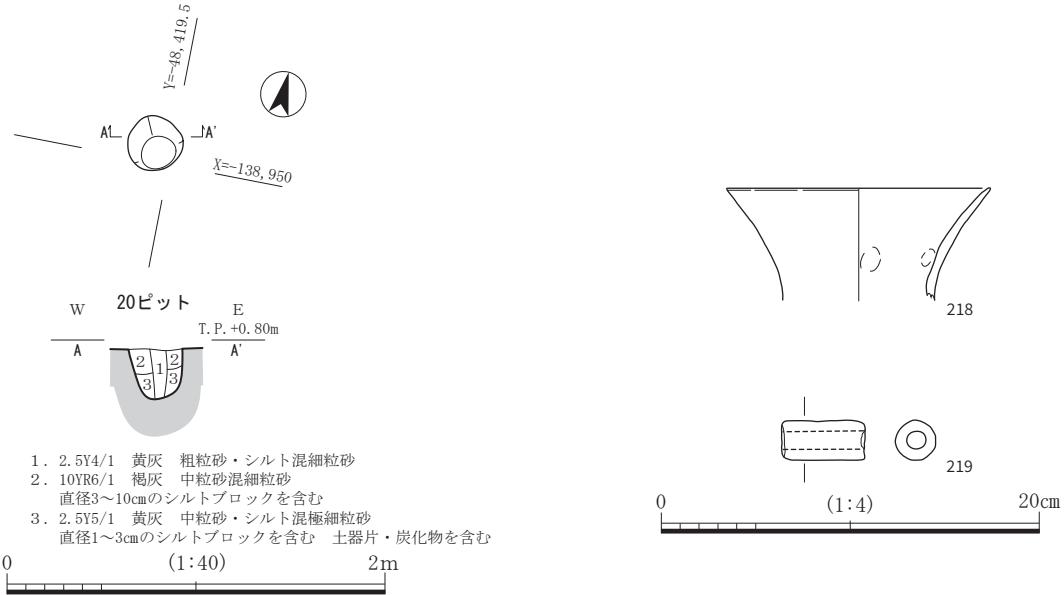


図 41 C 区 20 ピット平面・断面 出土遺物

をつくる。体部外面にはハケ調整を施す。214～217はいわゆる布留式甕である。214・215は口縁部でやや内湾しながら立ち上がり、端部は折り曲げて内傾する面をつくる。216はほぼ完形品である。球形の体部から内湾しながら外上方に延びる口縁部をもつ。体部外面は細かいハケ調整を施し、内面は下半部にハケ調整を、上半部はヘラケズリ調整を行う。また、底部には指頭圧痕が残る。外面全体に煤が付着する。口径 14.8cm、器高 20.8cm、体部最大径 20.0cmを測る。217は体部である。肩部から上を失う。体部は球形を呈し、外面は細かいハケ調整を、内面はヘラケズリ調整を施す。また、底部内面には指頭圧痕が残る。外面には煤が付着する。体部最大径は 22.8cmを測る。214・215のいずれかと接合するかは不明である。なお、図示できなかったが、高杯の細片も出土した。これらの遺物から 94井戸の時期は古墳時代前期と考えられる。

20ピット(図 41) 調査区の中央東寄り、X=-138,950、Y=-48,419.5で検出した。庄内期から古墳時代前期に属する 24土坑の上面で検出した。直径 0.3m、深さ 0.25mを測る。柱当たりの直径は 0.1mを測る。遺物は土師器壺(218) や土錘(219) が出土した。218は直口壺である。口縁部は外反しながら立ち上がる。摩耗が顕著で調整は不明であるが、内面に指頭圧痕が残る。219は管状土錘である。長さ 4.4cm、直径 2.1cm、孔径 0.9cmを測り、重さは 19.5gである。

96ピット(図 42) 調査区中央北辺部、X=-138,928.5、Y=-48,430で検出した。直径 0.2m、深さ 0.1mを測る。残りが悪く図示できなかったが、上層から土師器高杯杯部が出土した。

118ピット(図 42) 調査区の中央東寄り、X=-138,936.5、Y=-48,420.5で検出した。直径 0.4m、深さ 0.05mを測る。埋土は单層で、10YR5/1褐灰 粗粒砂混シルト層が堆積する。土師器の細片が出土した。

121ピット(図 42) 118ピットの南約 4m、X=-138,940.5、Y=-48,421.5で検出した。不整形な橢円形を呈し、長径 0.35m、短径 0.25m、深さ 0.05mを測る。埋土は单層で、10YR5/1褐灰 粗粒砂・中粒砂混シルト層が堆積する。土師器の細片が出土した。

124ピット(図 42) 121ピットの南東約 2 m、X=-138,942、Y=-48,420で検出した。隅丸方形を呈し、一辺 0.2m、深さ 0.15mを測る。埋土は单層で、直径 3～5cmのシルトブロックを多く含む 10YR4/1褐灰 粗粒砂・シルト混中粒砂層が堆積する。土師器の細片が出土した。

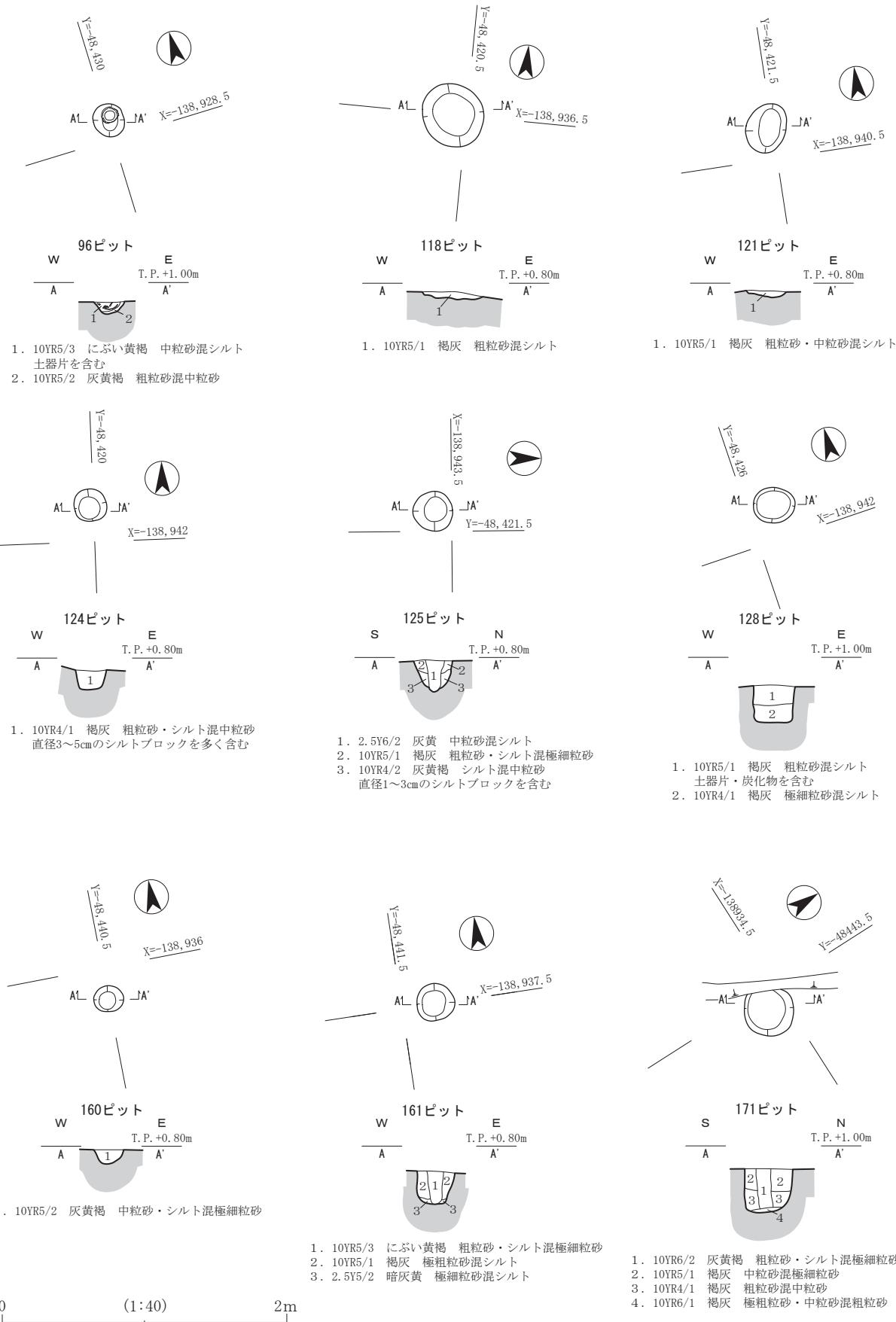


図42 C区ピット平面・断面



図 43 C 区溝平面

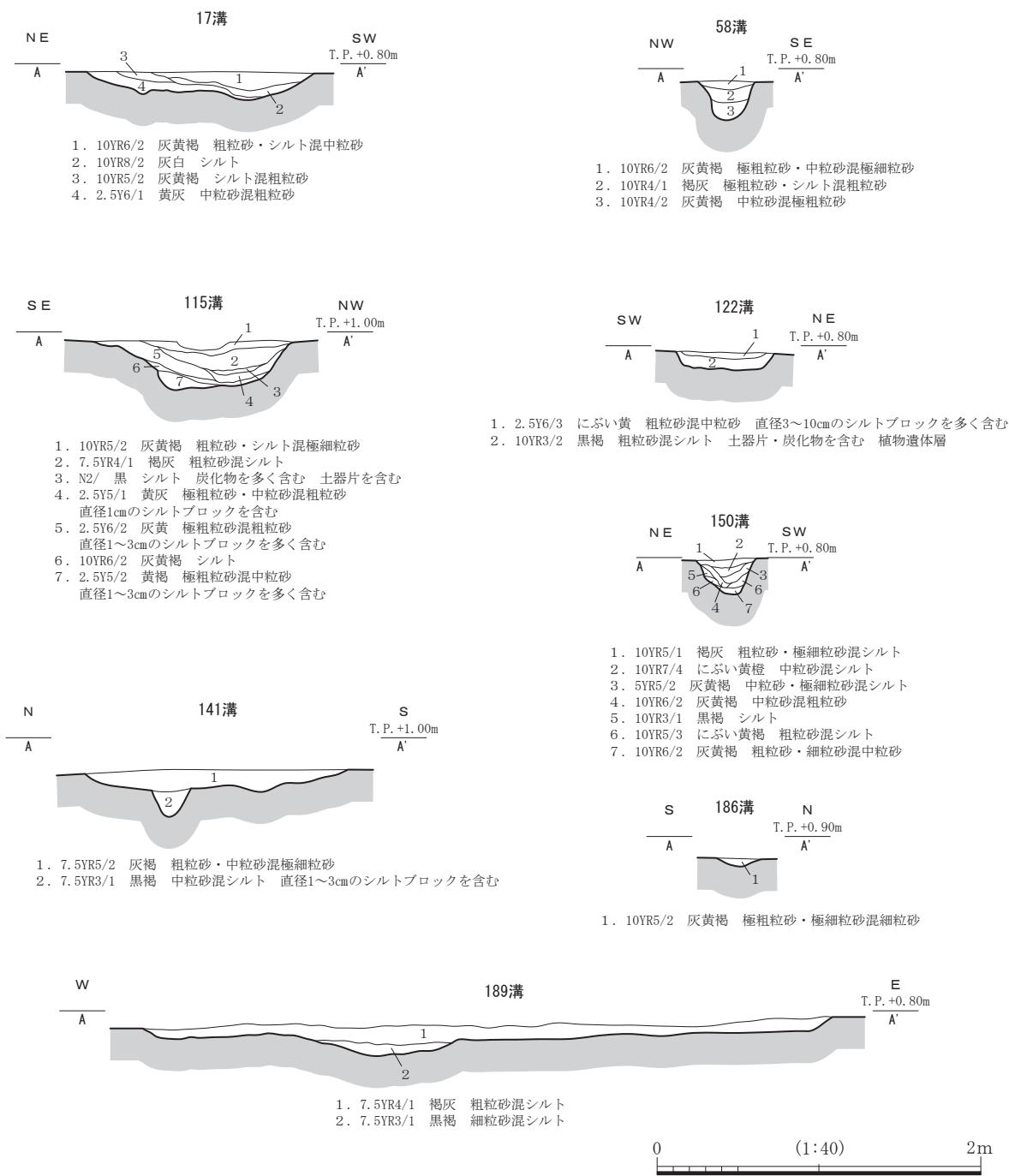


図 44 C 区溝断面

125ピット(図42) 121ピットの南約3.5m、X=-138,943.5、Y=-48,421.5で検出した。直径0.3m、深さ0.2mを測る。柱当たりの直径は0.1mである。土師器の細片が出土した。

128ピット(図42) 121ピットの西約4.5m、X=-138,942、Y=-48,426で検出した。直径0.3m、深さ0.25mを測る。断面形は矩形を呈する。埋土は2層で、上層から土師器の細片が出土した。

160ピット(図42) 調査区中央西寄り、X=-138,936、Y=-48,440.5で検出した。直径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は単層で、10YR5/2灰黄褐 中粒砂・シルト混極細粒砂層が堆積する。土師器の細片が出土した。

161ピット(図42) 160ピットの南西約2m、X=-138,937.5、Y=-48,441.5で検出した。直径0.3m、深

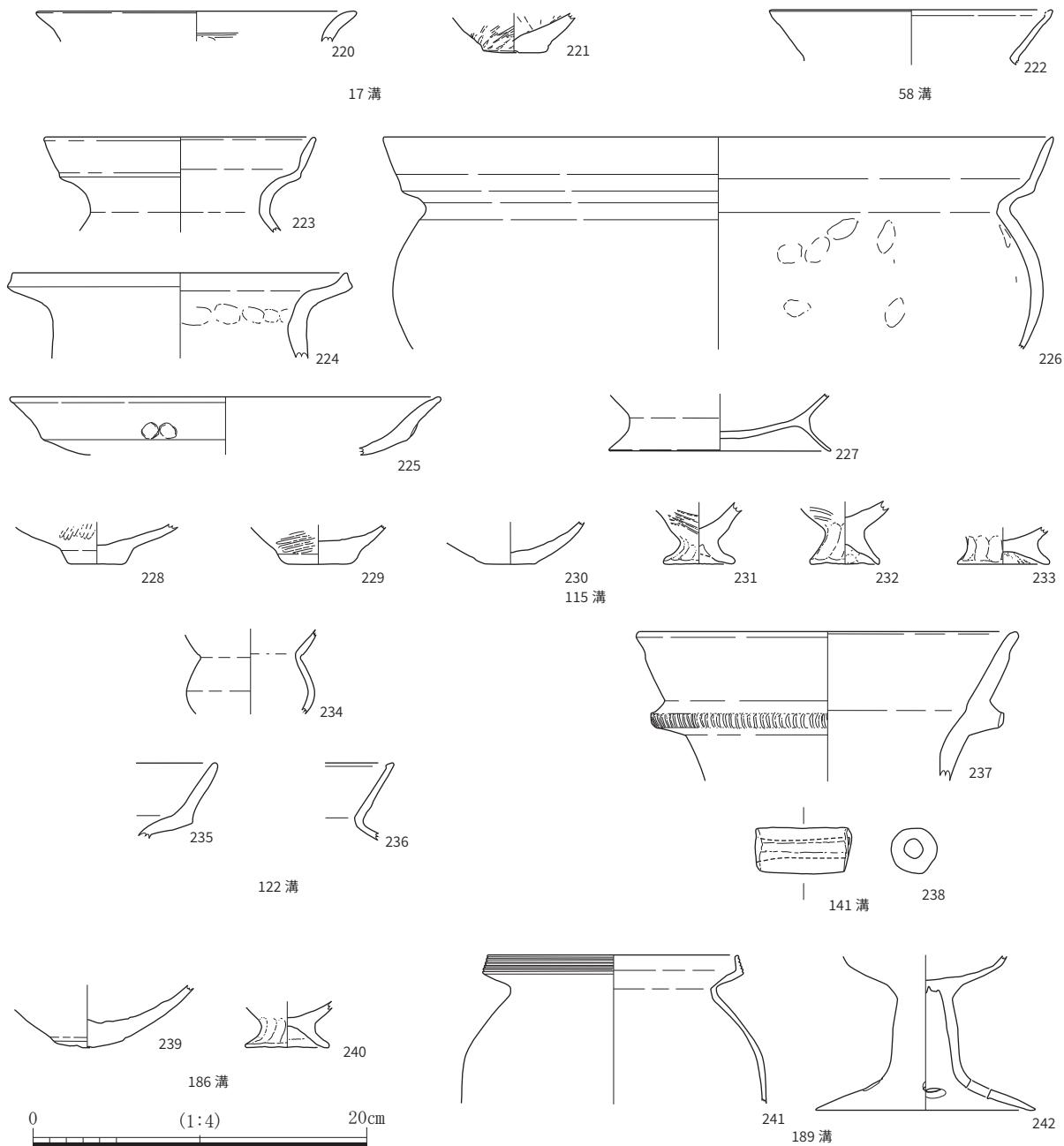


図 45 C 区溝出土遺物

さ 0.2mを測る。柱当たりの直径は 0.1mである。土師器の細片が出土したが、ピットの周辺には古墳時代中期と平安時代の掘立柱建物が検出されていることから、このピットの時期については不明である。

171ピット(図 42) 161ピットの北西約 3.5m、X=-138,934.5、Y=-48,443.5で検出した。直径 0.35m、深さ 0.3mを測る。柱当たりの直径は 0.1mである。土師器の細片が出土したが、161ピットと同様、ピットの周辺には古墳時代中期と平安時代の掘立柱建物が検出されていることから、このピットの時期についても確定できない。

17溝(図 43～45) 調査区中央やや東寄りで検出、24土坑の西に位置する。北西—南東方向に延び、両端部は後世の遺構によって失われる。規模は幅 1.4m、深さ 0.2mを測る。遺物は弥生土器(220・221)や、図示できなかったが土師器の細片が出土した。220は甕口縁部である。外反しながら開き、端部を丸く収める畿内第V 様式の特徴が残る口縁部である。221は甕底部である。丸みを帯びた底部で、外面に平

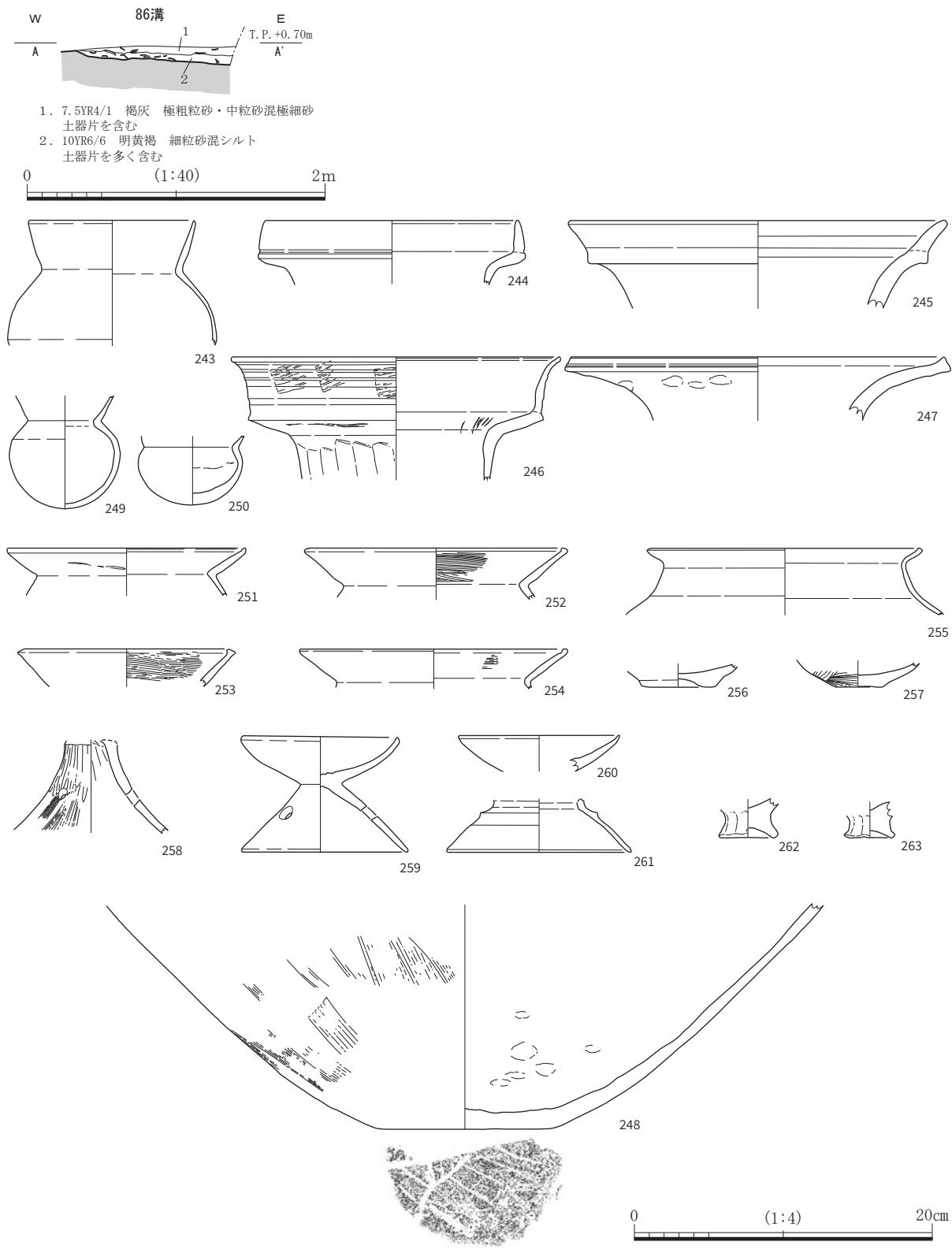


図 46 C 区 86 溝断面 出土遺物

行タタキ目が残る。

58溝(図 43～45) 調査区の南東部、X=-138,961、Y=-48,421付近を北東—南西方向に延びる。北東端部を3溝に切られる。規模は残存長 2.5m、幅 0.3m、深さ 0.2mを測る。断面は「U」字状を呈する。遺物は土師器甕(222) や高杯片などが出土した。222は布留式甕の口縁部である。まっすぐ外上方へ立

ち上がり、端部は折り込んで内傾する面をつくる。外面には煤が付着する。

86溝(図 43・46、図版 16・28) 調査区の南辺部で検出した、北西—南東方向に延びる溝であるが、南西辺部を5溝によって失っていることと、溝の平面形や遺物の出土状況などから考えて、調査区外へ広がる包含層の可能性もある。規模は長さ 10m以上、幅 0.5~ 2.0m以上、深さ 0.1mを測る。埋土は2層に分かれる。埋土から土師器(243~ 263)が多く出土した。243~ 248は壺である。243は直口壺である。なで肩の体部をもち、頸部は上外方へ延びる。摩耗が顕著で、調整は不明である。244~ 246は二重口縁をもつ。244は頸部が上方に延びた後、口縁部は屈曲して外に広がり、端部は内傾気味に立ち上がる。245は外反する頸部にさらに大きく開く口縁部をもつ。口縁端部は丸く収める。246は頸部が立ち上がったのち、口縁部は屈曲して広がり、上縁部は外上方に立ち上げて、端部を外反させる。上縁部外面には擬凹線が巡る。頸部外面には板状工具によるナデ調整を施す。口径は 22.0cmを測る。胎土に結晶片岩が含まれており、阿波産の搬入品と考えられる。247は広口壺である。大きく開く口縁部から端部を軽くつまみ上げて面をつくる。阿波産の搬入品と考えられる。248は大形の壺である。底部外面に木の葉圧痕が残る。摩耗が顕著で調整は不明瞭であったが、わずかに外面にハケ調整、内面には指頭圧痕が残る。249・250は小型丸底壺である。249は体部上半部に最大径をもつ。頸部は外上方に開く。口縁端部は欠損する。250はやや扁平な体部をもち、口縁部は体部径より大きくなると考えられるが、口縁端部は欠損する。251~ 255は甕である。251~ 254はいずれも「く」字状に屈曲する頸部から口縁部が直線的に延び、端部をつまみ上げる。251はいわゆる庄内式甕で、生駒山西麓産の胎土をもつ。255は内傾する頸部から大きく折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端部はつまみ上げて面をつくる。阿波産の搬入品である。256は甕、257は壺の底部である。257は外面にハケ調整を施す。258は高杯脚部である。杯部と脚端部を欠損する。外面にはヘラミガキ調整を施す。259・260は小型器台である。259は杯部を内湾させながら浅く立ち上げて、端部はつまみ上げる。脚部はまっすぐ開いて、端部は丸く収める。脚部に3か所の円孔を穿つ。口径 10.4cm、底径 11.0cm、器高 7.8cmを測る。261は山陰系の鼓形器台である。底径は 12.3cmを測る。器面の摩耗が顕著で調整は不明である。胎土からみて搬入品ではなく、在地でつくられたものと考えられる。262・263は脚台III式の製塙土器である。外面には指頭圧痕が残る。これらの遺物は庄内期から古墳時代前期の所産と考えられる。

115溝(図 43~ 45、図版 29) 調査区の北半、東寄りで検出した。北東—南西方向を指向する、不整形な溝である。溝の両端は後世の遺構によって切られる。規模は幅 1.2m、深さ 0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する。遺物は土師器(223~ 230) が出土した。223は二重口縁壺である。外反する頸部から外上方へ延びる口縁部をもつ。摩耗により調整は不明である。山陰もしくは瀬戸内系の搬入品と考えられる。224は広口壺である。頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して短く開き、端部はつまみ上げて面をつくる。頸部に指頭圧痕が残る。阿波産の土器と考えられる。225は二重口縁壺である。口縁部下間に円形浮文を付す。226は大形の二重口縁をもつ鉢である。外反する頸部をもち、上縁部は外上方にまっすぐ立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。外面には煤が、内面にはコゲの跡と炭化物が付着する。西部瀬戸内系の搬入品である。227は台付きの鉢もしくは甕底部である。丸底の底部に外反しながら「ハ」字状に開く脚部が取り付く。内外面とも摩耗が顕著で調整は不明である。脚部の底径は 13.2cmを測る。228は壺底部である。外面にヘラミガキを施す。229・230は甕の底部である。229は外面にタタキ目が残る。231~ 233は脚台III式の製塙土器脚部である。231・232は体部外面にタタキ目を施す。底径は 231が 4.2cm、232が 4.0cm、233は 5.3cmを測る。これらの遺物から溝の時期は、庄内

期から古墳時代前期と考えられる。

122溝(図 43～ 45) 調査区中央東寄り、X=-138,940、Y=-48,422付近を北西－南東方向に延びる。北西端部は3溝に切られる。規模は残存長 2.5m、幅 0.6m、深さ 0.1mを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土は2層で上層には直径 3～ 10cmのシルトブロックを多く含む粗粒砂混中粒砂層が、下層には土器片や炭化物を含む植物遺体層が堆積することから、溝は掘削されてから滯水状態にあったのち、人為的に埋め戻されたと考えられる。下層から土師器(234～ 236) が出土した。234は小型丸底壺である。口縁端部と底部を欠く。体部はなで肩を呈する。体部最大径は 7.7cmを測る。235は二重口縁壺の口縁部である。236は布留式甕の口縁部である。いずれも小片で口径が出せなかった。これらの遺物から溝の時期は古墳時代前期と考えられる。

141溝(図 43～ 45、図版 29) 調査区中央、X=-138,940、Y=-48,432付近を北西－南東方向に延びる。溝の両端を 104・ 107溝に切られる。さらに、溝を横断して鋤溝が延びる。溝の中央部は一段深くなつており、規模は長さ 3.5m、幅 1.6m、深さ 0.1～ 0.3mを測る。埋土は最深部にシルトブロックを含む中粒砂混シルト層が堆積し、上層には粗粒砂・ 中粒砂混極細粒砂が堆積する。そして、上層から土師器(237) や土錘(238) が出土した。237は二重口縁壺である。頸部が外上方に立ち上がり、下縁部が大きく開いて屈曲し、上縁部が取り付く。屈曲部は突帶状を呈し、刻み目文を巡らす。端部で口径は 22.6 cmを測る。生駒山西麓産の胎土をもつ。238は管状土錘である。長さ 5.7cm、直径 2.7cm、孔径 1.1cmを測る。重さは 41.2 g である。溝の時期は古墳時代前期に属する。

150溝(図 43・44) 調査区中央で、141溝の西側 X=-138,939、Y=-48,436付近を北西－南東方向に延びる。溝の東端は 107溝によって切られる。規模は残存長 1.5m、幅 0.4m、深さ 0.2mを測る。埋土の堆積状況から少なくとも三度の掘り直しが確認できた。遺物は土師器の細片が出土した。

186溝(図 43～ 45) 調査区の北西部に位置し、北西－南東方向を指向する。規模は幅 0.25～ 0.5m、深さ 0.05～ 0.1mを測る。埋土は単層で、土師器(239) や製塙土器(240) が出土した。239は甕底部であるが、丸底に近くなり、あまり突出しない。摩耗が著しく、調整は不明である。240は脚台III式の製塙土器である。底径は 4.8cmを測る。庄内期の所産である。

189溝(図 43～ 45、図版 16・ 29) 調査区の北西隅で検出した。北東－南西方向を指向し、溝の西半部および両端部は調査区外に延びる。幅 4 m以上、深さ 0.2mを測る。遺物は土師器(241・242)が出土した。241はいわゆる吉備系甕である。上半部に最大径をもつ体部に、頸部は大きく外反し、内傾しながら立ち上がる上縁部をもつ。口縁部に櫛描き沈線を巡らす。胎土に角閃石が含まれる。足守川流域の所産か。242は高杯である。杯部上半を欠損する。筒部から屈曲して、大きく開く脚部をもつ。脚部に円形の穿孔を 4 か所穿つ。甕(240) と高杯(241) はまとまって出土した。これらの遺物の時期は古墳時代前期に属する。

## 2. 古墳時代中期の遺構と遺物(図 35、図版 17～ 20・ 29・ 30)

本調査区の中で、最も多くの遺構を検出した。当該期の遺物量も多く、遺跡が盛況を迎えることがわかる。検出した遺構は竪穴建物・ 掘立柱建物・ 土坑・ ピット・ 溝である。掘立柱建物は総柱建物 2 棟と側柱建物 1 棟が、主軸を揃えて建てられていたことや、竪穴建物は調査区の南東部で検出されたことから、遺跡の範囲がさらに南へと広がる可能性を示唆する。

竪穴建物 1・ 61溝(図 47・ 48、図版 17・ 18・ 29) 調査区南東部、X=-138,958、Y=-48,424付近で検出した。遺構の北側および北東隅は後世の遺構によって失われる。平面形は長方形を呈し、建物の主軸はN

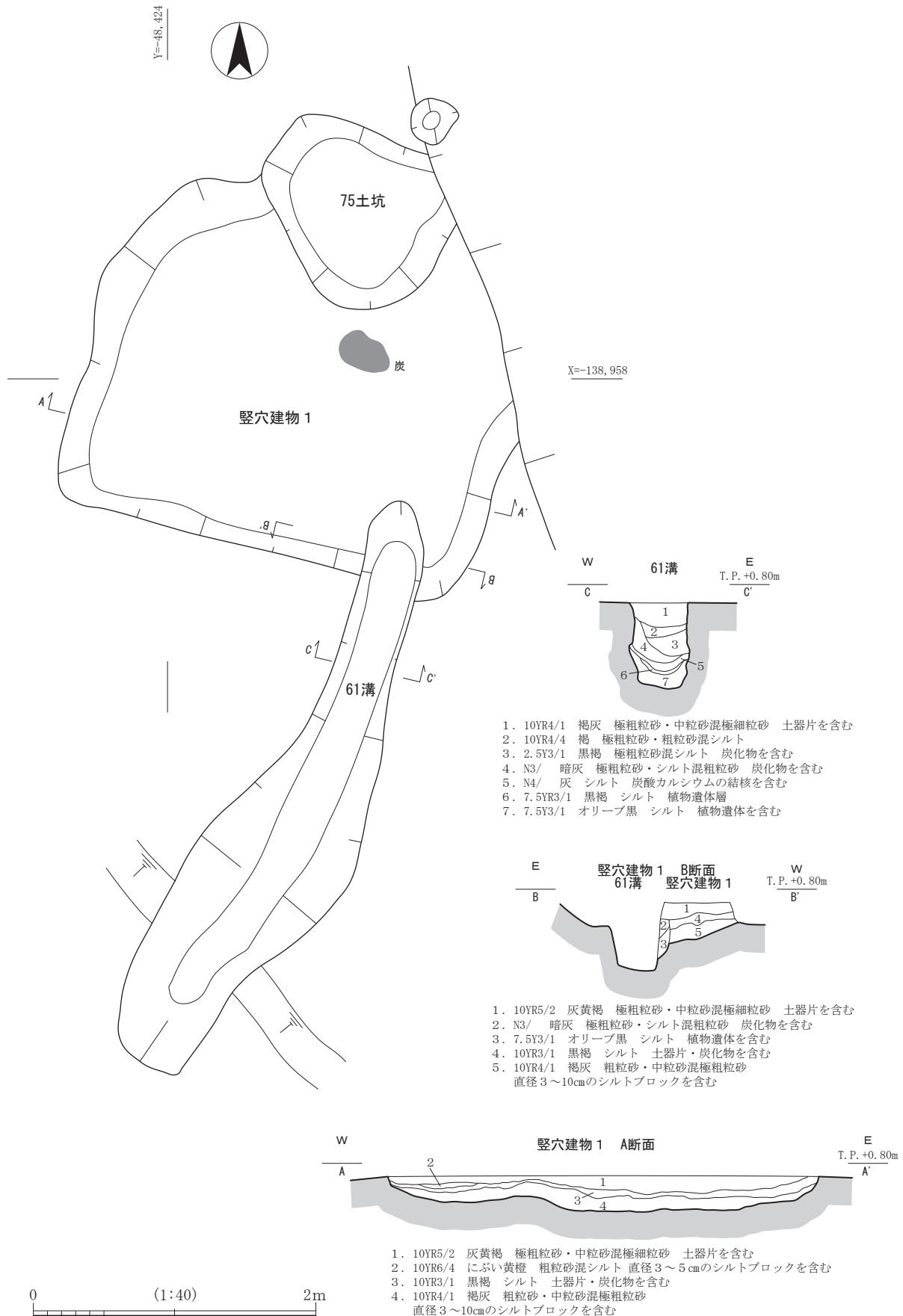


図 47 C 区豊穴建物 1・61 溝平面・断面

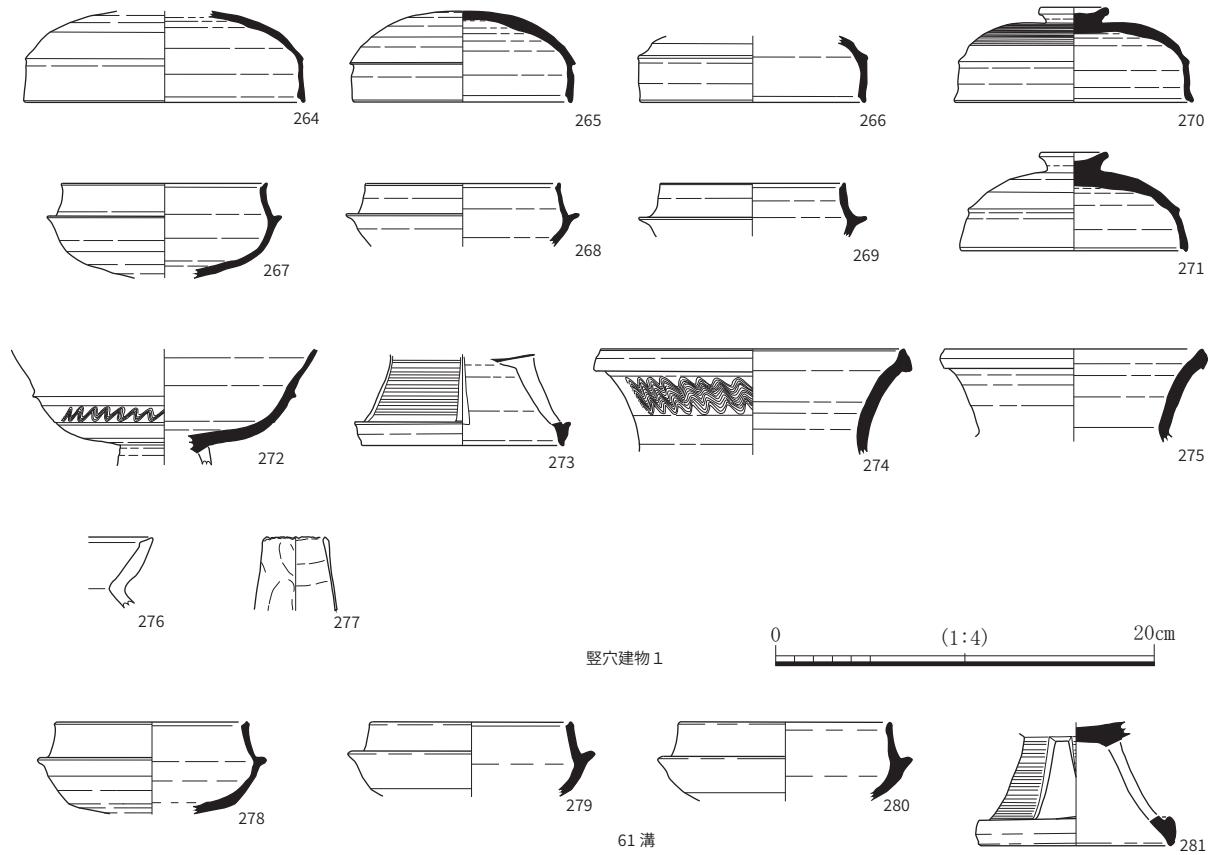


図 48 C 区竪穴建物 1・61 溝出土遺物

—14°—Eを指向する。この建物から壁溝や柱穴は検出されなかったが、建物の南東隅に61溝を伴っていた。また、床面中央で $0.3 \times 0.4\text{m}$ の範囲に炭の分布が認められた。建物の規模は長辺3.2m、短辺2.6m、床面までの深さは0.15mを測る。

土層断面を観察した結果、この竪穴建物は深さ0.25mまで掘り下げたのち、直径3～10cmのシルトブロックを含む10YR4/1褐灰粗粒砂・中粒砂混極粗粒砂層で整地し、床面を形成した。その上層には生活層と考えられる、土師器や須恵器の細片や炭化物を含む10R3/1黒褐シルト層が5cm程の厚さで堆積する。そして、建物廃絶後に10YR5/2灰黄褐極粗粒砂・中粒砂混極細粒砂が覆土として堆積して建物は完全に埋積することが確認できた。

61溝は建物の南東隅から南へ延びるが、溝南端部の上面は5溝に切られる。規模は長さ4.4m、幅0.4～1.0m、深さ0.6mを測る。断面形は矩形を呈する。土層観察の結果、溝は植物遺体層や炭酸カルシウムの結核を含むことから、滯水状態であったと考えられる。溝は他の溝などに取り付くことなく収束するが、竪穴建物の床面より深く掘削されていることから、排水溝として機能したと考えられる。

覆土内から須恵器(264～275)・土師器(276)・製塩土器(277)などが出土した。264～266は杯蓋である。264はやや丸みをもつ天井部と鈍い稜をもつ。復元口径14.7cmを測る。265は丸みを帯びた天井部をもつ。体部は内湾気味に延びる。266も内湾する体部と鈍い稜をもつ。267～269は杯身である。267は丸みを帯びた底部をもつ。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部はやや外反する。268は薄い器壁をもつ。270・271は高杯の蓋である。270は平らな天井部とまっすぐ下がる体部をもつ。稜は鈍く、体部は直線的に延びて口縁部を外反させる。また、天井部にはカキ目が巡る。271は丸い天井部と内湾しながら開く体部をもつ。いずれも中凹みのつまみをもつ。272は無蓋高杯である。脚部と口縁端部を欠く。

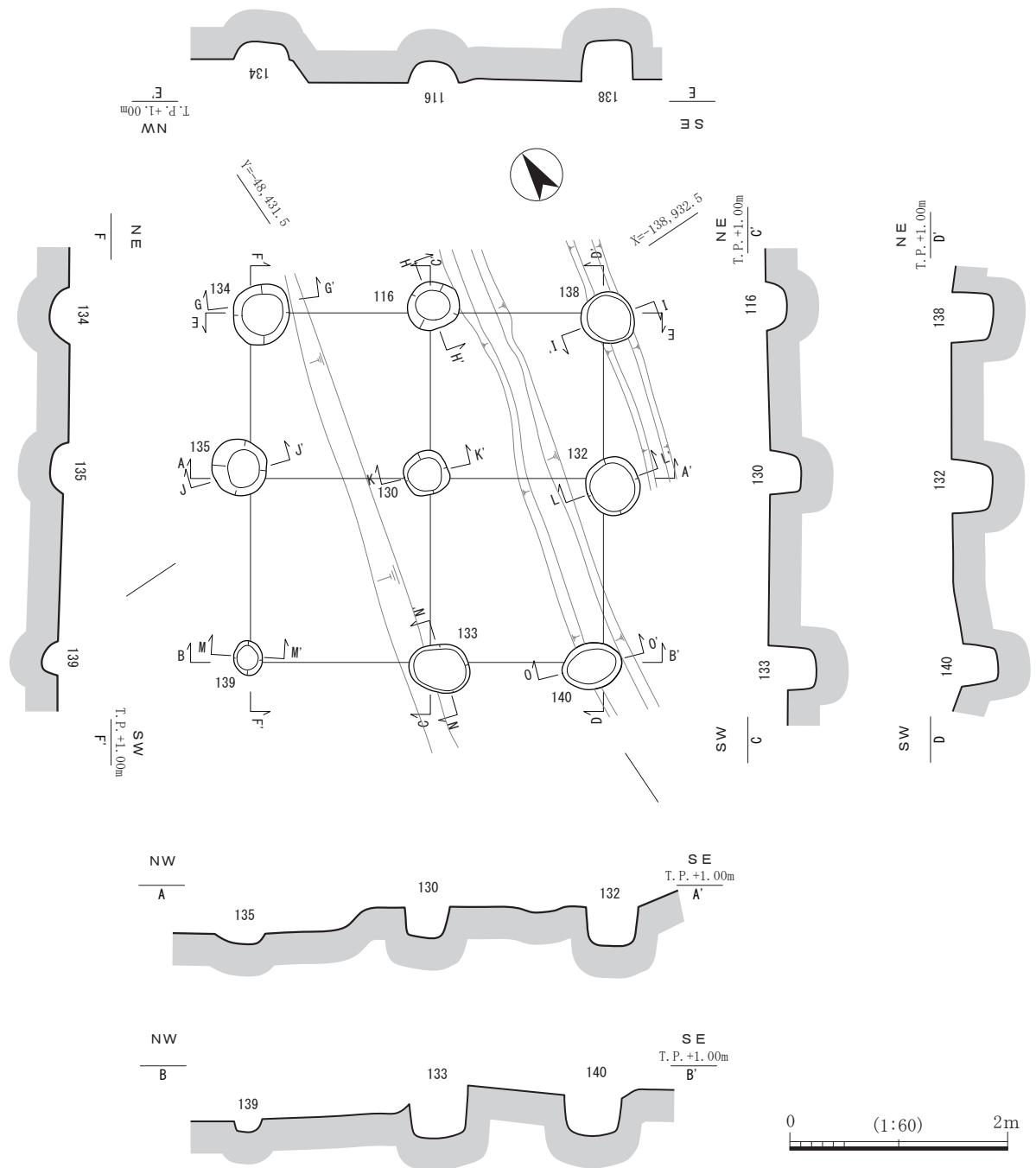


図49 C区掘立柱建物1平面・断面

外上方へ大きく開く体部をもつ。体部下半に凸帯と凹線で文様帶をつくり、波状文を巡らせる。273は高杯脚部である。外面にはカキ目を施す。残りが悪く形や幅は不明であるが、四方向に透かし孔をもつ。274・275は甕頸部である。274は頸部が外反しながら立ち上がり、口縁端部は上下に肥厚させる。頸部上半には波状文を巡らせる。これらの須恵器はTK 47型式に属する。276は土師器布留式甕の口縁部である。短く立ち上がり、内傾する端部をもつ。277は丸底I式の製塩土器である。口径は3.0cmを測る。

61溝からは須恵器(278～281)のほかに土師器甕の細片などが出土した。278～280は杯身である。278は溝の下層から出土した。丸みを帯びる底部をもつ。279・280は上層から出土した。281は高杯脚部で、溝の下層から出土した。三方向に長方形透かし孔をもち、カキ目が巡る。

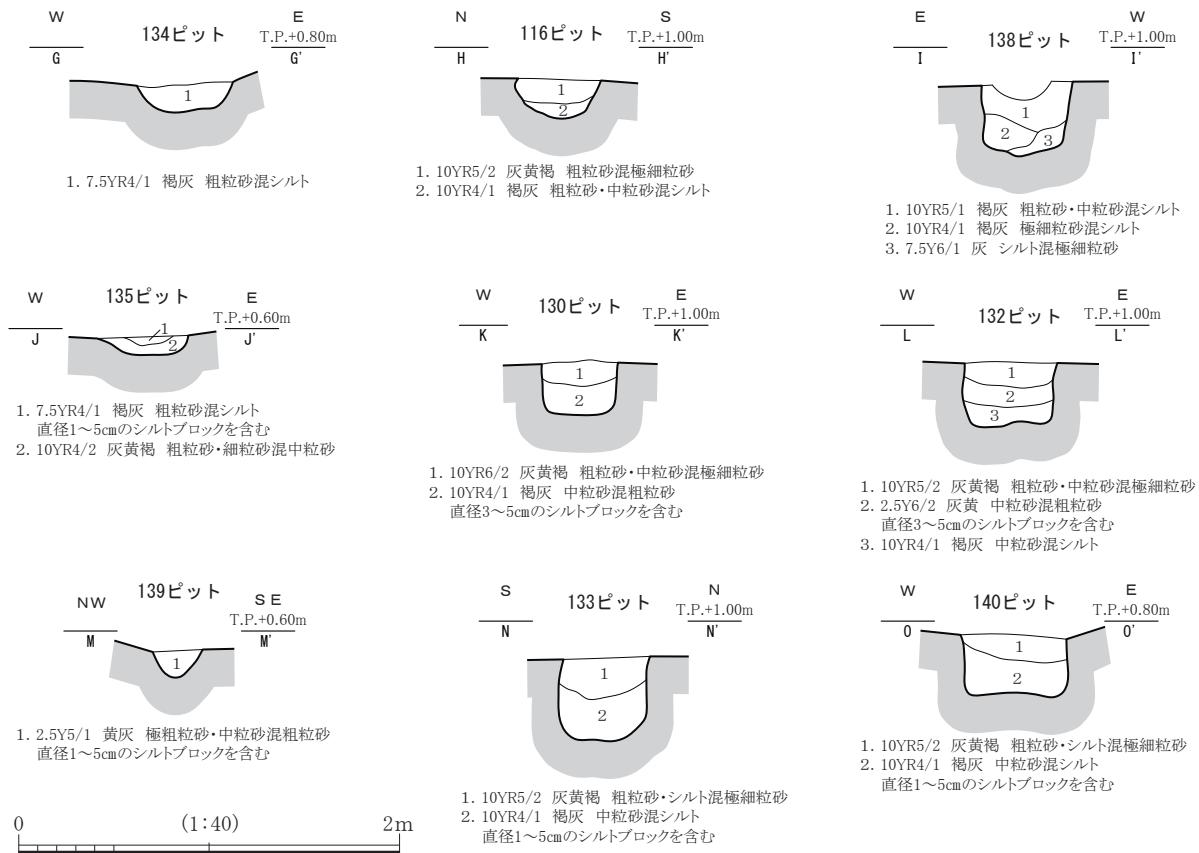


図 50 C 区掘立柱建物 1 柱穴断面

建物からは壁溝や柱穴は検出されなかったことから、上屋の構造は簡易なものであったと考えられ、これはA区で検出した竪穴建物2と同じ特徴を有している。出土遺物から、竪穴建物1と61溝の時期は古墳時代中期後半に比定される。

**掘立柱建物1(図49・50、図版19)** 調査区中央北寄り、X=-138,932.5、Y=-48,431.5に位置する。建物は2間(3.2m)×2間(3.2m)の総柱建物で、平面形は正方形を呈する。床面積は約10.2m<sup>2</sup>を測る。建物の主軸はN-34°-Eを指向する。建物の西辺部は107溝に切られており、溝の底で柱穴を検出した。柱穴は円形もしくは不整形な隅丸方形を呈し、107溝に切られた134・135・139ピットを除いて、概ね一辺0.4~0.5m、深さ0.3~0.5mを測る。いずれのピットからも柱当たりは検出されなかったため、柱の規模は不明である。

遺物は132・133・138・140ピット内から土師器の細片が出土した。

**掘立柱建物2(図51・52、図版19・20)** 掘立柱建物1の南西約3mに位置する。建物は2間(2.9~3.1m)×2間(3.6m)の南北方向に長軸をもつ総柱建物である。建物の主軸はN-29°-Eを指向する。建物の東辺は一度の建て替えが認められる。建て替え前の床面積は約10.8m<sup>2</sup>、建て替え後は約10.4m<sup>2</sup>を測る。建物の西辺は182溝に切られており、215・223・225ピットは溝の底で検出した。柱穴は不整形な円形で、概ね直径0.3~0.5m、深さ0.2~0.4mを測る。156・158・215・223・227ピットでは柱当たりが確認でき、柱の直径は0.1mであった。

遺物は147ピットから土師器の細片が、215ピットから土師器高杯の脚部片が、227ピットから須恵器の杯蓋片がそれぞれ出土した。

**掘立柱建物3(図53・54、図版19・20)** 調査区の中央西辺部に位置し、掘立柱建物2の南西に近接す

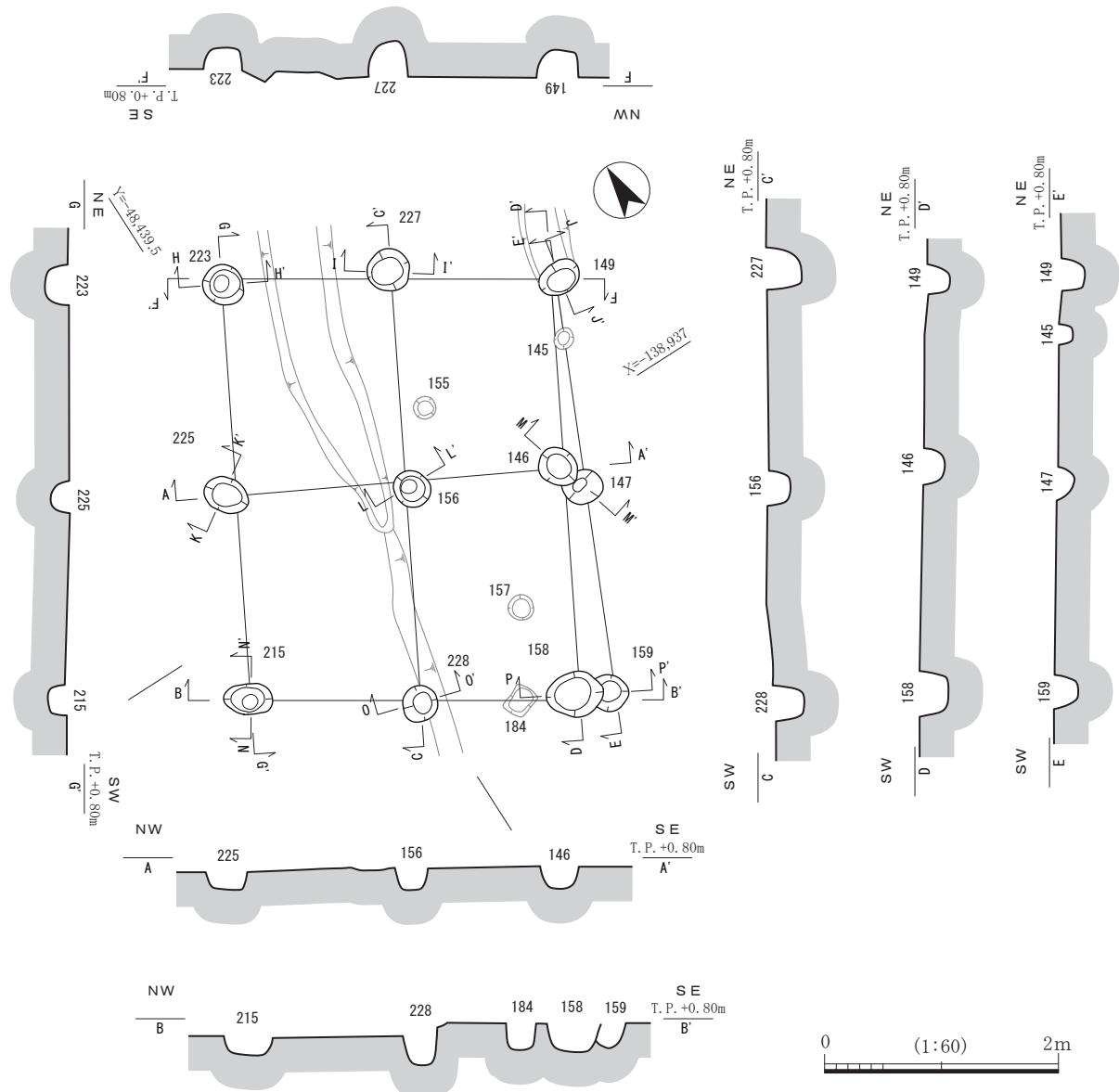


図 51 C 区掘立柱建物 2 平面・断面

る。建物は 2 間(3.3m) × 3 間(4.1m) の東西方向に長軸をもつ側柱建物である。建物の主軸は掘立柱建物 2 と同じ N-29°-E を指向する。床面積は約 13.5m<sup>2</sup>を測る。柱穴は不整形な円形もしくは隅丸長方形を呈し、一辺 0.4~0.5m、深さ 0.25~0.5mを測る。175・179・196 ピットでは柱当たりが確認でき、その直径は 0.1m であった。

遺物は 200 ピットから須恵器杯蓋(282) や土錐(283) のほか、土師器細片や須恵器の甕体部片などが出土した。さらに、179・203・231 ピットからは土師器の細片が、232 ピットからは土師器の細片のほかに須恵器杯片が出土した。282は高杯蓋の中凹みのつまみである。283は管状土錐である。一部欠損するが、長さ 5.0cm、直径 2.2cm、孔径 1.1cmを測る。

111 土坑(図 55、図版 29) 調査区中央北辺、X=-138,927.5、Y=-48,433付近で検出した。遺構の西側は攪乱によって失われる。不整形な円形の土坑に溝が取り付く。土坑内は段をもち、規模は直径 1.9m、深さ 0.1~0.2mを測る。埋土は 2 層で、下層の植物遺体層から須恵器の高杯(284・285) が出土した。284は口径 10.2cm、器高 8.3cmを測る。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は段をもつ。三方

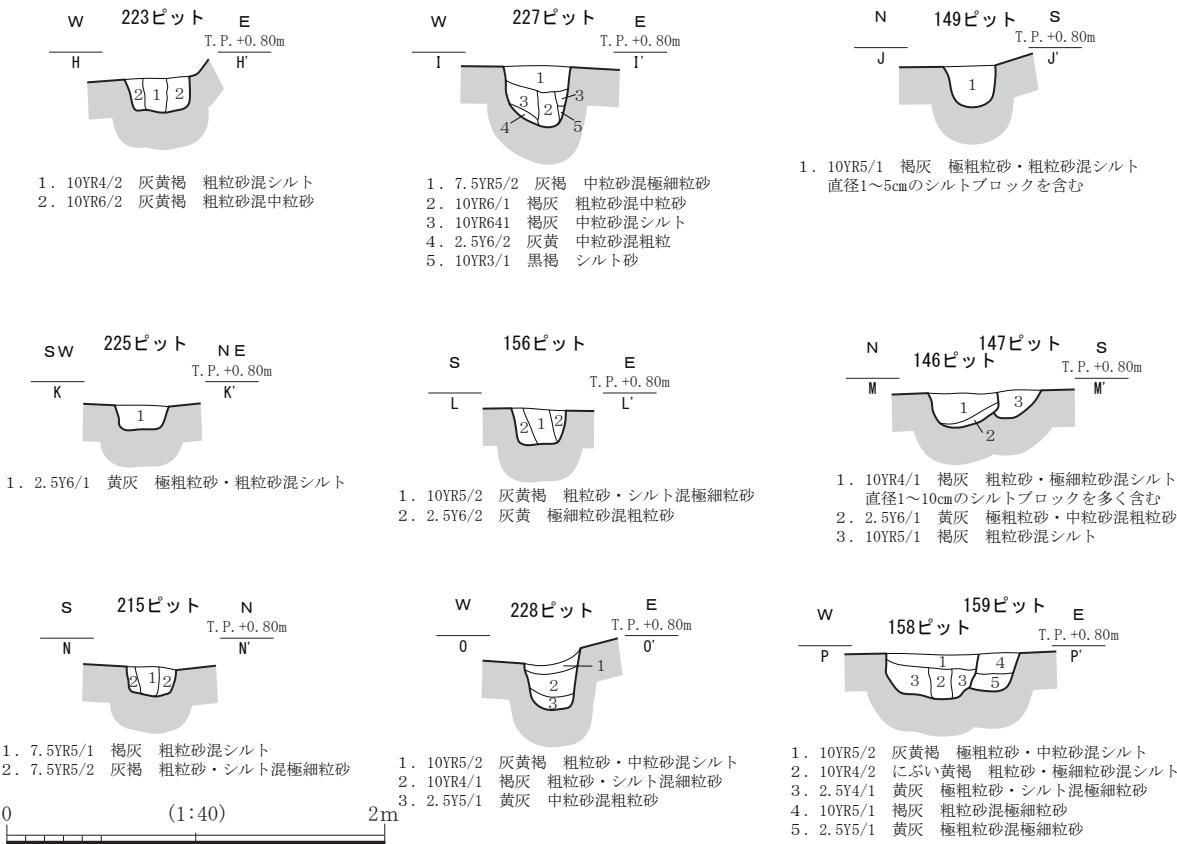


図 52 C 区掘立柱建物 2 柱穴断面

にやや幅広の長方形透かし孔を穿つ。285は口縁部を欠く。284と比べて脚部がやや長い。こちらも三方に長方形透かし孔をもつ。TK 47型式に属する。

205ピット(図 55) 調査区中央西寄り、X=-138,940.5、Y=-48,445付近で検出した。平面形は不整形な橢円形を呈する。規模は長径 0.5m、短径 0.4m、深さ 0.5mを測る。埋土は3層で、第2層はシルトブロックを多く含む。遺物は土師器把手(286)が出土した。286は甌もしくは甌の把手で、上面に長さ 2.2 cm、幅 0.5cm、深さ 0.3cmの細長いスリットが入る。

3溝(図 38・56) 調査区の東辺部を、弧を描きながら南北方向に延びる。溝の北端は調査区外に延びるが、南端部は X=-138,962、Y=-48,419付近で7溝に切られる。規模は幅 1.4~1.6m、深さ 0.3~0.4 mを測る。溝の片側は一段深くなっており、テラスをもつ。遺物は図示した須恵器(287・288)のほかに須恵器高杯や甌の細片、土師器甌体部片などが出土した。287は杯身である。丸みを帯びた底部と内傾して立ち上がる口縁部をもつ。288は壺である。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く收める。TK 23型式に属する。

101溝(図 38・56) 調査区の北半部東寄りに位置する。北北東-南南西を指向する。溝の南端部は中世の4落込みに切られるが、108土坑や 102・103・115・126溝より後出する。規模は幅 0.3m、深さ 0.05 mを測るが、溝の北端部は深くなっている。102溝と誤認して掘削した可能性がある。埋土は单層で須恵器(289)や土師器(290)が出土した。289は須恵器杯身である。内傾する体部をもつ。TK 23型式からTK 47型式の所産である。290は庄内式甌であるが、混入と考えられる。

102溝(図 38・56) 101溝の西側に位置し、北端部で 101溝に切られる。規模は長さ 9.5m、深さ 0.2mを測る。遺物は土師器や須恵器の細片が出土した。

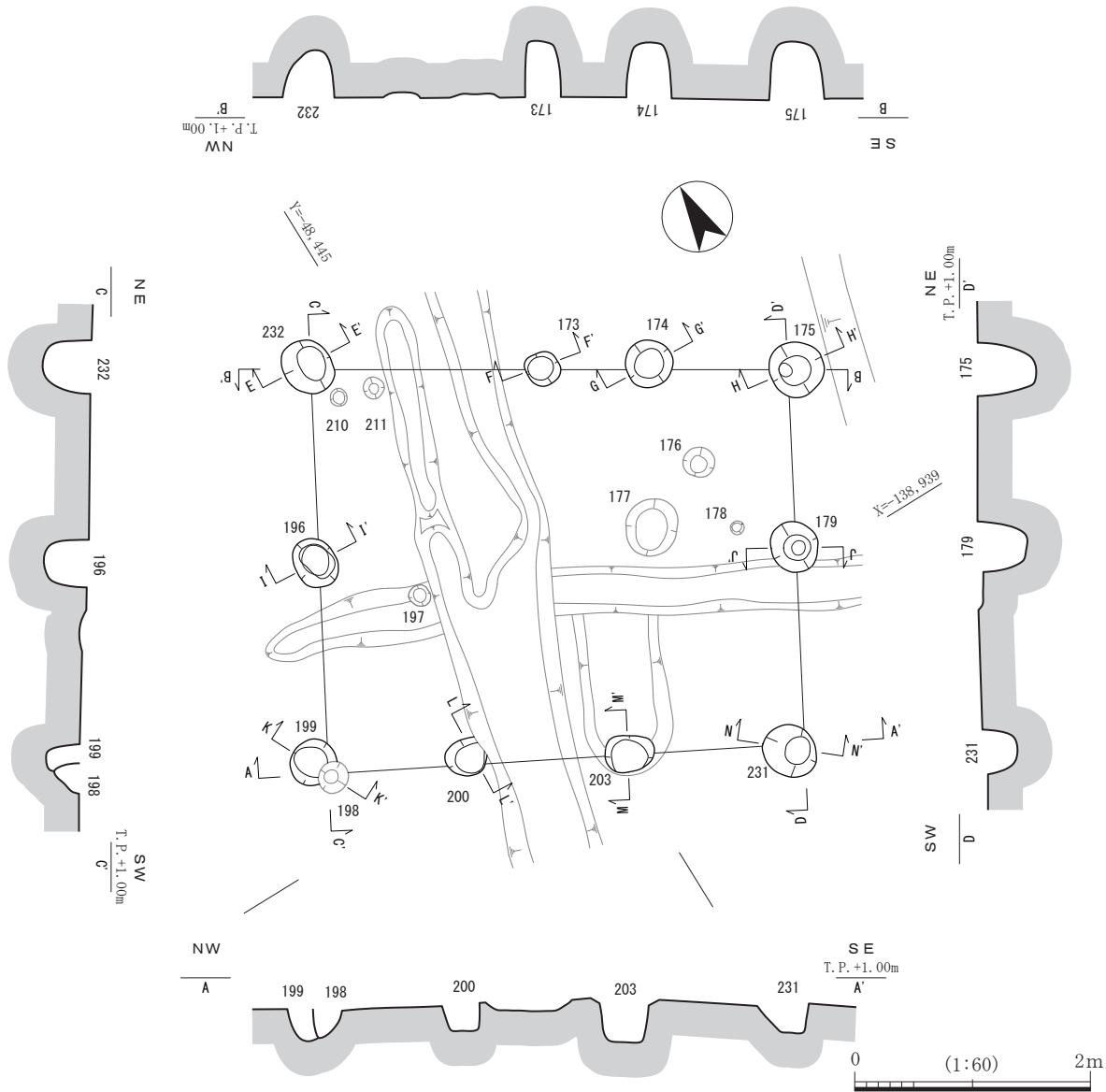


図 53 C 区掘立柱建物 3 平面・断面

103溝(図 38・56) 102溝の東に位置し、溝の東辺部を102溝に切られる。幅0.6m以上、深さ0.1mを測る。埋土は単層で、土師器の細片や須恵器杯身片などが出土した。

107溝(図 38・56、図版 29) 調査区の中央北半部に位置し、北北東—南南西に指向する。溝の北側は調査区外に延び、南端部は4落込みに切られるが、調査区外へ延びると考えられる。規模は幅2.6m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形状を呈する幅広の溝である。掘立柱建物1と先後関係にある。埋土は3層で第2層目はシルトブロックを多く含む極粗粒砂混粗粒砂層である。出土した遺物は、須恵器(291～294)、土師器(295)のほかに弥生土器(296～298)がある。291・292は杯蓋である。291は丸みを帯びた天井部をもつ。体部はまっすぐ延び、口縁端部は内傾して段をつくる。293は甕頸部である。外反しながら立ち上がり、口縁端部をつまみ上げて面をつくる。外面に波状文とカキ目が巡る。294は有蓋短頸壺である。295は高杯脚部である。三方向に円孔を穿つ。296～298は弥生土器の壺底部である。混入品と考えられる。

112溝(図 38・56、図版 30) 調査区中央を、北北東—南南西に指向する。溝の南半部は182溝を切る。一方、

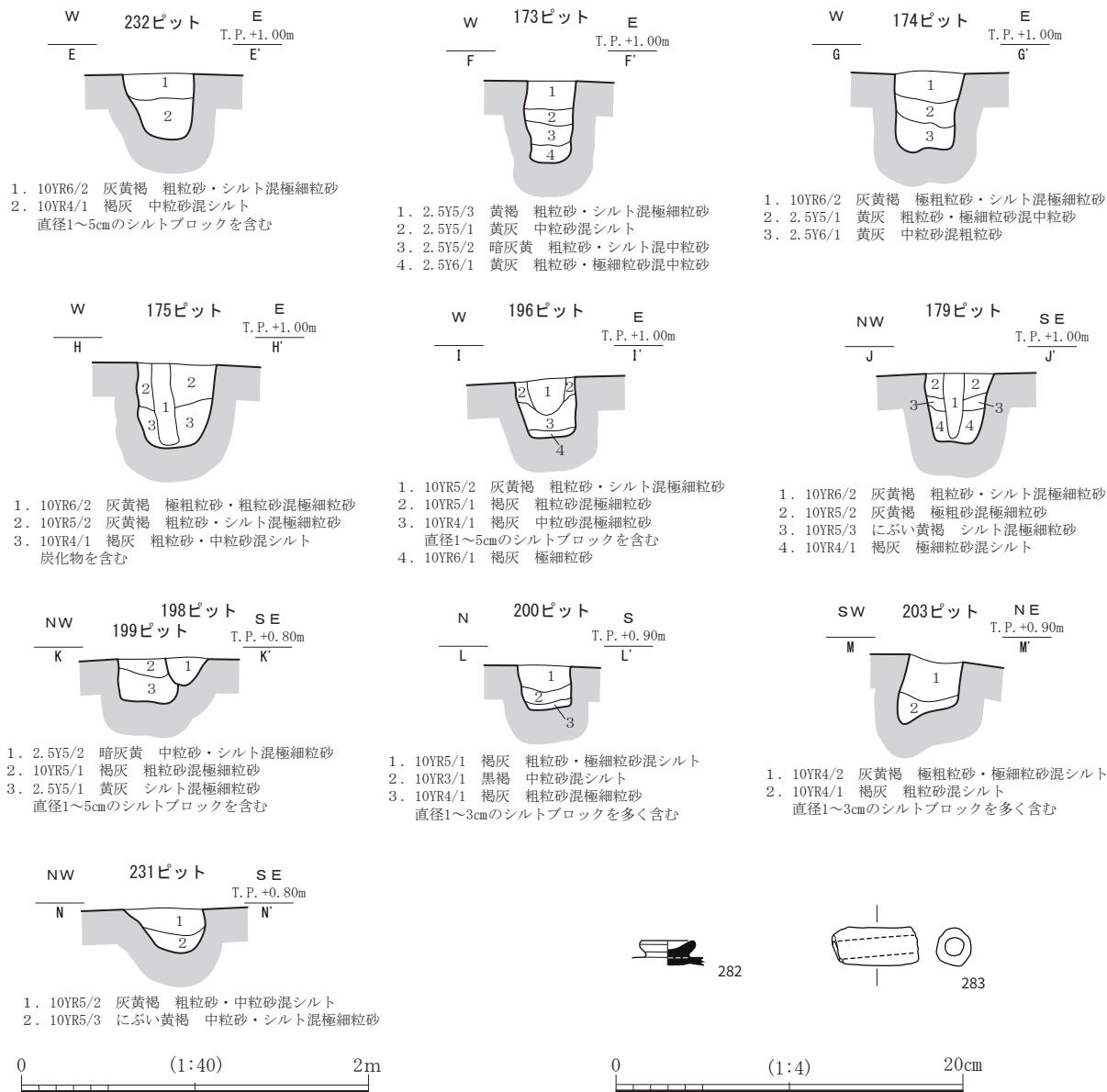


図 54 C 区掘立柱建物 3 柱穴断面 200 ピット出土遺物

溝の北側は調査区外に延びる。規模は幅 0.3m、深さ 0.1m を測る。埋土は単層で、須恵器(299~ 303)や土師器片が出土した。299・300は杯蓋である。299は丸みを帯びた天井部をもつ。体部はやや開きながら延び、口縁端部は内傾して面をもつ。300は平らな天井部をもつと考えられ、稜は鈍く、まっすぐ延びる体部をもつ。301・302は杯身である。いずれも平らな底部をもつ。301の口縁端部はやや肥厚して丸みを帯びる。303は高杯蓋である。丸みのある天井部をもつ。中凹みのつまみが付く。これらの須恵器はTK 23型式からTK 47型式の所産である。

126溝(図 38・56) 調査区北半部に位置し、北西一南東方向に延びる。溝は1・3・104溝に先行するが、115溝より後出する。幅 1.0m、深さ 0.2m を測る。断面形は緩やかな「V」字状を呈する。遺物は須恵器(304) や土師器(305) が出土した。304は高杯である。口径 10.2cm、器高 8.2cm を測る。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はやや肥厚させて面をつくる。脚部に三方に長方形透かし孔を穿つ。TK 23型式からTK 47型式の所産である。305は吉備系甕の口縁部である。115溝の混入品の可能性がある。

182溝(図 38・56) 107溝の西約 4 m に位置する。溝は調査区の北西端部から南東方向に約 4 m 延びた

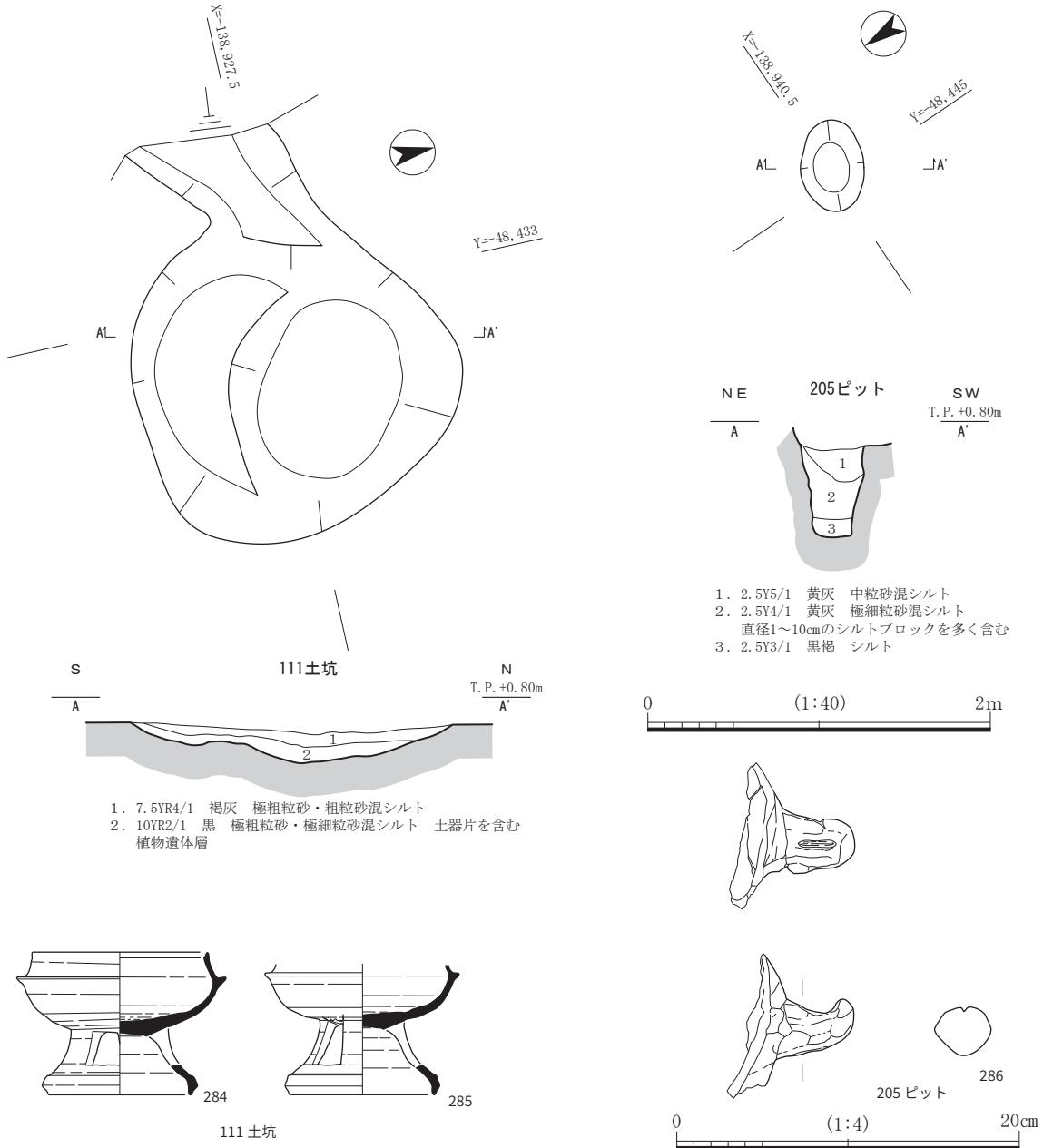


図 55 C 区 111 土坑・205 ピット平面・断面 出土遺物

のち、屈曲して南南西に指向し、南端部は4落込みに切られる。規模は幅 2.4m、深さ 0.2m の浅い皿状を呈する。須恵器(306～308)や土師器甕体部の細片などが出土した。306は杯蓋である。平らな天井部をもち、口縁端部は内傾する段を有する。307は杯身である。口縁端部は内傾する面をつくる。308は高杯脚部で、三方に長方形透かし孔を有する。TK 23型式から TK 47型式に属すると考えられる。

### 3. 平安時代の遺構と遺物(図 35、図版 21・22・30)

当該期の遺構は、掘立柱建物・井戸・ピット・溝などであるが、古墳時代中期の様相と比較して、遺構や遺物の数は少なくなり、集落が縮小している様子がみて取れた。

**掘立柱建物 4(図 57・58、図版 21・30)** 調査区中央西辺部、X=-138,936.5、Y=-48,442付近で検出した。建物は2間(3.9m)×4間(9.7m)以上の側柱建物で、建物の西側は調査区外に延びる。床面積は約 37.8m<sup>2</sup>以上を測る。建物の主軸はN-5°-Eを指向する。柱穴は円形で、直径 0.2～0.4m、深さ

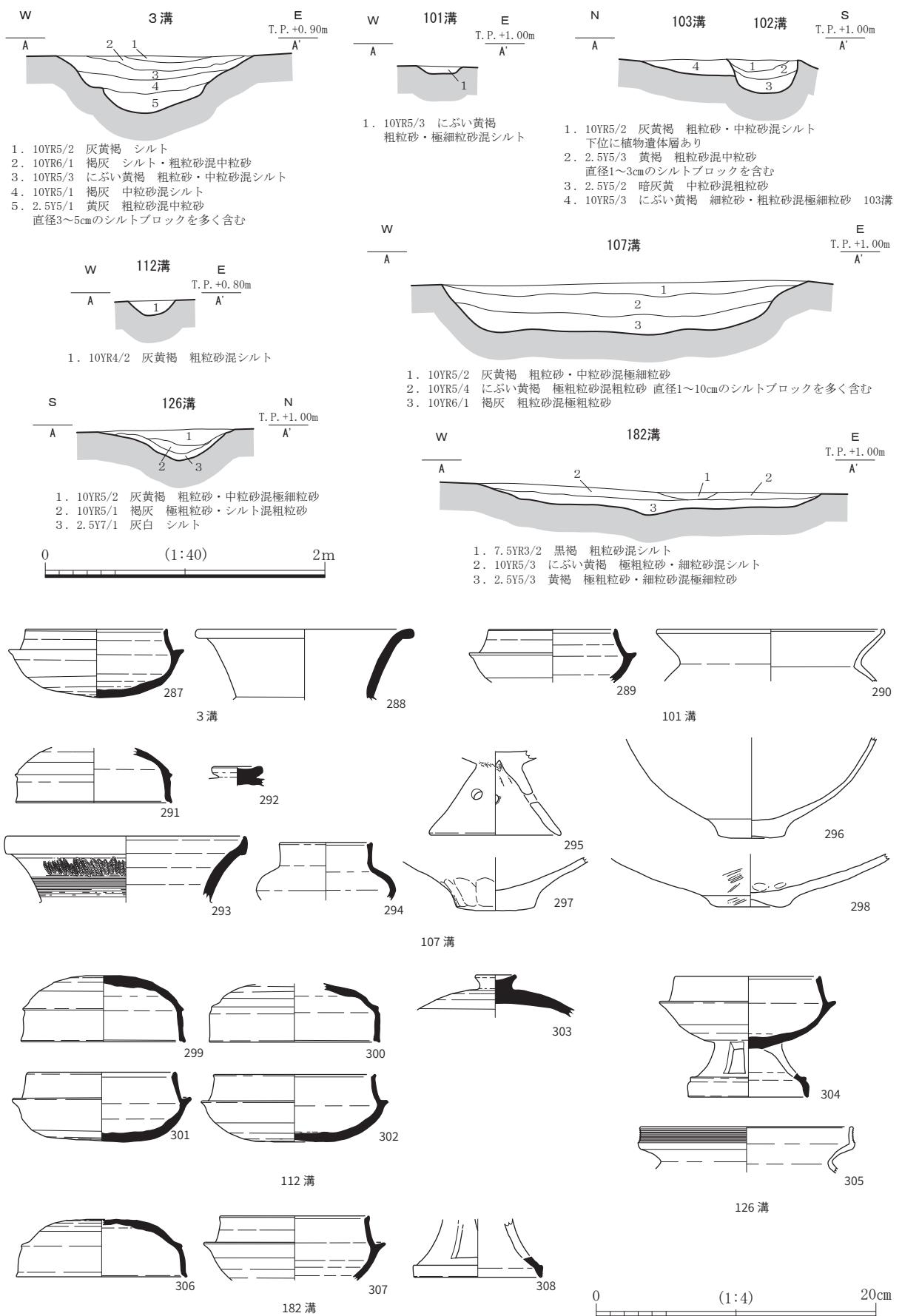


図 56 C 区溝断面 出土遺物 (3)

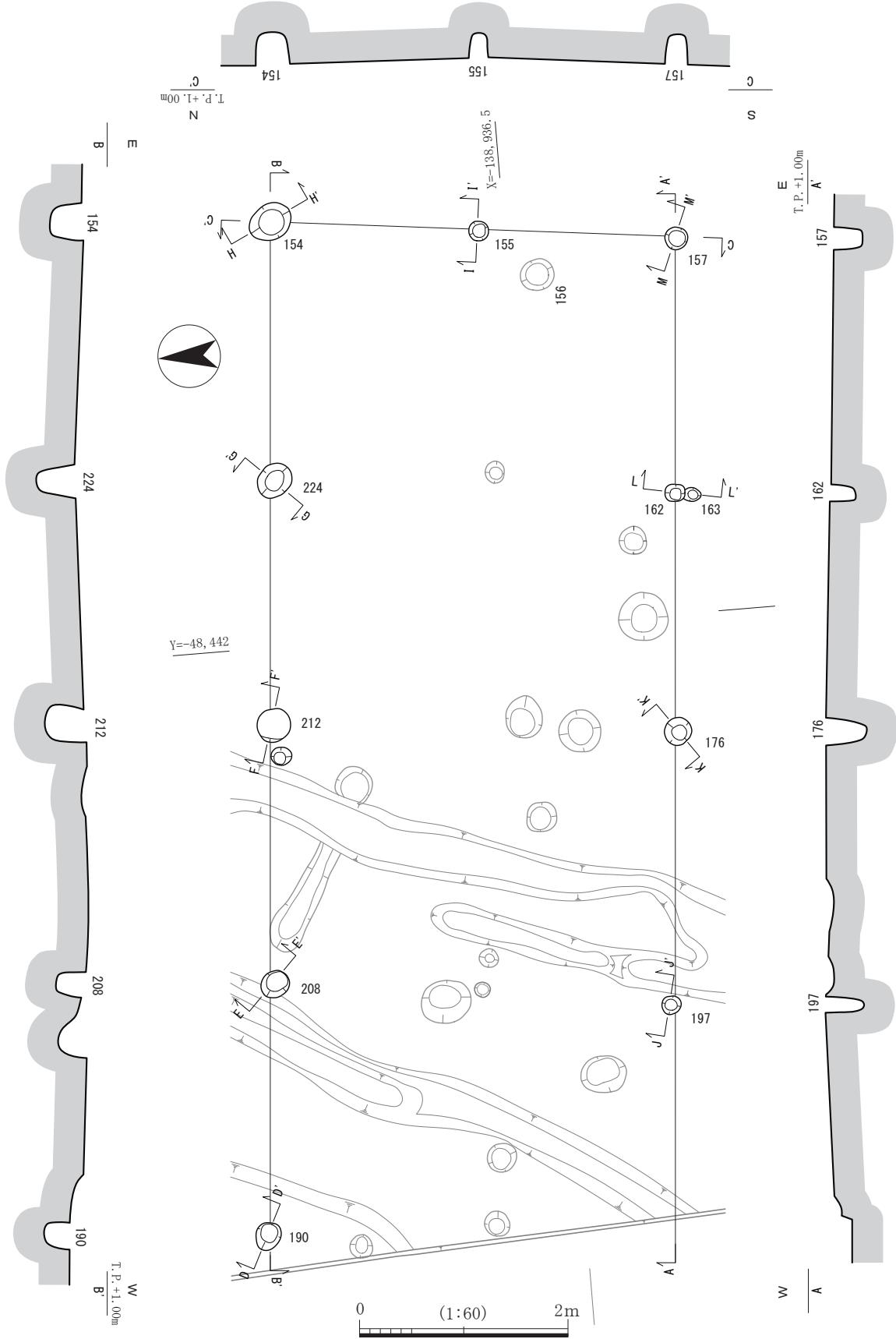


図 57 C 区掘立柱建物 4 平面・断面

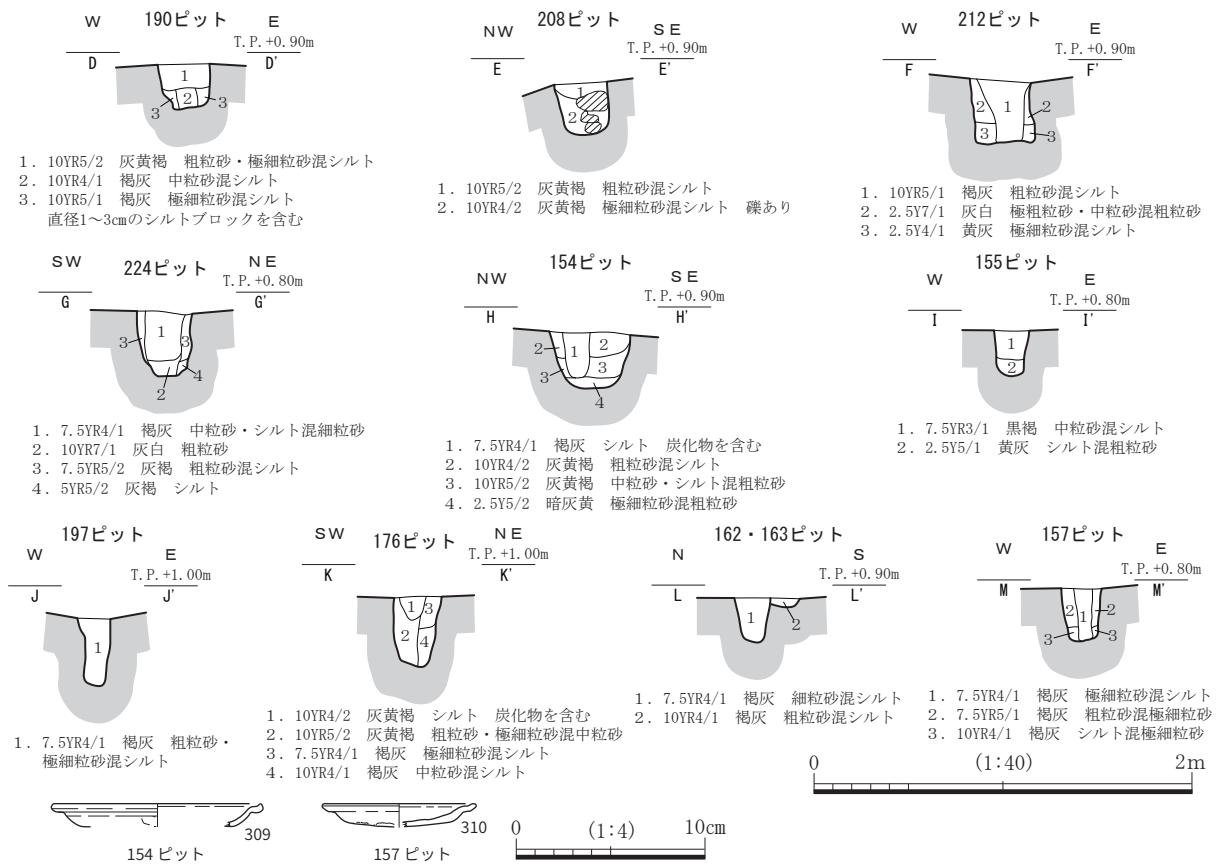


図 58 C 区掘立柱建物 4 柱穴断面 154・157 ピット出土遺物

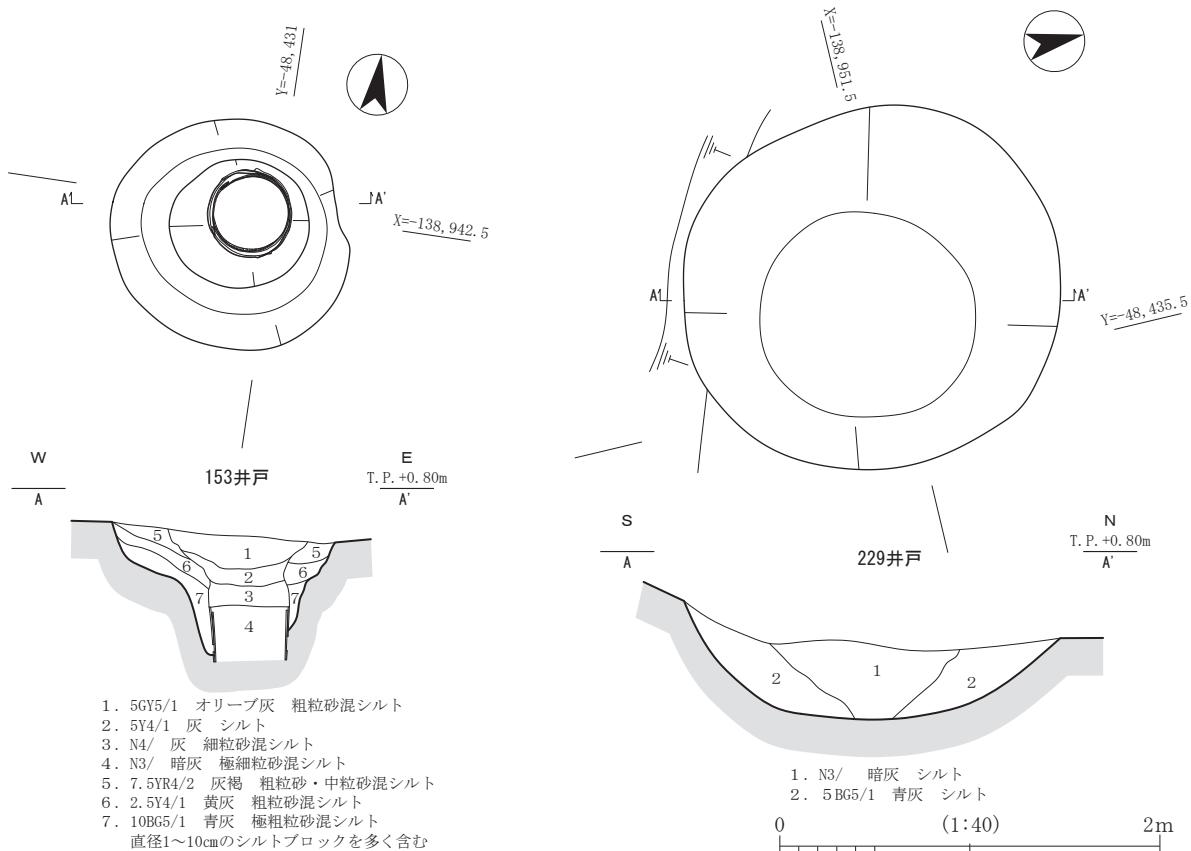


図 59 C 区井戸平面・断面

0.2～0.35mを測る。154・157・190ピットでは柱当たりが確認でき、柱の直径は0.1mであった。また、176・190・208・212・224ピットでは柱抜き取りの痕跡が確認できた。中でも208ピットは柱を抜き取ったあと、大人の拳大の焼けた礫が3個埋納されていた。154・157・208・224ピットから土師器皿(309・310)や黒色土器片、布目をもつ平瓦片などが出土した。309・310はいわゆる「て」字状口縁皿である。

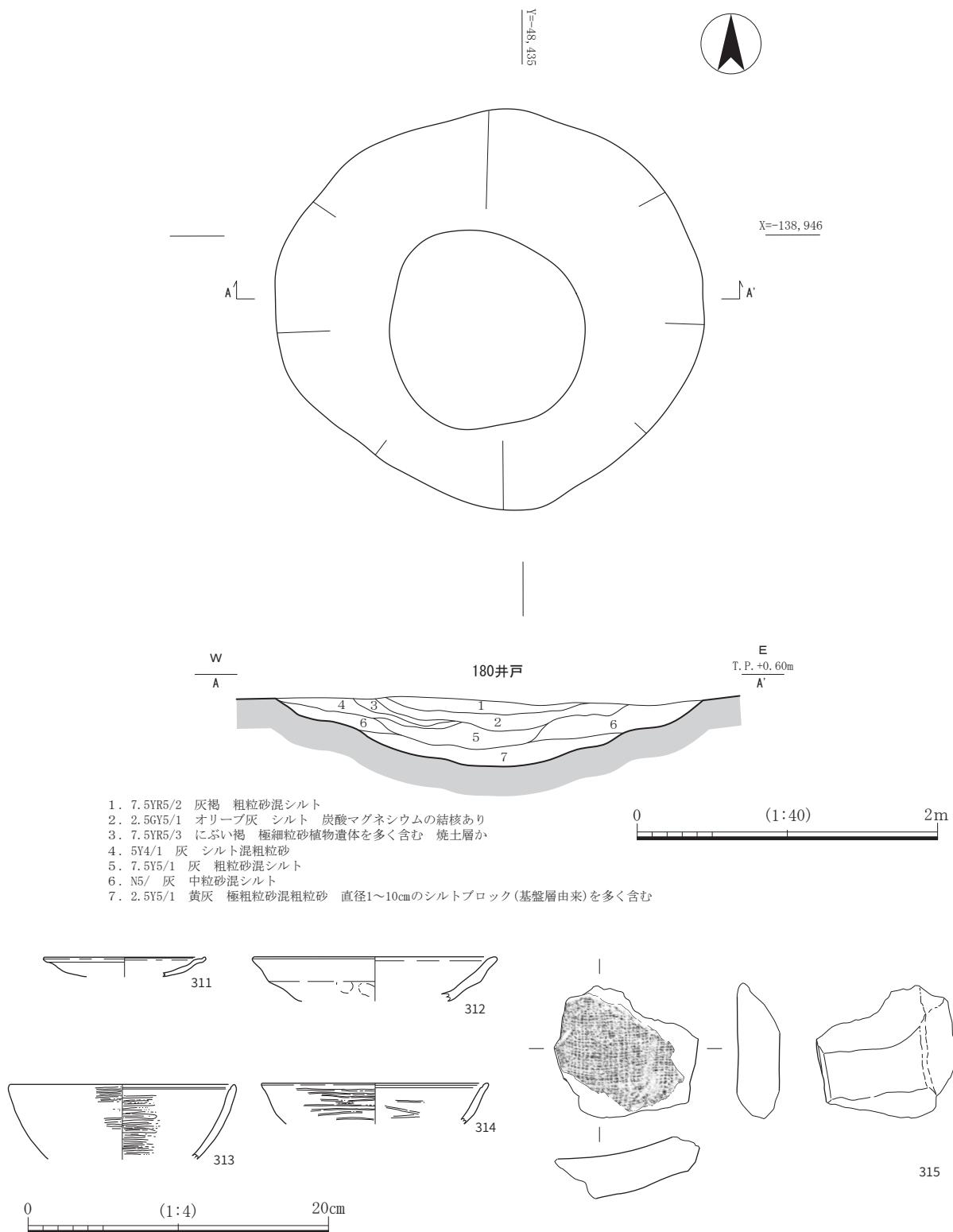


図60 C区180井戸平面・断面 出土遺物

309の復元口径は11.0cmを測る。11世紀後半に比定される。

153井戸(図59、図版21) 調査区中央、X=-138,942.5、Y=-48,431に位置する。遺構は4落込みによって上面は削平を受けていた。井戸は曲げ物を井戸枠として使用しており、湧水層である第4層(砂層)まで掘り下げられていた。掘方の平面形は円形で、検出面における規模は直径1.3m、深さ0.7mを測る。井戸枠は上段のものは抜き取られており、最下段の曲げ物と二段目の下半部だけが残されていた。最下段の曲げ物の直径は0.4m、高さ0.25mを測る。遺物は出土しなかったが、B区で曲げ物を使用した238井戸が検出されていることや、中世の4落込みに切られていることなどから古代の遺構と判断したが、中世まで降る可能性もある。

180井戸(図60、図版21・30) 調査区中央、153井戸の南西約4mに位置する。遺構は4落込みによって上面は削平を受けていた。井戸は素掘りで、湧水層である第4層(砂層)まで掘り下げられていた。検出面での規模は直径2.8m、深さ0.4mを測り、断面形状は浅い擂鉢状を呈する。遺物は土師器皿(311・312)・黒色土器(313・314)・平瓦(315)のほか、須恵器の細片なども出土した。311はいわゆる「て」字状口縁皿である。口径は10.6cmを測る。312は口縁部をやや外反させて、端部を丸く收める。口径は16.0cmを測る。313はA類の椀である。内湾しながら立ち上がる体部をもち、内外面ともにヘラミガキ調整を施す。口縁端部内面に浅い沈線を巡らす。復元口径は15.0cmを測る。314はB類の椀である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反させて丸く收める。内外面ともにやや粗めのヘラミガキ

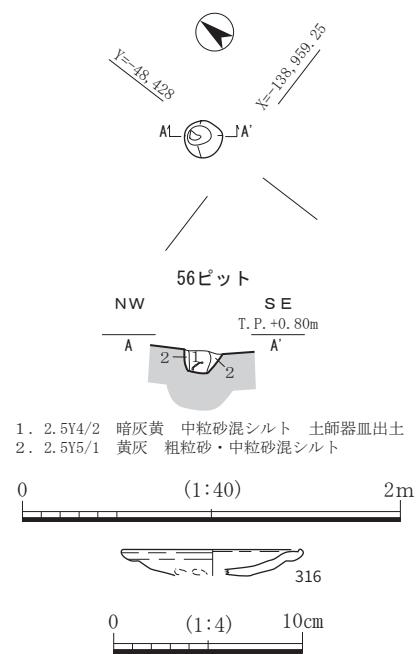


図61 C区56ピット平面・断面 出土遺物 反させて丸く收める。内外面ともにやや粗めのヘラミガキ

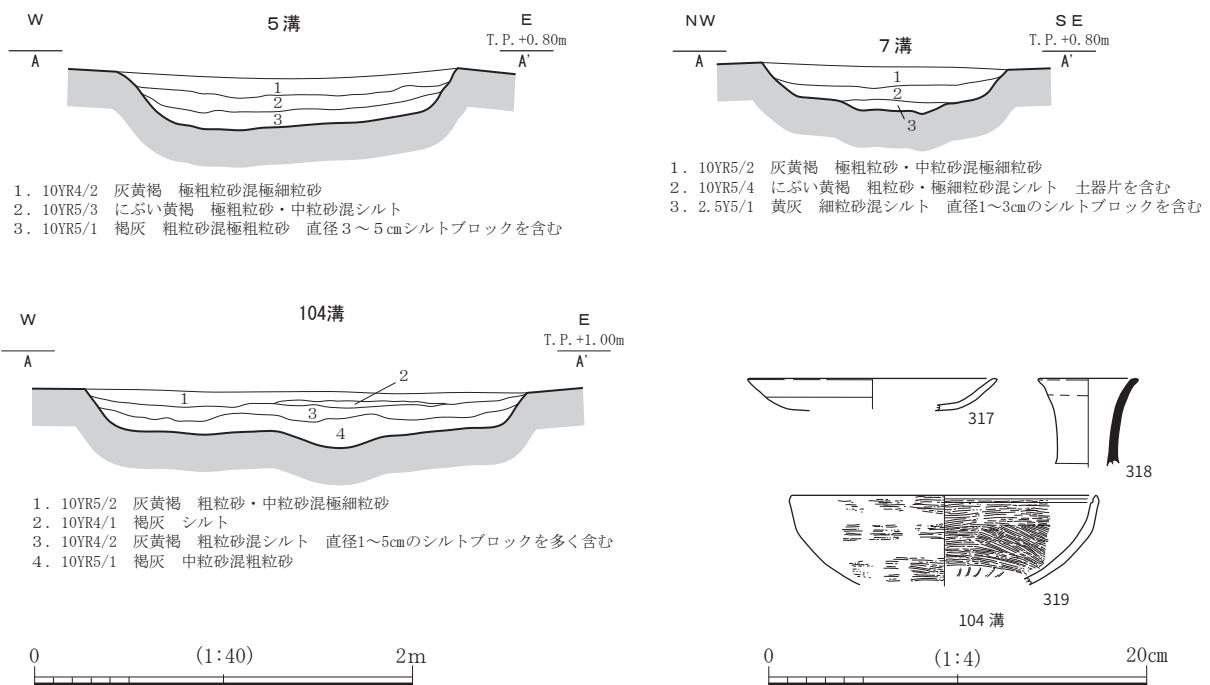


図62 C区溝断面 出土遺物 (4)

調整を施す。内面口縁下には浅い沈線を巡らす。315は平瓦である。凹面に布目が残るが、凸面の調整は不明である。これらの遺物から、井戸の時期は10世紀後半と考えられる。

229井戸(図 59) 180井戸の南約3mに位置する、素掘りの井戸である。ほかの井戸同様4落込みによる削平を受ける。検出面での規模は、直径2.0m、深さ0.6mを測る。断面形は浅い「U」字状を呈する。井戸は湧水層である第4層(砂層)まで掘り下げられていた。遺物は出土しなかったことから、中世の遺構である可能性も残る。

56ピット(図 61、図版 21・30) 調査区の南端部、X=-138,959、Y=-48,428付近に位置する。直径0.2m、深さ0.1m、柱当たりの直径0.1mを測る。柱当たりから土師器(316)が出土した。316はいわゆる「て」字状口縁皿で、復元口径9.4cmを測る。11世紀後半の所産である。

5溝(図 38・62、図版 22) 調査区南半部、Y=-48,426ライン付近を南北方向に延び、その後南東方向を指向する。溝の北側は4落込みに切られ、溝の南側は調査区外に延びる。規模は幅1.8m、深さ0.3mを測る。埋土は3層で最下層にシルトブロックを含んだ極粗粒砂層が堆積する。5溝はその規模や方向から考えて、4落込みの北側に配する104溝と同一遺構である可能性が高い。遺物は図示できなかつたが、古代の土師器杯片や甕片が出土したほか、古墳時代中期の須恵器や土師器も出土した。

7溝(図 38・62、図版 22) 調査区の南端部を北東一南西方向に延びる。北東端は1溝に切られるが、3・5溝より新しい。また、南西端は調査区外に延びる。規模は幅1.3m、深さ0.25mを測る。遺物は須恵器や土師器の細片が出土した。

104溝(図 38・62、図版 22) 調査区北半部を南北方向に指向する。北側は調査区外に延び、南側は4落込みに切られる。規模は幅2.3m、深さ0.3mを測る。埋土は4層で、上から3層目にシルトブロックを含んだ層が堆積する。遺物は平安時代の土器(317～319)が出土したほか、古墳時代中期の土器や弥生土器なども含まれていた。317は土師器皿である。口縁部は外反気味に仕上げる。復元口径は13.0cmを測る。318は須恵器壺の口頸部である。外反しながら立ち上がり、口縁端部を外に開く。319は楠葉型の瓦器碗である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁下に沈線を巡らせる。内外面ともにヘラミガキ調整を施すが、外面は剥離が著しく不明瞭である。11世紀後半の所産である。

4落込み(図 63・図版 22・30) 調査区中央南端部に位置する、平面形が長方形を呈する落込みである。規模は南北約12m、東西約17mを測る。埋土は細粒砂・中粒砂・粗粒砂混じりのシルト層が堆積する。遺物は瓦器・土師器・須恵器(320～323)のほかに砥石(324)などが出土した。320は楠葉型の瓦器碗である。底部を欠く。口縁下に沈線が巡る。内外面ともに器面の剥離が顕著で調整は不明瞭であるが、体部外面でヘラミガキがわずかに確認できる。11世紀後半に比定される。321は土師器皿である。摩耗が著しく調整は不明である。322は東播系の須恵器碗である。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。口径14.0cm、器高5.3cmを測る。底部には糸切り痕が残る。11世紀後半に比定される。323は東播系須恵器の擂鉢底部である。底部外面に糸切り痕が残る。324は泥岩製の砥石である。長さ7.9cm、幅2.6cm、厚さ2.3cm、重さは58.1gである。5面で使用が確認できた。

#### 4. 中世の遺構と遺物(図 35、図版 22・30)

当該期で検出した遺構は、溝である。遺跡の周辺では古代末から椋橋荘などの荘園が形成され、庄内遺跡一帯も耕地化が進み、遺構も耕作に伴うものと考えられる。

1溝(図 38・64) 調査区の東辺部に位置し、弧を描きながら南北方向に指向する。溝の東半部は調査区外に広がる。溝は2溝とともに第2層上面で検出した。規模は幅2.0m以上、深さ0.4m以上を測る。

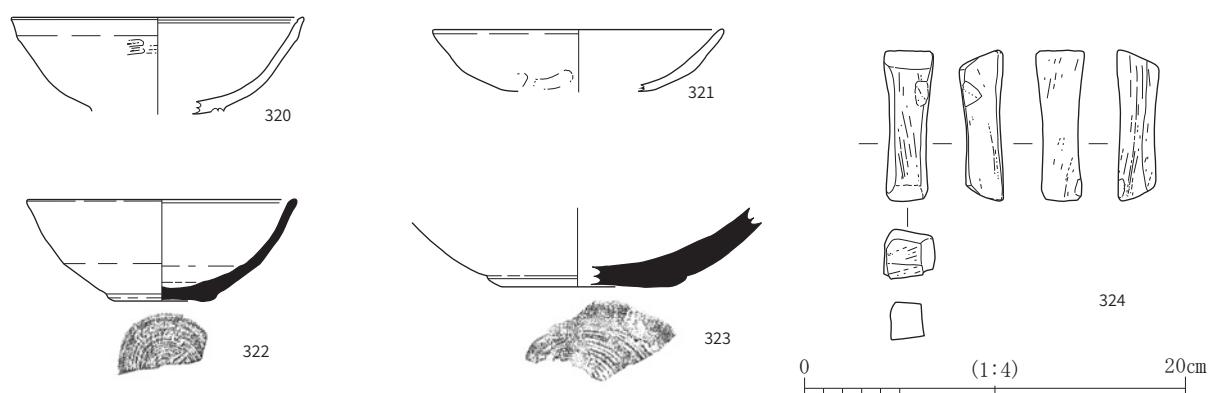
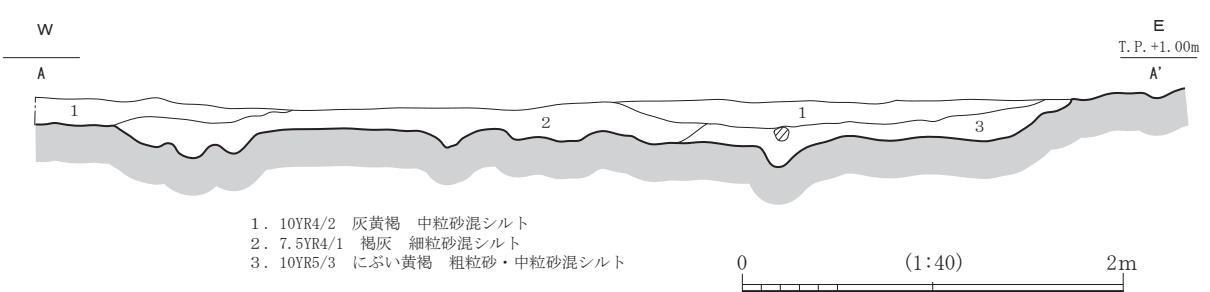
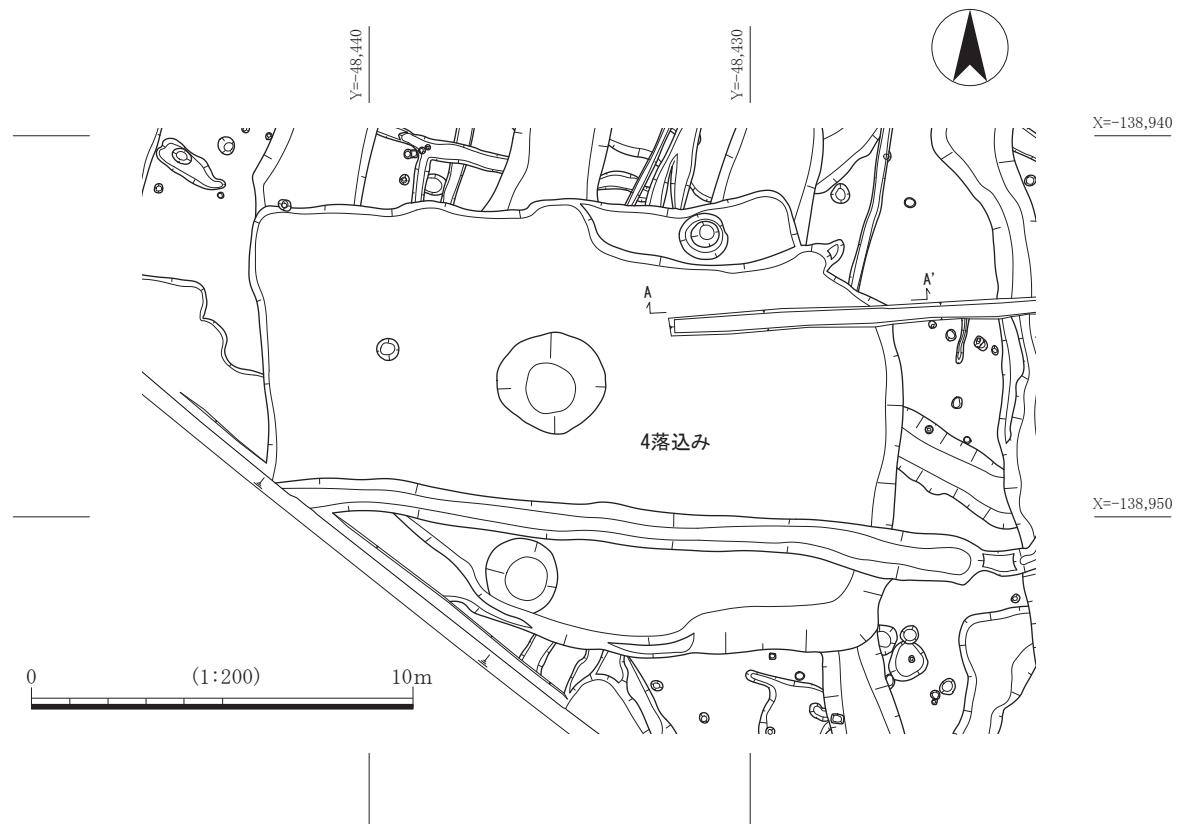


図 63 C 区 4落込み平面・断面 出土遺物

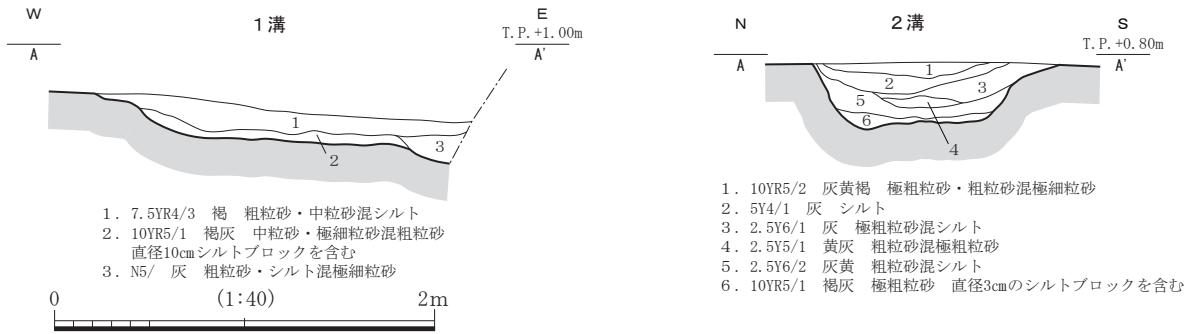


図 64 C 区 1・2 溝断面

遺物は図示できなかったが、古墳時代から古代に属する土師器や須恵器、土錐などが出土した。

2 溝(図 38・64、図版 22) 調査区の南半部、X=-138,950 ライン付近を東西方向に延びる。溝の西側は調査区外に延びるが、東端は 1 溝に取り付く。溝は 1 溝同様第 2 層上面で検出しておらず、4 落込みと先後関係にある。溝の規模は幅 1.3m、深さ 0.3m を測る。第 2 層上面で検出されたことから、中世の耕作に伴う溝と考えられる。遺物は図示できなかったが、瓦器椀の細片のほかに弥生時代中期中葉の壺片や、古墳時代から古代の土器が出でた。

## 5. 包含層の遺物

第 2 層出土遺物(図 65、図版 30) 第 2 層からは以下の遺物が出土した。325～327 は土師器皿である。325 の体部は内湾しながら外上方に延び、口縁部は軽く外反させる。326 は口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く收める。327 は体部と底部の境を屈曲させて稜をつくる。327 は 13 世紀の所産である。328 は土師器甌もしくは甌の把手である。上面に未貫通のスリットが入る。329～333 は瓦器である。329・330 は楠葉型の椀である。329 は摩耗が著しく調整は不明であったが、330 は内外面ともにヘラミガキ調整が残る。331 は和泉型の椀である。内湾しながら立ち上がり、口縁部を外反させ、端部は丸く收める。332・333 は瓦器椀の底部である。334 は瓦質の三足鍋の脚部である。335 は灰釉陶器椀底部である。外面に糸切り痕が残る。336・337 は白磁碗で、336 は口縁端部は玉縁状に仕上げる。337 は削り出し高台をもち、外面は露胎する。338 は白磁の皿である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く收める。339 は同安窯系の青磁皿である。見込み部には櫛点描文やヘラ描き文が認められる。340～352 は須恵器である。340～343 は古墳時代の蓋杯である。340 は平らな天井部をもつ。杯身・杯蓋はいずれも TK 23 型式から TK 47 型式に属する。344 は杯 B である。体部は外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。9 世紀の所産である。345・346 は東播系の椀である。346 の底部外面には糸切り痕が残る。11 世紀後半～12 世紀に属する。347 は有蓋短頸壺である。古墳時代中期の所産である。348・349 はミニチュアの壺である。349 は底部外面に糸切り痕が残る。平安時代に属する。350～352 は甌口頸部である。350・351 は 5 世紀後半、352 は 9 世紀の所産である。353～355 は製塩土器である。353 は脚台 III 式、354 は丸底 I 式、355 は丸底 III 式である。356 は管状土錐である。357 は平瓦である。凹面には布目が、凸面には斜格子タタキ目が残る。358～360 は石製品である。358 は方形の板状石製品である。一部を欠くが中央に 1 か所穿孔が認められるほか、表面には対角線に 1 条の線刻を施す。一边 2.4cm、厚さ 0.5cm を測る。重さは 6.3g である。用途は不明であるが、何か糸状のもので縛り付けて使用したと推察される。359 は二次加工の認められる滑石製石鍋片である。温石として再利用したものと考えられる。360 は頁岩製の砥石である。

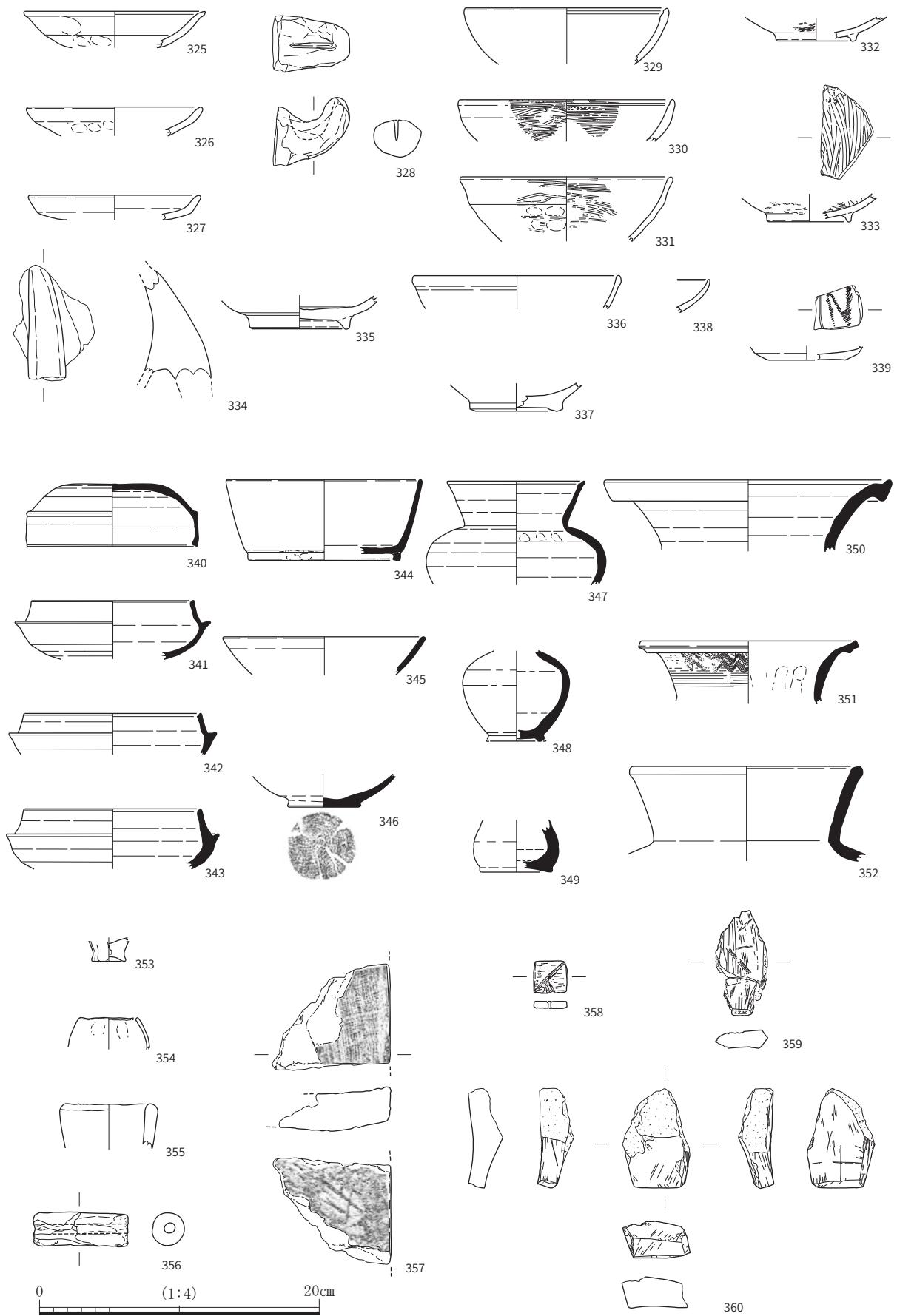


図 65 C 区包含層出土遺物

## 第4章 まとめ

今回の調査では、弥生時代中期から中世までの遺構と遺物が検出された。時代を追ながら、調査成果を総括していく。

まず、今回の調査地における弥生時代中期以前の状況は、神崎川河口付近の干潟であったと考えられ、海成層である第5層の堆積が少なくとも3m以上の厚さをもつことが確認でき、T.P. - 3m付近からハマグリ・フジツボ・ヤマトシジミなどの貝類が出土したことから、汽水域であったことがわかる。

この地が陸地化して安定するのは、神崎川がもたらしたと考えられる洪水堆積層である第4層（砂層）と第3層（シルト層）が堆積してからである。そして、A区では第4層から弥生時代中期の土器が出土している。また、B区で弥生時代中期後半の土器が出土した流路は、第3・4層を掘り込んでいることから、弥生時代中期以降に陸地化が進んだと考えられ、陸地化とともにこの地における人々の活動が開始されたことが確認できた。これまでの調査では、当該期の遺跡は豊中丘陵や豊中台地上、さらには沖積地では上津島遺跡・服部遺跡・豊島北遺跡など、庄内遺跡から北側に位置する標高が高い立地に営まれていることが確認されていた。今回、みつかった遺構は流路のみであったが、今後周辺の調査が進展すれば、当該期の集落域が発見される可能性がある。

庄内遺跡において人々の活動が本格化するのは、古墳時代になってからである。今回の調査で庄内期の遺構がC区で確認できたが、検出された遺構は不整形な土坑や溝のみであった。これは、調査地が集落の縁辺部にあたるからで、当該地における活動が低調であったことを意味するものではない。なぜなら、これらの遺構から出土した遺物には、河内・吉備・阿波・山陰といった他地域産の土器が含まれていることから、他地域との交流が行われていた集落であったことが窺える。また、遺物の中に土錘が複数点出土したことは、漁撈に携わっていたことを示す。また、製塙土器も出土したことから、製塙作業を行っていたことも考えられるが、製塙炉をはじめ製塙活動を示す遺構が検出されなかったことから、可能性を示唆するだけに留める。

古墳時代前期の遺構は、C区で井戸や溝が検出されたが、集落の縁辺部であることに変わりはない。しかし、94井戸は井戸枠に船の転用材が使用されていたことからも、引き続き本遺跡の集落が海と密接につながっていたことが推察される。

古墳時代中期になると、全ての調査区で遺構が検出され、遺物の出土量も激増するようになる。検出された遺構は竪穴建物2棟、掘立柱建物3棟、土坑、ピット、溝などで、集落域が当調査区にまで広がることが看取できた。竪穴建物はいずれも一辺が3m前後と小振りで、つくりも柱穴や壁溝をもたない構造であったことから、作業小屋のような性格であったかも知れない。

掘立柱建物は3棟が並ぶように建てられていた。建物2と建物3は建物間の距離が約1mと近接することから、時期差を考える必要がある。しかし、他の遺構との切り合い関係や出土遺物から大きく時期を違えるものではないと考えられる。

掘立柱建物が廃絶したあとは、C区については、溝が多く掘削されるようになる。溝は弧を描きながら南北方向に延びるものが多い。また、A区においては、北西—南東方向に延びる溝を検出した。これらの溝の性格は今のところ不明であるが、地形からみて集落の中心が標高の高い北もしくは北西方向にあると想定されることから、湿潤な土地に溝を掘削して排水作業を行い、より乾燥した土地を手に入れ

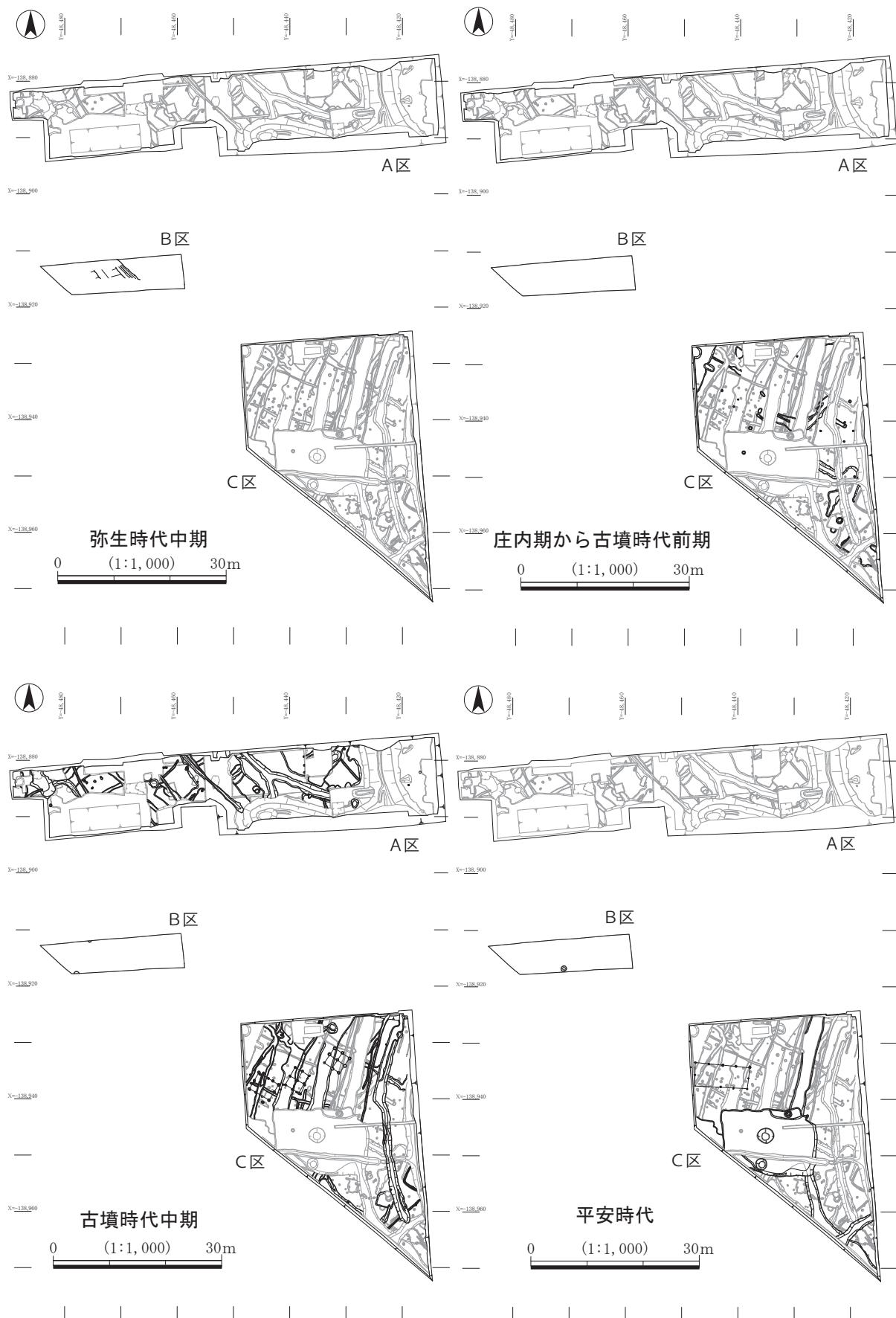


図 66 遺構変遷図（1）

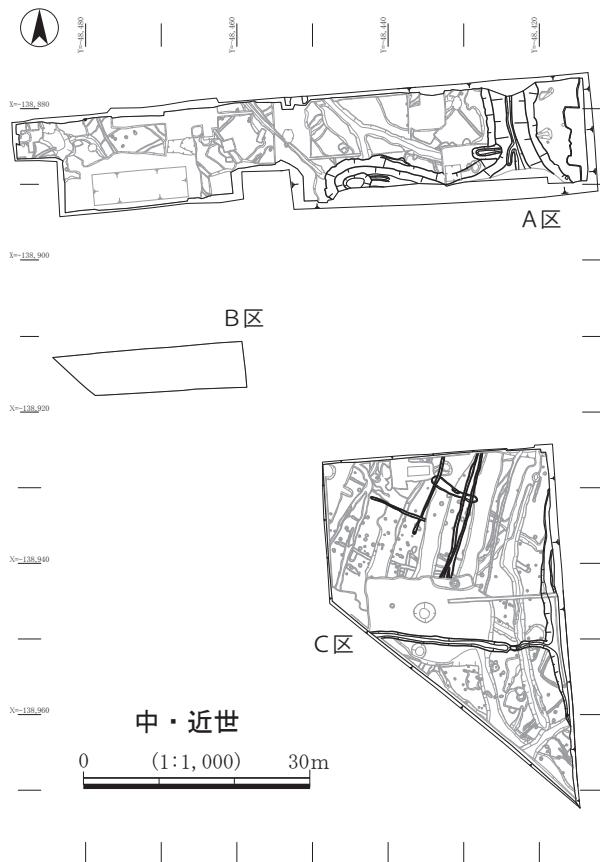


図 67 遺構変遷図（2）

が施工され、本遺跡の南西約1kmには椋橋庄の流通拠点の一つとされる庄本遺跡が盛行する。本遺跡においても正方位をとる掘立柱建物や、土坑・井戸・溝などが検出されたが、いずれの遺構も10世紀後半から11世紀後半のものであることから、椋橋庄の成立との関連が推察される。

中世以降、本調査地は耕作地として利用されるようになる。今回の調査では287溝を検出したが、この溝は耕作地に伴う水路だけではなく、水運に利用するための機能を兼ね備えていたと考えられる。その根拠としては、287溝から分岐する286溝が挙げられる。286溝は分岐点から長さ約20mの地点で収束しており、その先端部から杭列が検出された。この杭列は桟橋や船を繋ぎ止めるための施設であったと推察される。また、庄本遺跡においても戦国時代末期から江戸時代前期の水路が検出されており、その中に船止めの機能をもつものがあると指摘されている。よって、神崎川と猪名川河口流域には網目状に水路が張り巡らされ、物流の一端を担っていたと考えられる。そして、そのことは豊中が物流の拠点として発展していく遠因となったと考えられる。

るために掘削されたものと推察される。

一方、遺物をみてみると、土師器・須恵器などの土器類のほかに土錘や製塩土器が出土したが、これは既往の調査成果とも齟齬をきたすものではなく、庄内期と同様に漁撈を生業とする海浜部の集落としての性格を示す遺物といえる。出土した須恵器の時期がTK23型式からTK47型式のものが多いことから、古墳時代中期における庄内遺跡の集落は比較的短期間であったと考えられる。また、須恵器の中には焼け歪みのあるものが散見されることから、須恵器の供給源として同時期に操業していた桜井谷窯跡群との関係も想定される。

古墳時代後期から奈良時代の遺構は検出されず、遺物も微量しか出土しなかった。これは周辺地域においても桜井谷窯跡群の操業停止とともに集落が縮小する傾向にあり、庄内遺跡においても同様の傾向を示すものであろう。

平安時代になると遺跡の周辺には条里制地割

# 写 真 図 版



写真図版 1 遺構



写真図版2 遺構



1. A区西半部全景（西から）

1



2

2. A区東半部全景（南西から）

写真図版3 遺構



1. A区竪穴建物2遺物出土状況  
(北東から)



2. A区竪穴建物2遺物出土状況  
アップ(東から)



3. A区竪穴建物2完掘状況  
(北東から)

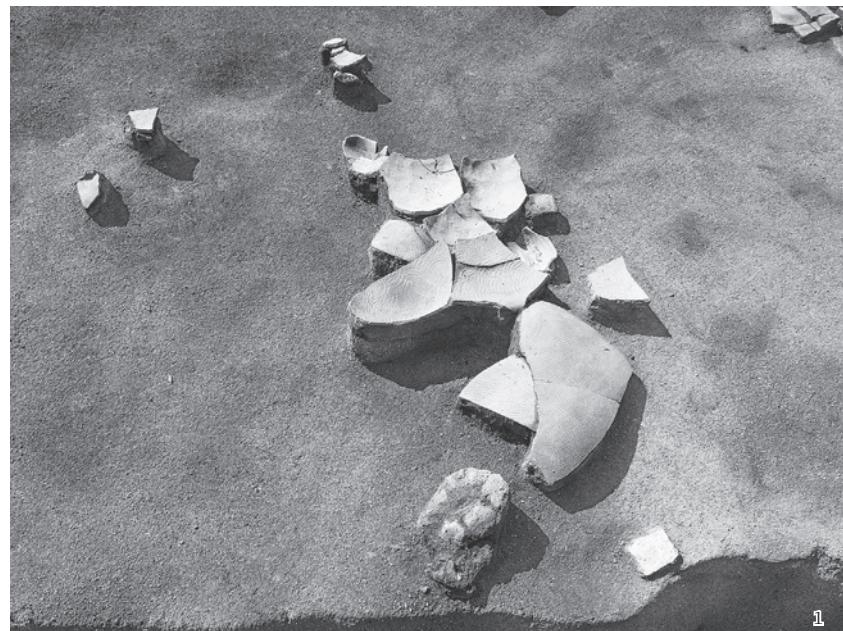
#### 写真図版4 遺構



2. A区 280 土坑遺物出土状況アップ  
(西から)



写真図版5 遺構



1. A区304土坑遺物出土状況  
アップ2（北から）



2. A区254溝（北西から）



3. A区254溝断面（西から）

## 写真図版6 遺構



1. A区267溝（北西から）

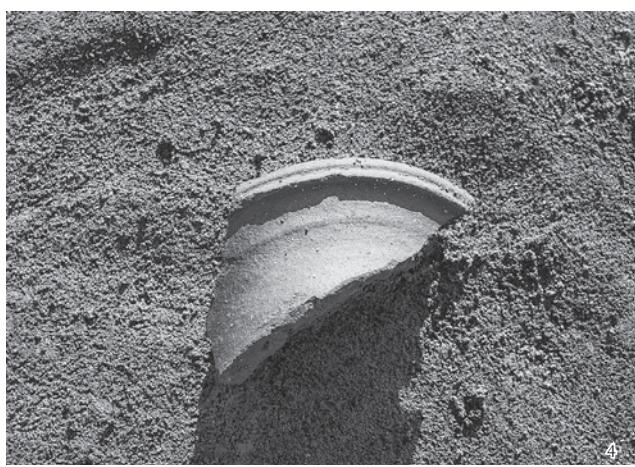


2. A区267溝遺物出土状況  
(北西から)



3. A区268溝遺物出土状況  
(南東から)

写真図版 7 遺構



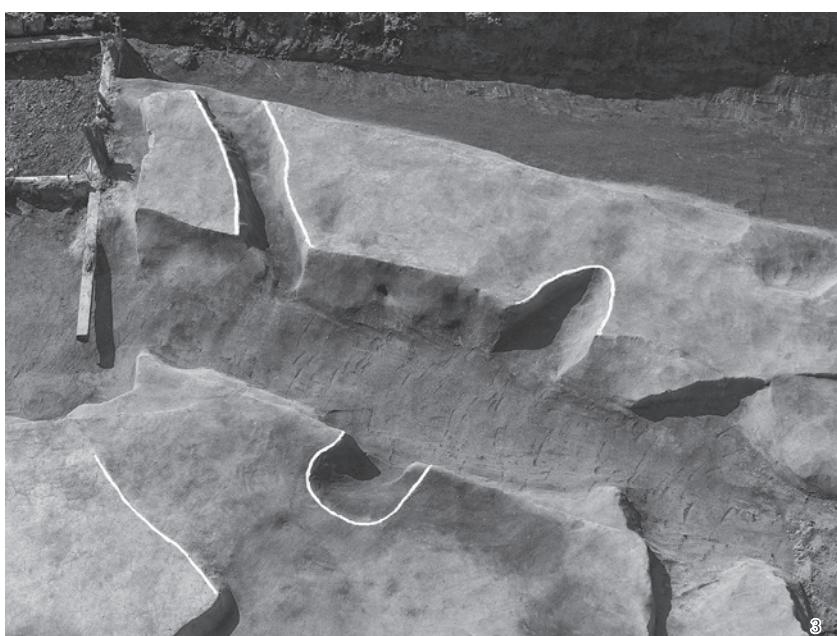
## 写真図版8 遺構



1. A区 283 溝遺物出土状況  
(北西から)



2. A区 283 溝遺物出土状況アップ  
(南から)



3. A区 299・300 溝 (北から)

写真図版9 遺構



1. A区300溝断面（南西から）



2. A区300溝土製品(159)出土状況（南西から）

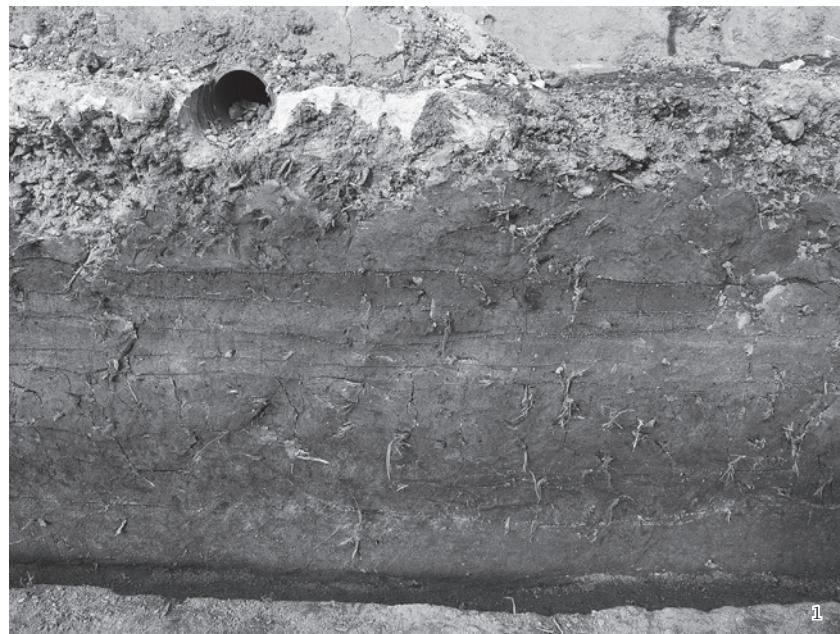


3. A区302・303溝（東から）



4. A区286・287溝（南東から）

写真図版 10 遺構



1. B区北壁断面(南から)



2. B区北壁断面(南東から)



3. B区全景(東から)

写真図版 11 遺構



## 写真図版 12 遺構



1. C 区南半部北壁断面(南東から)

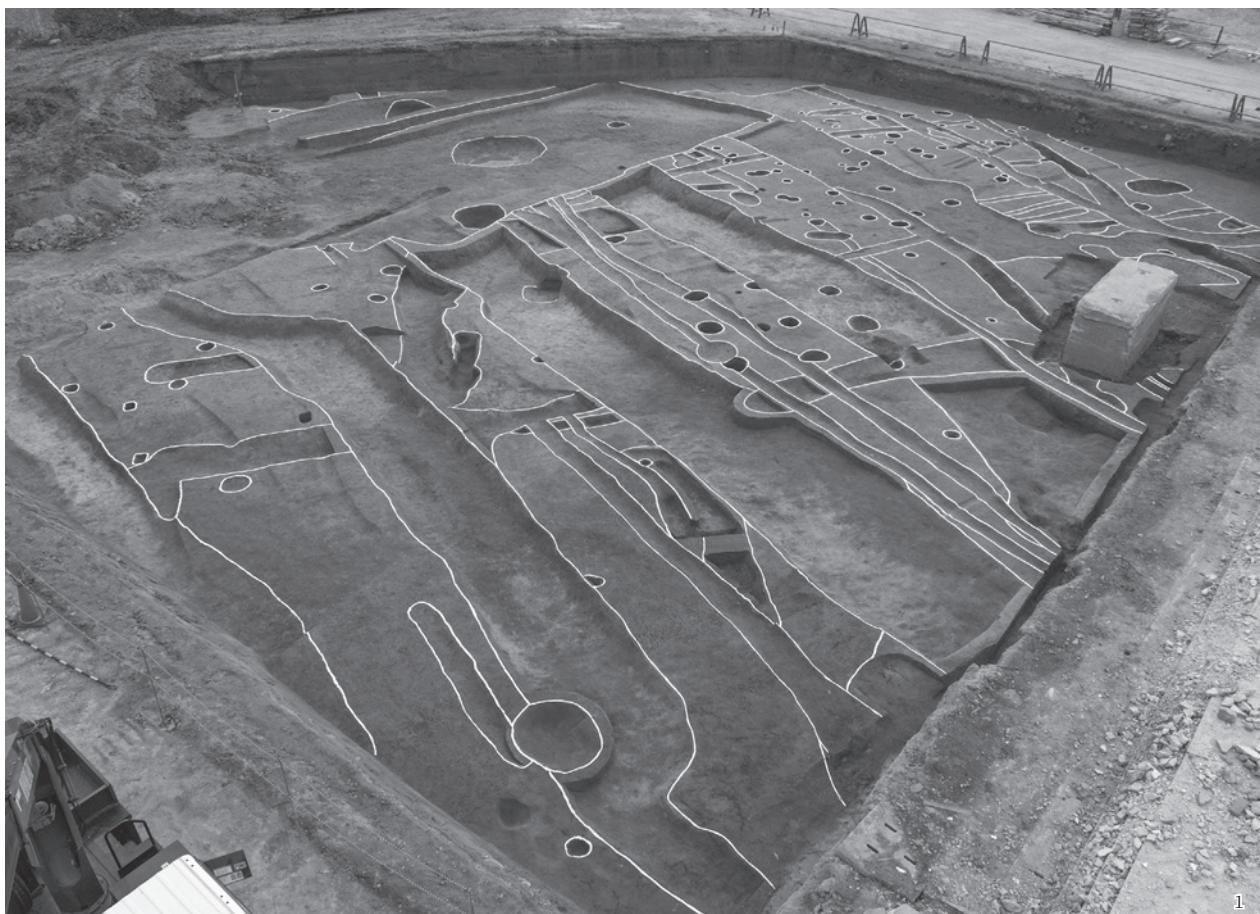


2. C 区南半部北壁断面アップ(南から)



3. C 区東壁断面(西から)

写真図版 13 遺構

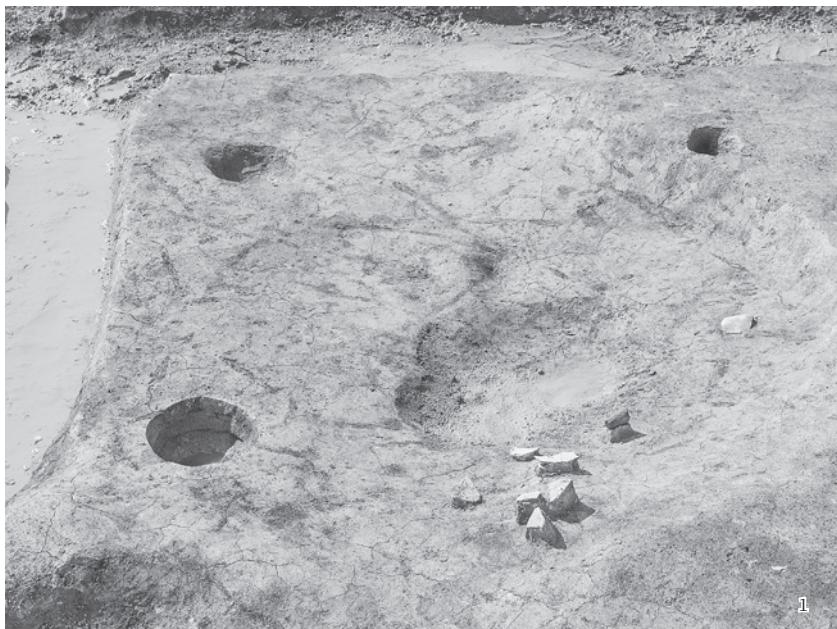


1. C区北半部全景（北東から）



2. C区南半部全景（北西から）

写真図版 14 遺構



1. C 区 24 土坑 (東から)



2. C 区 38 土坑(南東から)



3. C 区 73 土坑炭層検出状況(南西から)



1. C 区 181 土坑（南東から）



2. C 区 94 井戸遺物出土状況  
(北西から)



3. C 区 94 井戸(北西から)

## 写真図版 16 遺構



1. C 区 188 土坑（北東から）



2. C 区 86 溝遺物出土状況（西から）



3. C 区 189 溝(南西から)

4. C 区 189 溝遺物 (241・242)  
出土状況 (北から)



4

写真図版 17 遺構



1. C 区竪穴建物 1・61 溝（南から）



2. C 区竪穴建物 1（南から）

写真図版 18 遺構



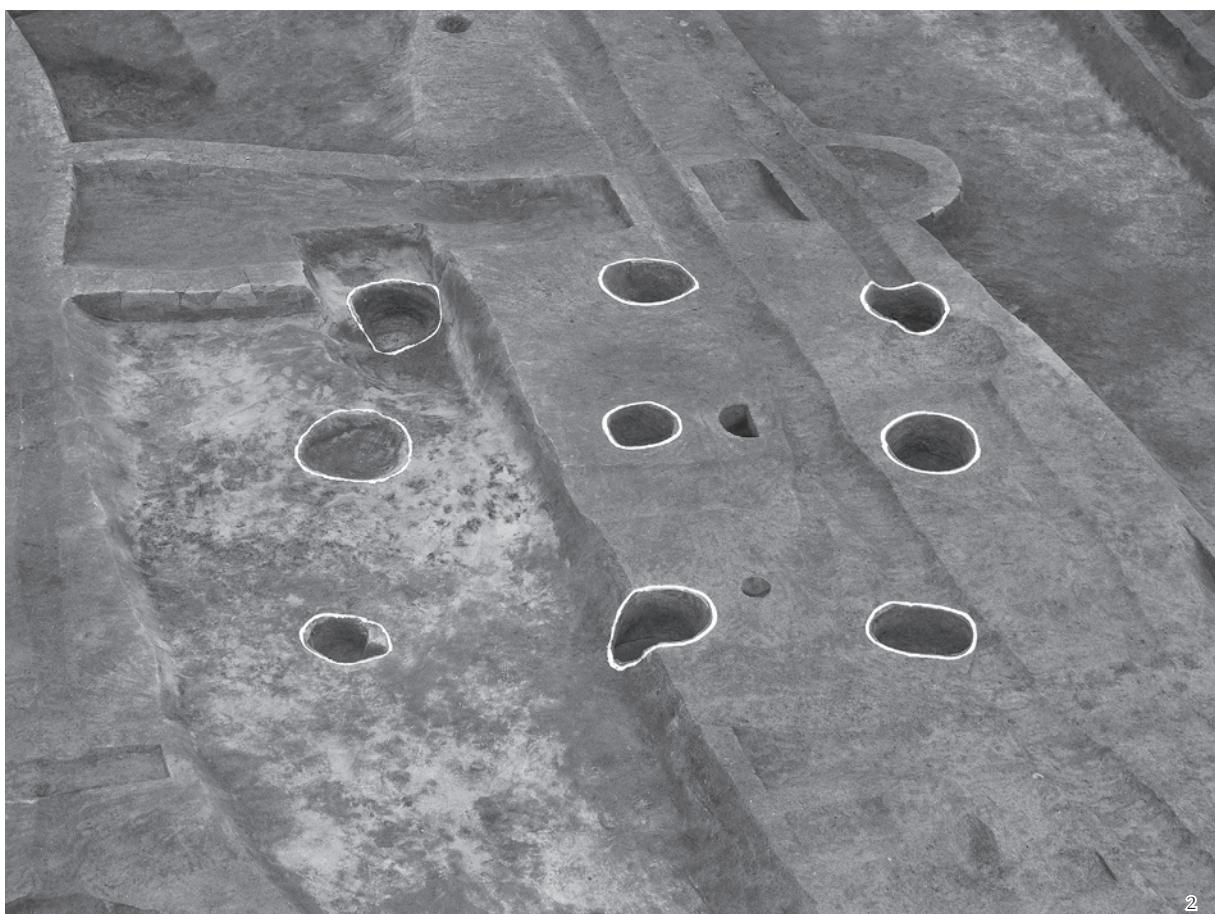
1. C 区豊穴建物 1 断面（南から）



2. C 区 61 溝断面（南から）

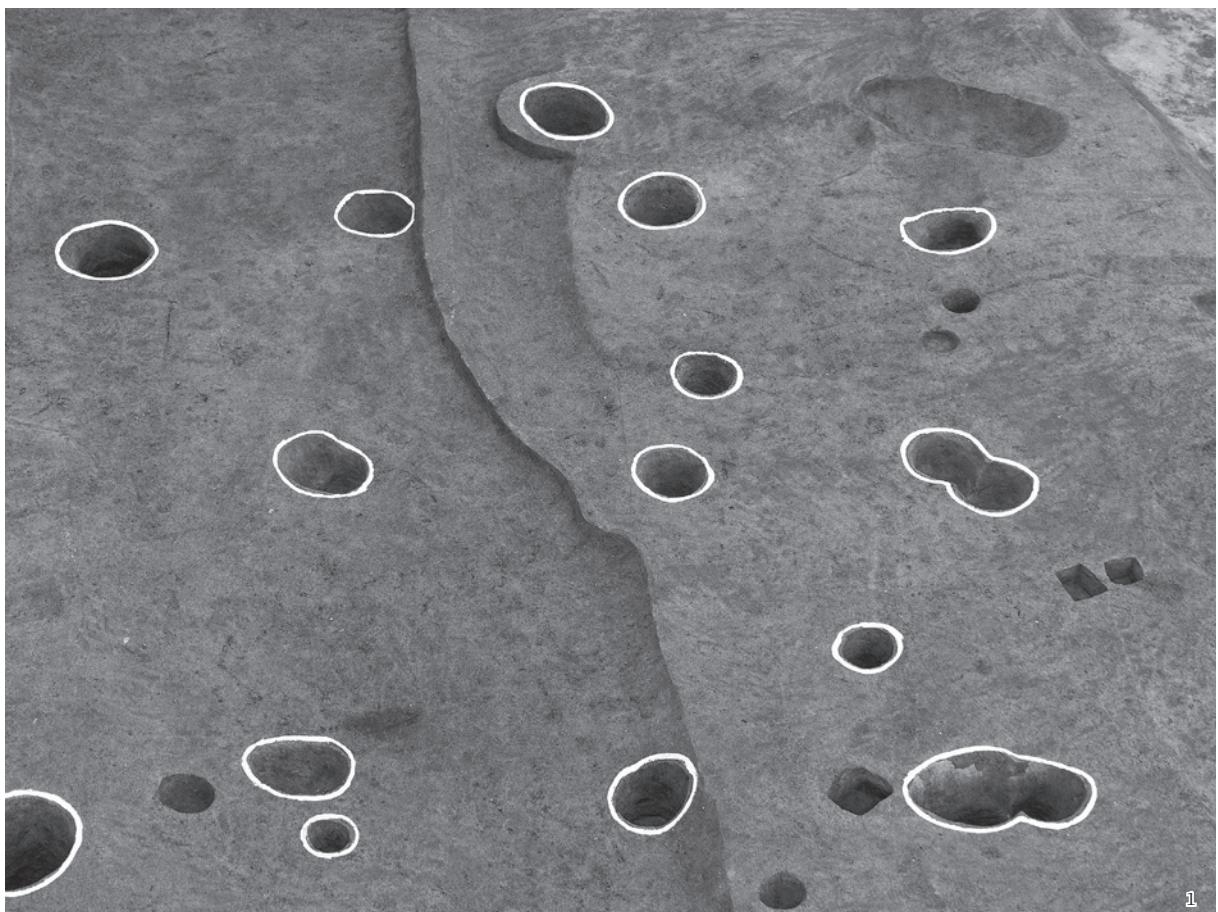


1. C 区掘立柱建物 1～3（南から）

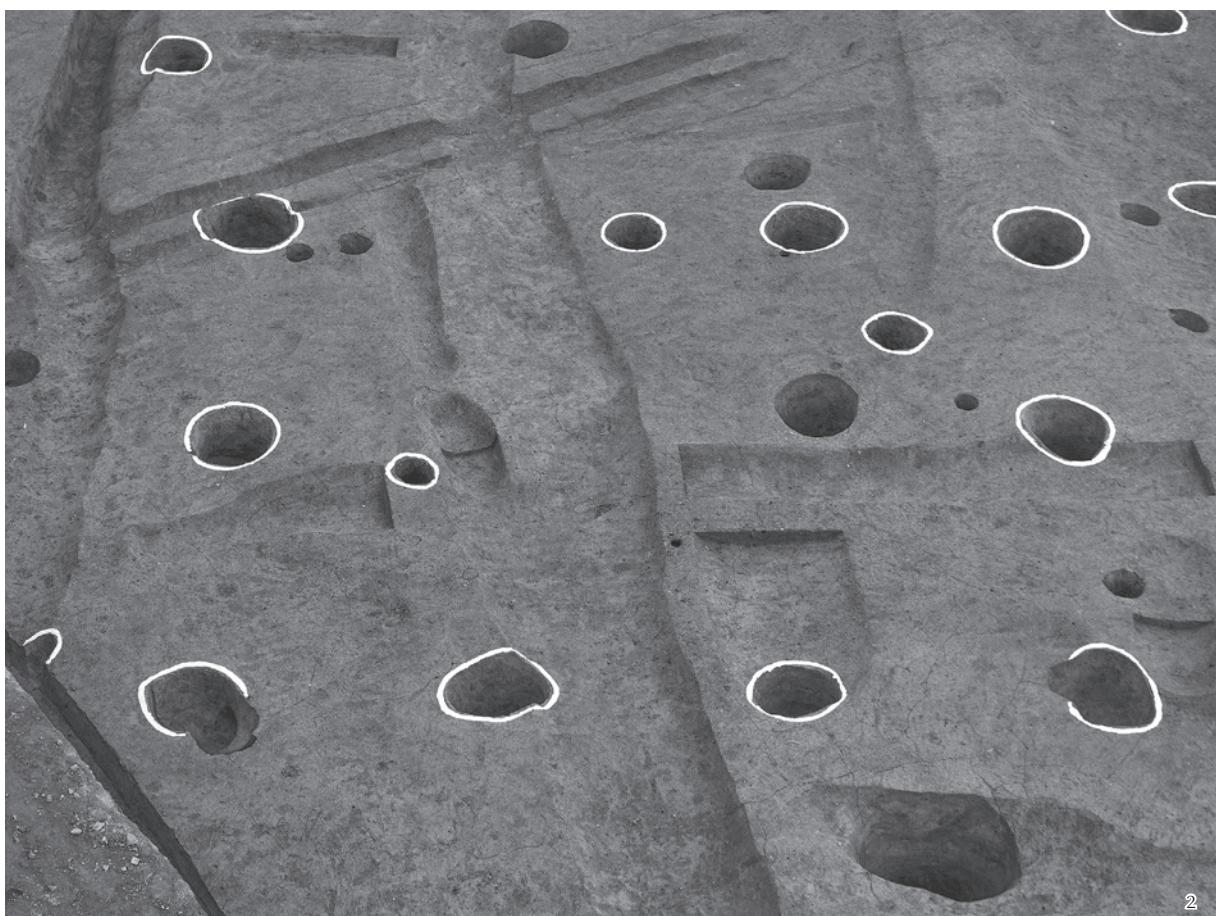


2. C 区掘立柱建物 1（南西から）

写真図版 20 遺構



1. C 区掘立柱建物 2 (南西から)



2. C 区掘立柱建物 3 (南西から)

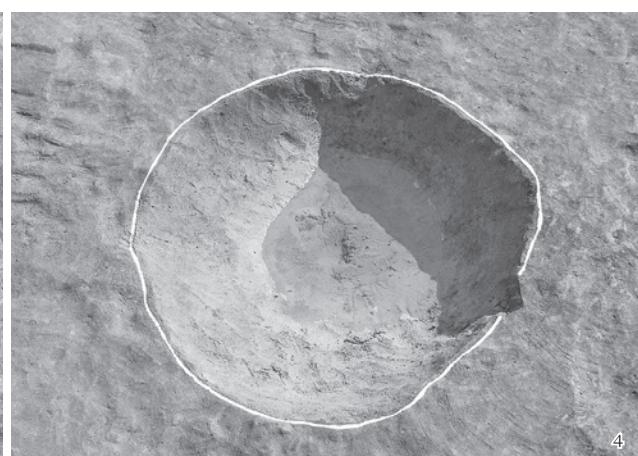
写真図版 21 遺構



1. C 区掘立柱建物 4 (南から)

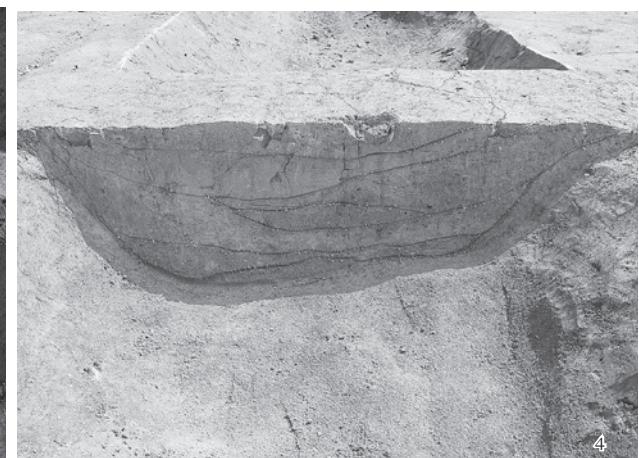
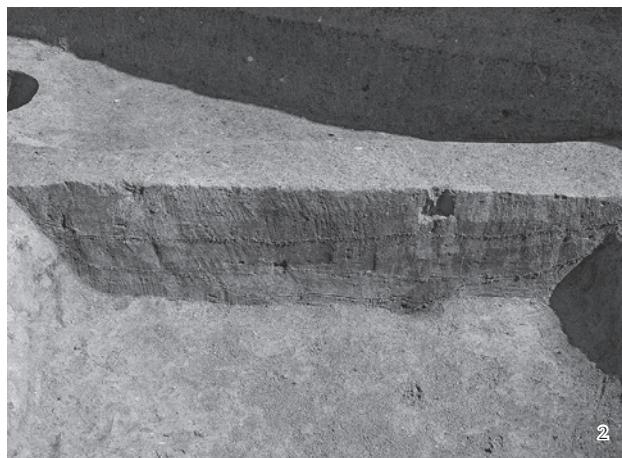


2. C 区 153 井戸 (南西から)  
3. C 区 153 井戸断ち割り状況 (南から)



4. C 区 180 井戸 (西から)  
5. C 区 56 ピット遺物 (316) 出土状況 (南から)

## 写真図版 22 遺構



1. C 区 5 溝断面（南から）

2. C 区 7 溝断面（南西から）

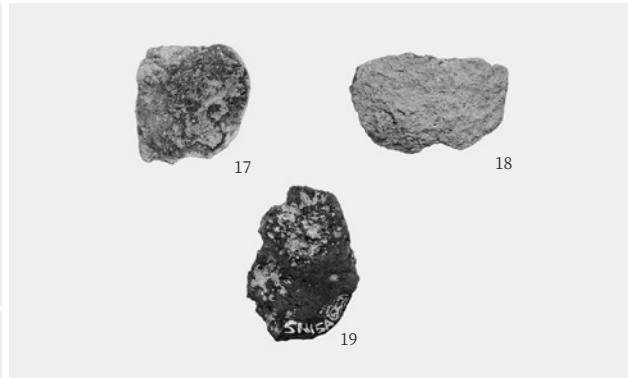
3. C 区 104 溝断面（南から）

4. C 区 2 溝断面（西から）

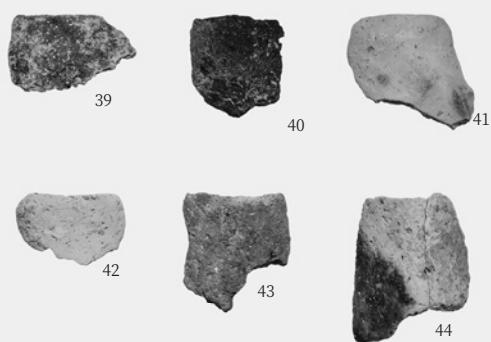


5. C 区 4 落込み（北東から）

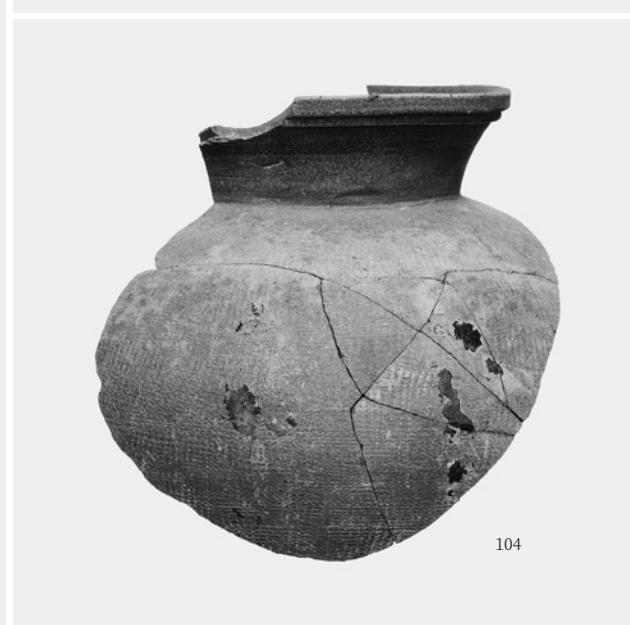
写真図版 23 遺物



写真図版 24 遺物



写真図版 25 遺物



写真図版 26 遺物



121



140



126



141



129



142



138



148

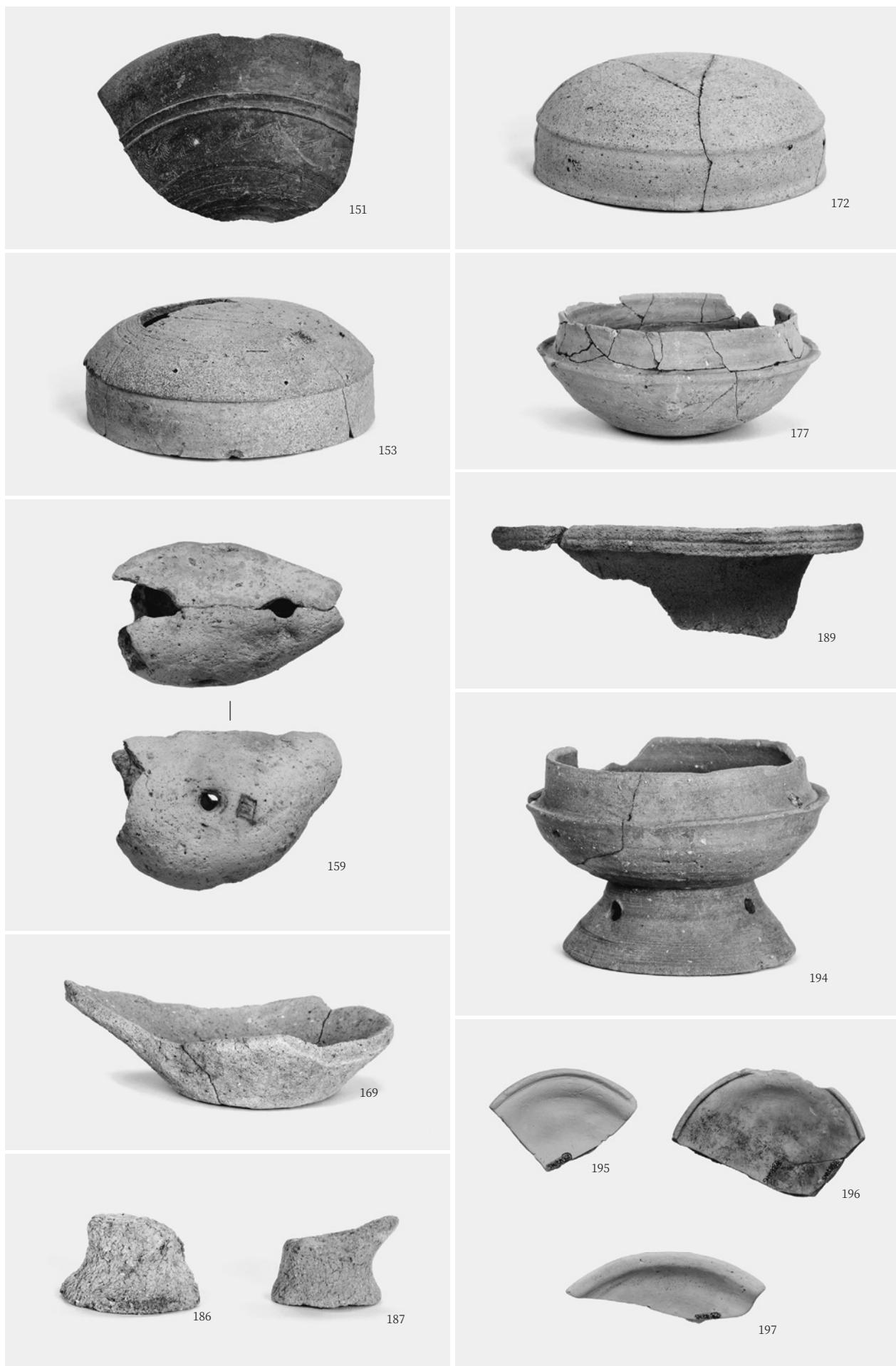


139

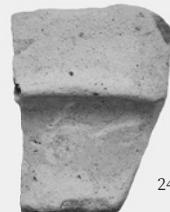
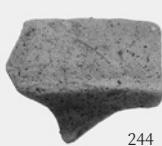


150

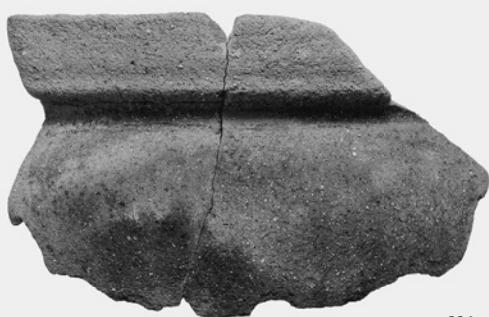
写真図版 27 遺物



写真図版 28 遺物



写真図版 29 遺物



226



274



237



275



241



281



242



285

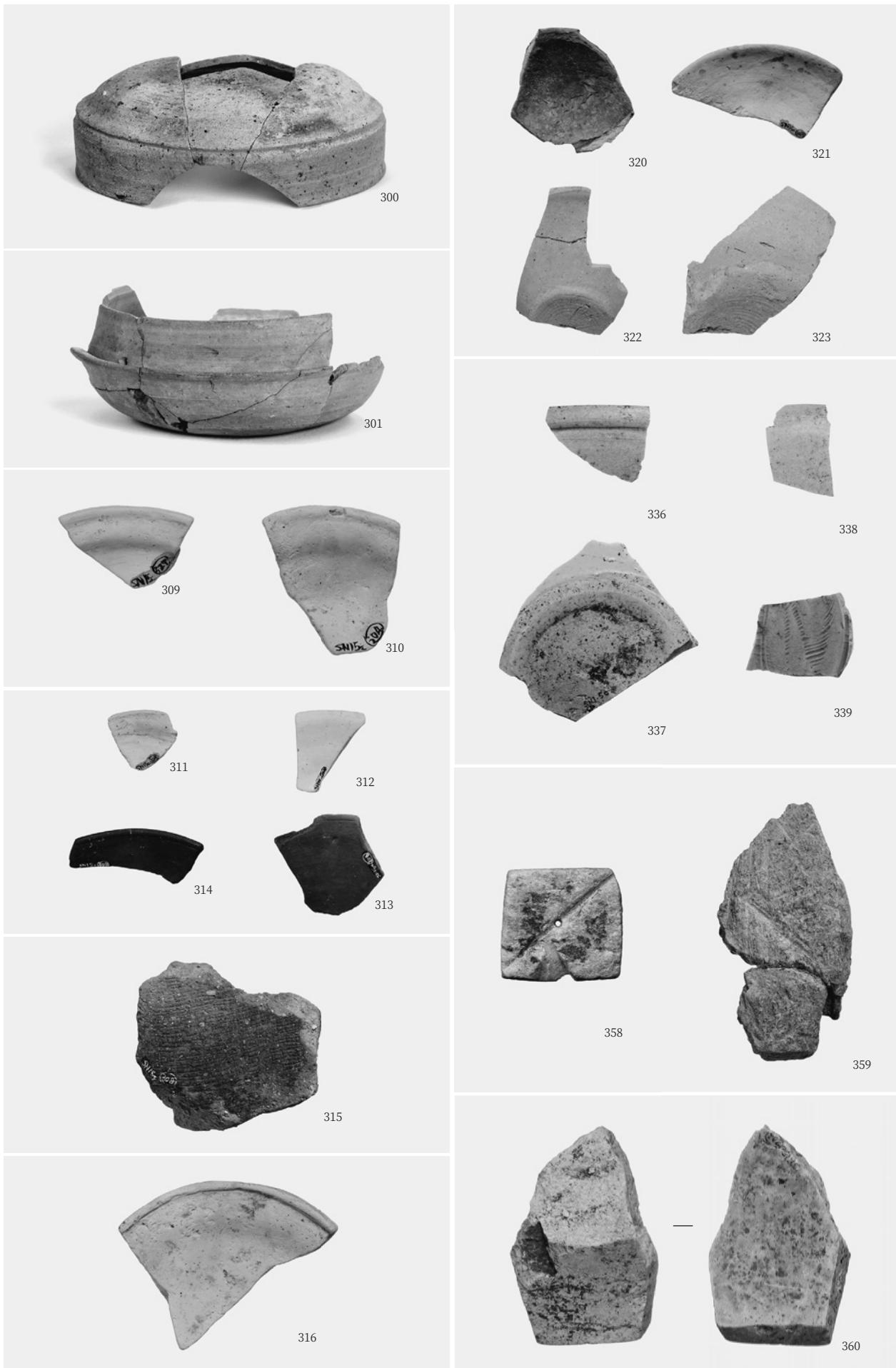


270



295

写真図版 30 遺物



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しょうないいせき						
書名	庄内遺跡						
副書名	(仮称) 庄内さくら学園整備事業に伴う庄内遺跡第5次発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第312集						
編著者名	後藤信義(編)、尾崎裕妃						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2021年11月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
しょうない 庄内 いせき 遺跡	豊中市庄内幸町 4丁目5 他29筆	市町村	遺跡 番号	北緯 34° 44' 47" 東經 135° 28' 15"	2020年9月1日 ～ 2021年3月31日	2,176 m <sup>2</sup>	(仮称) 庄内さくら学園整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
庄内 遺跡	集落 生産	庄内期 ～古墳時代前期	土坑、井戸、ピット、溝		庄内式土器、土師器、製塩土器、土錘	河内、山陰、吉備、阿波産の土器が出土	
		古墳時代中期	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、井戸、ピット、溝		土師器、須恵器、製塩土器、土錘、鉄滓	掘立柱建物群と竪穴建物 焼け歪みのある須恵器	
		平安時代	掘立柱建物、土坑、井戸、ピット、溝、落込み		土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、瓦	正方位に建つ掘立柱建物	
		中・近世	溝		瓦器、青磁、白磁、陶器、染付	水運に利用された溝	
要 約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弥生時代中期の流路を検出し、庄内遺跡における人々の活動が当該期にまで遡ることが確認できた。</li> <li>・古墳時代は庄内期の遺構は希薄であったが、出土した土器の中には河内、山陰、吉備、阿波産の土器が含まれており、海浜部にある集落というだけでなく、他地域との交流が盛んに行われていたことが窺えた。また、舟材を井戸枠に転用した井戸が検出され、集落が海と密接な関係にあることを傍証する資料となった。</li> <li>・遺跡は古墳時代中期に盛期を迎える。遺構は全面に広がり、縦柱建物を含む掘立柱建物や竪穴建物が検出され、集落地域が拡大することが確認できた。桜井谷窯跡群との関係を窺わせる焼け歪んだ須恵器が出土した。</li> <li>・古代には正方位を軸にもつ掘立柱建物や井戸を検出した。周辺には椋橋荘が展開することから、関連性が推察される。</li> <li>・中世以降は耕作地として展開し、用水路を水運に利用していた痕跡を検出した。</li> </ul>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第312集

## 庄内遺跡

(仮称) 庄内さくら学園整備事業に伴う庄内遺跡第5次発掘調査報告書

発行年月日／2021年11月30日

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 明新社  
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地